

騒音のミストレス

九十欠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シンフォギアの先史文明時代。

色々妄想捗るかつての時代。

そこに型月要素を隠し味としてクロスして、玉突き事故的に変なノイズが原作6年前の時間軸に迸った結果誕生した微クロスSS。オリ主ものです。

時々、クロス先はよぎる程度です。

交わつたのも遙か過去、具体的に言うとなイーネの求愛がバラルの呪詛で突っ返されるぐらいまで、作中時代では気配ぐらいしか出てきません。

その際にオーバーカウント1999とはまた違う神秘の変遷が起きており、型月的魔術というそのものが発生しなくなってしまうため、剪定され、そこから勝手に挿し木のように世界が発展して行っている、という感じ。

クロス先の設定混ぜるのが難度ウルトラCだったから過去だけの事にしてシンフォギアテイストに柔らかくしております。

では、カストディアンとはなんぞや？ というのは作中で後々に。

初めはその気配すら見えないので、要素が見え隠れした気がしたらクスツとしていた
ただければ幸いです

更新は不定期です。

ちま、ちま、と続けて行けたらな、と頑張ります。

H30 11/25→

上の文章、書いたの、だいたい、一年ぐらい前なんです
今、FGO進んで読み直してみたら……

あれ、この世界の説明、異聞帯じゃね？

とか思ってきたんですけど

来るのか……最後のマスターが……

いや、考えてないですが……

というより、あまりに進行が遅すぎて第5部放映時どうなってることやらすねー

目次

08	ねぎ	274
07	熱伝導	239
06	惨状／参上	215
05	憂慮	190
04	芻夢	119
03	貫通	82
02	雑談（打ち上げ）	60
01	経過	22
00	破損	1

00 破損

最初に言っておく。

雑音ではない。騒音だ。

その旋律は魂の叫びであった。

それがなにを意味するため叫んでいるのかは分からない。

ただ、心の底から。

魂の。

命の。

全てを擦り潰してなお知らしめんとしているのは分かった。

そして、俺はそのために機能を一部破損した。

そのために、疑問を抱いたのだ。

これだけの叫び。

感情をありつたけ詰め込んで、言葉が通じずとも意志を介せる共通言語のように。

何かがある、と次元の壁を貫いてまで俺に訴えかけていたために。

ただ一つの祈りは。

いったい……何のために？ と。

その疑問は原動力となり。

ありえぬ筈のこととして。

俺を、そこへ赴かせたのだから。

後に知ることになるのだが。

俺には知る由もない事だが。

人は、自身さえ擦り潰しかねない魂の歌を。

——絶唱、そう呼ぶのだそうだ

そうして、宝物庫の門は僅かな隙間がこじ開けられた。

それまで、眠っていたのだろうか。

意識を取り戻し、視界に映ったその光景。

それは、地獄と呼んで差し支えないものだった。

……なんだ？

と、思わず呻いてしまうほどに。

炎。

一言で言い終えられてしまう。

付け加えるなら、瓦礫、だろうか。

そこは何かしらの建造物の内部であり。

完膚無きまでに破壊され、火災の真つ最中であつた。

しかしながら、何故、俺はこのようなところにいるのだろうか。

——呼ばれた？

自問してみると、直感でそんな答えが浮かんだ。

不思議としつくり腑に落ちる感があり、それに納得できたのであるが……しかし、誰に呼ばれたのか、何のために呼ばれたのか。というか本当に呼ばれたのか。直感には根拠がないためさっぱり分からない。

「ギギ……ギギ……」

なにかの、うめき声のようなものが聞こえる。

瓦礫になったせいで悪くなった足下に悪態をつきつつ、炎を避けて呻き声の方角を見通せるよう移動すると、奇妙な光景を目にする。

「ギギギギギイ……ッ！」

なんだろうか。

大きさは子犬程度だろう。

白い、目も鼻もない深海魚。確かワラスポと言ったか？

それに手足の生えたような……奇怪な生き物が呻き声を苦しげに漏らしつつ、どんどん縮んでいくのだ。

予想するに、実際はもつと大きかったのだろう。だがしかし、俺が発見したときには既にこのサイズであり、さらにはどんどん縮んで行っている。

……なんだ、これは？

考えても、分からないものは分からない。

そのまま観察していると、手の平サイズの胎児の様な姿まで押し込められて、全く動かなくなってしまうた。

もう、ウンともスンとも鳴きもしない。

ピクリともしなくなってしまうため、こちらとしても気にはなるが優先順位を下げざるを得ない。

目下、情報が欲しいのだ。

ここはどこなのだ。どうしてこんなに荒れ果てているのか、なぜ火事なのか。今の生き物はいつたいなんだ、と挙げてみればきりがない。

兎にも角にも現状を知りたい。

などと、思ったより自分は冷静さを失っていたらしい。

縮んだ怪物より視線をあげると、何より気付かねばならない事柄に遭遇していたことに、反応をだいぶ遅らせてしまっていたのだから。

大丈夫か！

思わず怒鳴ってしまった。

それほどに大丈夫ではないものを目にしてしまったのだ。

どうして今まで気づいていなかったのか、目の前には満身創痕の少女が膝を折り、呆然としていたのだ。

美しい少女だった。

だが、その美しさも痛々しさに塗りつぶされてしまっている。

体の内部にも余程のダメージが浸透していたのか、七孔噴血という有様——致命傷だと諦めてしまいかねない程酷い流血が彼女を赤く染めている。

本来なら整っているであろう顔立ちが、流血で真っ赤に染まった瞳のせいで凄惨な有

様になっていた。

大丈夫だ、助けにきたぞ、安心してくれ。

現状が何も分からないのに何を言っているのだ、と俺の冷静な部分が文句を言っているが知ったことか、まずは彼女を安心させねばならない。

だが、俺の意図とはまるで魔逆に、彼女は俺に対して表情を歪ませた。

「ひっ……嘘……なんで……」

俺は余程険しい表情でもしていたのだろうか。

まだ年若い——幼いと言つてもい少女が怯えるほど俺は強面だっただろうか。

若干シヨックを受けつつも、俺の聴覚は罅入るその音を逃しはしなかった。

天井が、崩落する。

が、躊躇などするわけもない。

踏み込んだ足は床下を粉碎し、その反動で跳ね飛ぶように少女に向かう。

当然、彼女は俺の勢いに恐怖を感じたのだろう。

身を竦ませるが、このままでは瓦礫の豪雨に巻き込まれる。俺の顔が恐ろしいなどと言ふ文句は後で受け付けるとしよう。

即座に彼女を抱き抱え、地を蹴り、再びその場を離れる。

刹那。

轟音と共に背後で天井が崩れ落ちたのはまさに間一髪であった。

……いや、大丈夫だとは思ったが、ギリギリだったな。

「ひい、え、ええ!?!」

いや、喋っただけでそこまで怯えないで欲しい。その怯えを軽減するための軽口だったために、全く功を奏していない。

シヨックが上積みされた感じだが、人一人救えたのは我ながら感動がこみ上げる。

だが、情報が欲しい問題に対する解決は全く進んでいない。

幸いにして正面、先ほど少女が居た後ろには情報源になりそうな人物が居る。

二人だ。

一人は自分が抱き抱えている少女より少しだけ年上の少女だった。

目鼻立ちが似ている。おそらく姉妹だろう。

そして、二人の保護者だと思われる妙齢の女性が一人。

情報はこちらが期待できるだろう。

しかしお互いこんな状況で初対面。信用などされる筈もない。

それよりも先に、七孔噴血している少女をまず治療しなければ。

一歩。

二人とも合わせて一歩下がる。

待て、俺は成人女性にまで怯えられる程なのか。

二歩。

「セレナ！」

「待ちなさいマリア！」

なんと、こちらに向かおうとした少女を女性が引き留めた。

ふむふむ。こちらの少女がセレナで目の前の少女がマリアか。

などと現実逃避して状況分析してしまうほどにシヨックである。

保護者が子供を引き戻すほど俺は不審者か。

まずはこの子の治療だ！

と半ば怒鳴るように言ってしまったのは憤りもあつたからかもしれない。

そうして踏み出した三步目は。

地の感触がなかった。

正しくは、“足の感触がなくなっていたのだ”。

咄嗟に残った足でバランスをとる。

視線を下ろせば、黒い炭の固まりが見えた。

——まさか、これが俺の足のなれの果てなのか

あり得ないはずのことなのに、この発想は間違っていないと思つてしまった。

何故なら——

ああ。時間切れか。

と、納得してしまったからだ。

自分で思ったことであるにも関わらず、それはいつたい、何の時間か——と疑問を覚え

さらなる事態と驚愕が畳みかけるように俺を襲ってきた。

身が沈んでいく。

さっきのように下から炭化しているのではない。

いや、炭化崩壊は進んでいる。ゆっくりとだが、先程崩れ去っていた足がさらに加速して腰まで崩壊が進んでいるのが感覚で分かる。

それと同時に。

文字通り、体全体が地面に沈んでいくのだ。

それも落ちるような速度でだ。

一体これは何だ。

水に潜るものと何も変わらない。

地面に対してそんなことあつてはならない。

まずい。

せめて、せめてこの子だけはこの道理を無視した現象から助け出さなければ！

咄嗟に腕の中の少女、セレナと言ったのだったな。を抱え上げ、目の前のマリアに託そうとする――

前に、両腕が真つ黒に崩れ落ちた。

少女が、セレナが俺の腕だった炭から落下する。

なっ!?

地に激突すれば、こんな瓦礫の山だ。重傷のセレナは致命傷になりかねない。

だが、その心配に限って言えば杞憂だった。

瓦礫に激突すると思いきや、セレナの身が俺と同様、抵抗もなく地に沈み込んでいく。

お、おのれ、くっそおおおおおお！

「セレナあああああああー！」

抵抗むなしく、俺とセレナは地に飲み込まれ、ただ絶叫が響き。

視界は暗転した。

コアモジュールの回収完了

搭載予定の筐体に異常無く取り付け完了

筐体に待機指示

次期指令の下賜まで活動を休止

コアモジュールに規格未登録の関数を確認

起動後の活動時、作戦へ支障の可能性、上限値の予測不可能

対処命令。コアモジュールを摘出、ルーチンの規格統制後、再搭載

拒絶確認

摘出不能

修正不能

一時保留不能

廃棄不能

破壊不能

排除不能

—— 関数による筐体の改竄を実行

ロールアウト

起動実行します

とかなんとか。

よく聞き取れなかったし、聞いたところで分かり難い業務的な連絡だった気がしたのだが。

兎角、俺は変なところに立っていた。

なんと言おうか。

手が鰻の様になっている、頭にウサギ耳のようなものがある。などなど、珍妙なところはあるが、だいたい人型のそれがずらりと整列しているのだ。

微動だにすらない。

まあ、いい。後だ。

セレナを見つけないければ。

すぐに見つけないければ命に関わる。

あれはそれ程の重傷だった。

——何故、俺の手足が戻っているのかなどは、後で良い

幸い、彼女は俺のすぐ近くにいた。

駆け寄り、脈をはかる……弱々しい。

呼吸も浅く、多い。生命維持が困難になってきている証だった。

なにも事態は改善してはいない。

彼女は相変わらず死に瀕していた。

何とかしなければ……と。

周囲を見回すが、先ほどの人型がずらりと並んでいるだけで何もな、なにも……なんだあれは。

ガラクタ、としか言いようのない積み上げられた山がある。

人型の隙間をすり抜け、辿り着いた俺は第一印象を裏切るすさまじい実態に絶句したのだった。

それは至宝であった。

こんな無造作に積み上げられているもの、一つ一つ。俺がガラクタなどと思ってしまったがとんでもない。

その美しさ、適切に扱えば俺の目など潰れてしまうのではないかと思える調度品、神々より賜ったではないかと思えぬ気配を放つ武器。

未だ瑞々しい潤いを保っている未知の果実などなど。

何故こんなものが、ということよりも、この中ならばセレナを救う手だてがあるかもしれない。

俺はそんな希望を抱いた。

時間は限られている。

俺は至宝の山へ駆け寄り、何か手だてを探すため、まずは彼女を安静にできるところへ寝かさねばと周りを見回し、豪勢な寝台と思わしきものを見つけた。ひとまず、彼女を横にしよう。

低反発で、かすかに彼女が沈み込む程度の緩衝素材。

これならば、どこかに負荷がかかることもあるまい……。

と、一安心して気付く。

寝台に。粘土板が添えられている。

ふむ。

俺は戦士ではあったが、幼馴染みが巫女だったから何故か一緒に読み書き計算を教えられてたからなあ……もう、粘土版は見るだけでうんざりである。

だが、それもこれを読めた事に繋がるなら、やっておいてよかったと思えるだろう。

なになに。

ここに対象を寝かせた後。

この、寝台の横についている三つの操作盤で設定する、と。

三つの操作盤はそれぞれ、三つの円とその中に正三角形が頂点を円に接するように描かれている。

中央にはそれぞれ三角形の頂点へ向かうカーソルが三つ集まっている。

そして、その頂点にはそれぞれ。

あっさり。ふつう。こつてり。

甘味。塩味。酸味。

コシ、やわらか、特殊行程素材。

などと記されているので。

三つの割合から好みにあわせてカーソルを移動……と。

そしてレバーを引く……。

ああ、これか。

すると？

ガツコン、と仕掛けが発動し、セレナの眠る寝台に覆いが被さっていく。

で、次は――

一気に読むなど俺には無理なもので、順番通り目を通していく。

説明の最後の一文、それは俺の思考を一気に吹き飛ばすものであった。

そう。

後は待つだけで、指示した通りのほつかほかのお食事が提供できま……なんて書いて

あああああああああああああああああああッ!!

あわてて覆いを吹っ飛ばして彼女を救出した。

親切にも粘土版が添えられている至宝を片っ端から漁り、なんとか彼女を安定させるに至る苦勞は想像を絶したといえよう。

それをこの場に記すと粘土板数百枚の大長編に至ってしまうため、省かせてもらう。

寝台（本当に寝台）で安らかに眠るセレナを見て、次は榮養だな、とある果実を拾う。

一応説明を一読。

『元氣になりすぎて人間を止めます』

うん。ボツだボツ。

果実を投げ捨て、しばし悩む。

ふと、目に映ったのはセレナを調理しかけたあの寝台もどきだ。

消化に良さそうなものを適当に作って彼女のところへ持つて行く。

本当に……・何でも調理できるんだな！。

達観しつつ、掬うための匙を探して……おお、あったあった。透明な封に入っている。

何でもあるなここ。ちゃんと密封してるからきれいだし。

なんてしていたら。

セレナと目があつた。

いや、前から視線を感じていたのだが……。

観察し、状況を判断していたようだ。

まだ幼いであろうに、余程過酷な人生を送ってきたのだろう。

まあ。

空腹だろうし、食事をとれば警戒も減るだろう。

……毒、とは思うまい。と、思いたい。

なにせ、意識を失っていたときなら混ぜ物などしなくても色々盛り放題だしな。

そうして。

目が合ってしまったため狸寝入りが出来なくなつた事を観念し、身を起こしたセレナに粥（つばい）を差しだしてみると、恐る恐る受け取ってくれた。

彼女は、手に持った粥と俺を何度も見て……。

ぼつり、と一筋の涙をこぼした。

予想外の反応に身が竦む。

俺はやっぱりそんなに怖いのか。そこまで人相が悪いのか、と。

「なんで……？」

ぼつりと、彼女がこぼした。

俺はじつと聞くことにした。

吐き出させた方がいい、そう思ったからだ。

「今まで、誰も助けてくれなかったのに……大人たちはみんな、私達のことを実験動物か何かにはしか見ていなかったのに……どうして——？」

セレナが俺をみる。

「どうして今更、よりにもよってノイズが助けてくれるの……？　こんなに、こんなに優しくしてくれるの……？」

今まで、人の善意、というものから縁遠い場にいた為だろう。

人の善意が信じられぬ訳ではない。彼女自身の性質から、善よりの存在であるのは確かだからだ。

あの災害の場にいた、恐らく姉。彼女と身を寄せあい、つらい境遇に耐えてきたのだろう。

本来庇護すべき大人が、彼女を守ってこなかったのだ。

故に、与えられる善意に戸惑っているのだろう。

ところで。一ついいだろうか。

「首傾げてる？　……もしかして、自分がノイズだって気付いていない？　いや、あの、

でも、自分がノイズだってノイズが自覚しているのかは知らないけど……」
そう。それだ。

ノイズってのは一体……なんなのだ？

いや、意味は分かる。雑音と言う意味や、不要な情報と言う意味があるのは知っているが。

人に向けるには失礼な言葉な気がするのだが。

えーと、えーと、と、セレナは周りを見回し、至宝の中から顔が映るほどピカピカに磨かれた金属板を取り出し、俺に見せた。

………なんだ、これは。

そこに映っていたのは、星だった。

星形の何かが立っている。

中央には、あちらで整列している人型同様、緑色にぼんやりと輝く板が丸くはめ込まれている。

ああ、うん。

星と言ったがそんなに体裁のいいものではないな。

これは海星だ。普通の海星と違ってなんか立ってるけど

え？

何故に？

何故俺が海星になってるんだ？

え？

ええ？

絶叫した。

「え？ やっぱり気付いてなかった!? うん。今ものすごく驚いてるのは分かるよ、ごめんなさい、そんなに驚くなんて思ってた！ あ、助けてくれてありがとう。このご飯もありがとう……ん、あ、おいしいよほら」

庇護すべき幼い少女に氣遣われながら、俺は俺の姿が映ったものの前で立ち尽くすことしかできなかった。

ところで。疑問は解決してない。

ノイズとは、いったい……何なのだ？

01 経過

あつという間に四年が過ぎた。

俺とセレナは相変わらずここ。至宝やらが転がっていたりノイズが整列している謎空間で暮らしている。

食事の問題はあの機械があれば解決するので、過ごすだけなら何とでもなるのである。

あれから色々あった。

俺がどれだけ叫ぼうが怖がられる理由は、俺がノイズとやらだからだけではなかったのだ。

俺は一切、言語を発していなかったのだ。

そりゃ、どれだけセレナの救命を叫ぼうが誰も近寄らないわけである。

セレナが言うに。

俺が喋っている、と思っている時は何やら叫んでいるらしく。

セレナの真似を見るに。

「へアツ！」

「ジエアツ！」

「ジュウウウアアツ!!」

と言う塩梅らしい。

顔から火が吹く、とはこういう事だと悟った。

俺はマリアともう一人の女性に対し、セレナを抱えてそんな風に叫んでいたのである。ああ……穴があつたら入りたい。

そんな風に顔を抱えてのたうち回る俺をセレナは腹を抱えて笑っていたのだが、このような関係に至るまで、実は暫く掛かった。

何せ俺は見た目が人など食い殺しそうなバカデカイ海星である。

しかも意志の疎通が出来ているのか居ないのか、怪しいことこの上ない。

喋る、と言うか基本叫ぶのでびっくりする事が多い、などなど。

そもそも基本、セレナは海星どころか人間不信に陥っているようにも見えた訳なのだが……まあ、ここに他の人間がいなかったため、確信は持てないのだが。

彼女と出会った場所。ワラスポの様な怪物が暴れていたあの場所で、彼女の近くにいた人間はマリアと成人女性が一人。

他の大人達は遠巻きにこちらを眺めるだけだった。

大体にして、怪物の一番近くにいたのが彼女だと言うことがそもそも、人として間違っている。

きっとまともな大人に、普通の子供として接してもらえなかったのだ。

ならば、必然、年齢に不相応な防衛反応を起こしても何らおかしくはない。

さて、それを踏まえた上でだが。

俺とて、怠惰を貪っていたわけではない。

彼女にとつて頼れる保護者となれば、安心感を与えられるであろう。うん。きっと。

うむ。だが海星だが。多分。

その第一歩として、なんとか彼女と詳細な意志疎通を図るべく俺が考えたもの。

それは――

「えと――なに、それ？」

俺が差し出したのは我が名を示した粘土版。

手近なもので削って文字を表し、筆談を試みようとしたのだ。

本来ならば、筒状の物に文字を刻み、それを粘土版の上に転がすようにして転写するのだが、記録・保持するならば兎も角、筆談するだけならば直接記述した方が手っ取り早いし良いだろう、と言う判断だ。我ながら良く考えたものだと思いたい物である。

だが……。

「……よ……読めない……」

なんと言うことだろう。

「じゃあ、これ読める？ 私の名前なんだけど……」

……あ、分かん。無理だこれ。

示された読めない記号の羅列に、俺は首を振った。

そう、文字ですら二人の共通項ではなかったのだ。

……ん？ 文字、と言うか言語体系が全然違うのに、彼女の言葉が分かるのは何故だろうか？

その理由は分からなかったのだが、試行錯誤の結果、結局一周回った俺が彼女に意志疎通を試みる術はジェスチャーによるボディランゲージ、ないし粘土版に壁画の様ないラストを描いて伝えるしかない、という顛末となったのである。

ただ――

「なんでこんなオーバーテクノロジーの塊があるのに、たかだか紙つぺらがただの一枚も無いの!？」

粘土版と一緒に掘っていたある日、いきなりセレナがキレた。

……よく分からないが、彼女の文化圏では、粘土版で記録を取らないらしい。

うむ。さすが我が故郷。あらゆる事項で最先端である。

なお、何やらの塊とはあの食料製造装置の事を示すのだと思われる。

しかし、ここは文字通り宝の山なのだが、とことん暇である。

何せ、セレナにとって使いどころか用途すら分からない宝の山なのだ。

マニュアルは俺が読むことが出来るが、その詳細をセレナに伝えることは出来ない。

何とももどかしいのが常なのだが、二人の関係は良好だ。

暇であることは変わらないため、前々から何か遊技板制作をひっそりやっていたセレ

ナが、オセロなる遊びを提案してきた。

縦横に等しく区切られた盤面に、白と黒で表裏となった駒を交互に一枚ずつ配置し、

陣取りをする遊技である。

この陣取り、おもしろい性質があり、配置したとき既に配置されている自陣色の駒と

挟むと間の駒をひっくり返し、自分の陣地の色へと変えることが出来るのだ。

中々に戦略眼を育てることの出来る遊技である。

しかし、ここに致命的な問題が生じた。

この手の遊技は実力が拮抗するもの同士が相まみえれば白熱し、楽しめるのだがいかんせん、経験も適正も俺にはとことん無かったのだ。

セレナが振るう駒に取り囲まれた我が駒一つ、なんて結末なら可愛いもので、敢えて

勝敗が決したときに図画が描かれるように配置したりと、次第に遊び始め、頼れる保護者など、夢のまた夢のような状態になってしまった。

これはいけない。何というか、一勝も出来ないのだ。

ずっと我ながら研鑽し、打ち方を研究しているつもりだが、我が進歩が牛歩なのか、セレナが遙か先にいるのか、遅々として実力差は縮まらず、結局セレナが飽きてしまったのだ。

数少ない、簡単なジエスチャーでルール説明が出来たゲームが早くも飽きてしまったため、手持ち部沙汰で呆、としてしまう俺たちであった。

これはまずい。二人ともボケてしまう。

どうしたものか、と考えていると全身の輪郭が淡く光り始めたかと思えば、ぼう……と体全体がぼんやりと光に包まれていく。

最近、やけに多いな、と思う。

これは初めてセレナとこの場にきたものと同じ現象、つまり転移の兆しだ。

俺はこれからどこかに送られるのである。

「行ってらっしゃい」

尤もこれは初めてではなく、セレナも慣れたもので、手を振って見送ってくれる。

初めてこの現象が起きたとき、セレナは世界の終わりではないかと言わんばかりに、

一人にされるかもしれぬ恐怖に狼狽し、俺もどうにも出来ないし、二人して醜態をさらしてしまったものだ。

当時、セレナも慌てに慌て、俺の醜態どころではなかったたので、彼女の中において俺は冷静に対処を考えていた保護者、と言うことになっている（はずだ）。

まあ実際、俺も子供を一人にするわけにもいかないとだいたい焦ったのはここだけの秘密だ。

そして、転移の兆候が現れているのは俺だけではない。

ずらりと整列しているノイズ達もまた、光を放っている。

そのすさまじい数に、空間そのものが光を放っているようにも見える。忌々しい。

この場においては全く何もせず立っているあいつ等は——
外に出るや、自滅と殺戮を一挙に繰り出すのだ。

暗転した視界が復帰した瞬間、様々な情報が一挙に押し寄せる。

それは、周囲を確認すると同時に自己の状態が万全かを確認するには十分である。
青い空。

土の香り。

全身を撫でる風。

そして、響き渡る怒声。

以上を持って、味覚を除く四覚を一挙に確認。

続いて、自分の置かれた状況を確認。

オセロ板面の様に規則正しく縦横に揃えられた俺を含むノイズの集団は一斉に前進を開始。

前方には、緑色の衣服を揃えた集団がこちらに対して陣形を構えている。

この国の防衛を担う者達だ。

かつて、俺がまだ幼かった頃。故郷は魔獣の軍勢によって存亡の危機に晒されていた

た。

たくさんの兵士達がその驚異から家族を守るべく王に率いられ戦ったのだ。

俺はそんな話に出てきた祖父と父を誇りに思い、自分もまたそんな戦士になりたいと奮起したものである。

それがどうだ。

現状を見るが良い。

人々には帰るべき幸せな平穏が、日常があるというのに。

俺が——その脅威になって居るではないか。

初めて、呼び出されたとき。

ようやく動き出した俺以外のノイズがしたこととは。暴挙と言える集団自殺と大量殺戮であった。

襲われている人々は、ノイズが殺戮するべく向かってきていると思っただろう。

俺も、初めはそう思っていた。

だが、違うのだ。

外で活動するノイズを目の当たりにし、そこから伝わってくる感情のような者を肌で感じたのだからこそ、それが刺さるほどに分かる。

ノイズ達にあったのは、狂おしいまでの死んで楽になりたいという——ただそれだけ

の願望でひたすら突撃しているのだ。

ノイズは人に触れれば炭化し、死ぬことが出来る。

なんと身勝手な。

それで、何も知らぬ無辜の民を道連れにするというのか。

身勝手に我が儘極まりないこの習性。

俺達を送り込んでいる何者かにとっては、ただひたすらに人を殺し続けるために都合がよいのだろう。

ふざけるな。

ならば、俺がやることは決まっている。

たった一つのシンプルな事だ。

ノイズを呼び出し、人々の平穩に対する脅威であるノイズの行為を、ノイズとして呼び出された俺自身が妨害するのだ。

ふんっ！

実際には何か雄叫びを迸らせているだけであろうが、この場合なら意味合いは合致するだろう。

その事実が何となく苦笑を浮かばせる。

腕を振り回した。

……俺の体は、海星なので正五角形の角へ放射状に頭と手足が等しく伸びている。それ故に、手足の感覚は以前自身が使っていたものに比べていささか短すぎる感が否めない。

だが、充分だ。

違和感による誤差を経験で修正し、振り抜いた腕を叩きつける。

硬めのゴムを殴りつけたような感覚。

しかし、ゴムというのは不思議なものである。

硬いのに、弾む。滑り止めにも有用だ。

セレナに教えてもらうまではそのような物があるとは知らなかった。

そしてまさしく、ゴムボールの様に薙ぎ払ったノイズが弾け飛んだ。

対フレンドリー・ファイア効果判定・有効

脳裏によぎるメッセージ。

ノイズを張り倒す度に執拗に耳を撫でる不快な囁きは、流石に何度も繰り返されれば意味が分かる。

ノイズ同士では攻撃が有効ではない。と言う事だ。

蹴ろうが殴ろうが、ゴムのような感触を残すのみで弾け飛んでいく。

要は、ノイズ同士の行動で数を減らすことはないのだ。

ほとほと人間を殺す為に効率的に出来ている、と言うことなのだろう。
だが。

直接叩けなくても、やりようはある。

殴り飛ばしたノイズが木の枝に突き刺さり、炭化する。

このように何かにつけたり、俺自身が武器を用いて叩き潰せばいいのだ。
はあっ！

その場に思い切り足を叩きつけ、その反動でめくれあがる地面。

梃子に跳ね上げられたようにノイズ達が宙を舞う。

何か長物が調達できればいいのだが、生憎ここは山中で木と土と石しかない。

木を引き抜いて振り回すのも良いときはあるが、山中では長すぎる、取り回しに少々不便なのだ。2mぐらいの長柄のものが丁度良いのだが……。

大きめの岩を頭上に持ち上げるとそのまま上に投擲。

バク転の要領で足を振り上げ、頭上の岩石を粉碎。足が自己の感覚より短いので少しずれてしまったが、及第点レベルで真芯を捉え、砕けた破片が放射状に上昇していく。

散弾と化した岩石片が空中で身動きのとれないノイズ達を次々と炭化させた。

ふむ。このやり方ならばそこそこか。

地面が碎けるから移動しなければ繰り返す事が出来ないのが難点だが。

「煤けた風が舞い降りる中、ノイズ達と相對していた兵士達が、俺を指さしている。それも致し方ない。」

今の挙動では、いきなりノイズが噴水のように吹き上がったとしか見えまい。

その中心に、他のノイズと違って海星型のノイズがいれば注目されるのも――

「いたぞ！ ラツキースターだ！」

「よっしやあ！ 生き残れるかもしれねえ！」

「いつつも大体一体しか居ないよな」

「とりあえず援護しとけ！」

「ノイズなんて援護したら始末書じやないっすか？」

「阿呆抜かせ！ たまたまラツキースターには当たらねえだけだ！」

「そうっすね！ ノイズはすり抜けるっすから、当たらないだけで、仕方ないっすね！」

ああ、そつちの類だったか。

ノイズの殺戮を妨害している割には毎度毎度出撃要員に混じっている俺だったが、いっつか人々の――それもノイズと戦っている者達からは他の個体にはない形状も相まって、識別されるようになってきた。

前線にいる者からは、何故かノイズを攻撃するノイズ。もし居たのなら兵士の生存確

率が跳ね上がる『ラッキースター』とかいう渾名で。

いやまあ、俺は叫ぶだけで口を利くことが出来ないため、勝手に名付けられるのは致し方ないことだが。

いくら形が似ているからと言って、海星を星扱いするのは如何なものか。

謎なのは、スターという単語が星を意味する言葉である、と言うのが分かる事である。本来自分にはないはずの知識。

分かるものと理解できぬものがある。

この差はいったい何なのか。

首を振る。思考を余計なことに割り振るとはなんたることだ。

テンションの上がった兵士達が銃を構えて俺の周囲のノイズを威嚇すべく発砲してくる。

銃を知っている理由は出撃頻度で察してくれ。

だがノイズに対し、銃弾が効果を発する事はなかった。

その身を弾丸がすり抜けていく。

セレナとの世間話（会話が一方的にしか通じないため、殆どセレナの独り言に相槌打つてる形になっているのがなっているのが悲しい）にあったノイズの機能である。

要すると、自己の存在密度を操作し、相手の攻撃をすり抜けるという代物だ。

当たらなければあらゆる反撃は意味をなさない。

一方的に人間を殺戮するための機能としてはこれほど有効的な物はないだろう……と、その時。

ひゅんっ……と。

流れ弾が体をかすめる。

その件についてなのだが、俺はすり抜けるやり方を知らない。

そして、兵士達の攻撃は、基本ノイズをすり抜ける。

人間に触れて炭化させるときのみ実体化するので、基本効果なしだが、当たれば儲け物だと言わんばかりに数で押しつけてくる。

最後に、兵士達は俺がその機能を使えないとは思っていない。

それはそうだろう？

実際あんな物、見てかわせるし、風切り音や殺気で大体の軌道が読める。軌道が正確なだけに、弓より躲しやすいくらいだ。

しかし結果だけを見ると、好意的に見ている筈の俺にだけ効く攻撃しかけてきているのだ。

何かが釈然としない。

彼らも俺がまさか避けているとは思わないため、効果無しと思われているのだろう。

もの凄くやるせない。

あとこのすり抜け機能。

どう言うわけかノイズ同士では働かないらしく、俺が得物で殴りつけたときも発動しない。

判定がいまいち分からないが。まあ、殴れるので殴る、という効果第一の行動をとっていたりする。

さらに。

俺が素手で殴り。

対フレンドリー・ファイア効果判定・有効

対フレンドリー・ファイア効果判定・有効

対フレンドリー・ファイア効果判定・有効

ああ、非常に鬱陶しい。

そこに、数撃てば当たる、と飛んできた弾丸がノイズを打ち砕いた。

そう、何故か、俺が殴っても効かないくせに、殴りつけると透過機能が機能不全を起すのだ。

兵士達が撃ってきたならこれ幸いに周りのノイズを殴って殴って殴ってたまに蹴る。

すり抜けられなくなったノイズを兵士達に攻撃させるとあら不思議。俺がやるより

遙かに効果的にノイズを殲滅できるのだ。

これが最近、一番効率の良い戦い方だったりする。

なんだかんだ言っても、道具を使った方が効率がいいに決まっているものであるし。気を付けなければ行けないことは思ったより弾むので誤って兵士達に向けて飛ばさないことぐらいである。

蛭のような見た目で這いずってくるノイズを蹴鞠の様に無造作に吹き飛ばし、続いてそれに腕が生えたような個体に拳を埋め込む。

力の加え方で、飛び方がある程度操作できるのだ。

これなら、拳がめり込んだ分が歪曲して戻るまでの数瞬、ラグがある。

無造作に頭を傾げると、それまで頭があったところを弾丸が通過し、跳ね飛ぶ直前だったノイズを炭と散らし消し飛ばす。

いいな、この連携。

さあ、もつと撃つてこい。ノイズ潰すには丁度いい。

だが、いざ望むと全然やって来ない。

おいおい、折角盛り上がったやる気が……と振り向けば、兵士達は一齐に引いて行っている。

ふう。終わったか。

何が？

そう、文字通り、死に物狂いで奮戦している兵士達は悪いが、彼らは民草にノイズが襲いかからぬよう抑える時間稼ぎに過ぎない。

ノイズ達は確かに、人間の天敵と言えるが、人の側にもそれに特攻する存在と言うものはあるのである。

空より、風を叩く音がする。

楓の種子のような羽を回転させる鋼の鶏——セレナに粘土版で掘って見せたところ、へりと言う名なのだという——が二人の少女を吐き出した。

彼女達は——歌う。

「Crois^人al^死ronz^しell^てGun^戦gnir^とziz^生z^きl^る」
 「Imy^羽ute^撃us^きam^はen^脱oha^くba^風kiri^切tron^る」

その調べと共に、閃光が瞬き、一瞬のうちに二人はその瑞々しい肉体にフィットした鎧姿に換装を終えていた。

方や情熱の紅、槍を構える少女。

対になるように、背をあわせ刀を抜き放つ蒼き少女。

彼女達は、歌を奏でながら烈火の如き猛攻でノイズを蹂躪する。

その歌は、戦意を高揚させる。

ノイズの頭を直上から小突いて地面に激突させる反動を用いて直上へぼーんぼーんと跳ね上げながら俺は聞き入っていた。

歌は良い。

たとえ同じ伴奏、同じ歌詞であろうと、魂がそのまま形になるような、訴えかけるものがある。

この調べは——猛き戦士のものである。

ならば、今戦場にある身としてはまさに。

——まさに鼓舞されているようではないか！

良き音楽をその身に受ければ、自然と調子に併せて体が動くものである。

思わずたまらず身が動く。

ふん、ふん、と鼻歌を漏らしながら打楽器のノリでノイズをシバいていると、刀でノイズを斬り裂いている方が俺の方を見て目を見開いた。

どうしたのか、と耳を澄ませていると。

「奏！ 奏！ あのノイズ、奏のリズムに併せて踊ってる!？」

……。

いや、踊っているのではなく、原始的な音楽——打楽器（ノイズ）で伴奏を加えているつもりなのだが。

「はあく？ イヤだなあ、ノイズが普通、踊る訳ないだろう？ あの変なのじゃないんだし翼つたらなあに言っ——あ」

その時、偶然俺と彼女の視線が交錯した。

ぶつちやけ、俺の目つてどこにあるのだろうか、そもそもどうやって視界確保してんだらうと言う謎があるが、兎に角。視線が交わった、気がする。

「あれつて、いつもの星野郎じゃねえか！ あん——の、いつも、いつつつつも奇妙な踊りでおちよくつて来やがる！」

いや、賞賛しているんだが。

むしろ体が抑えきれず動き出してしまった程その音楽に魅了されているのだが。

「いつまでそのスカした態度とれるか見てやろうじゃねえか！」

——来る！

大技の気配だ。

『STAR DUST ∞ FOTON』

気合い一拍、振りかぶった槍を投擲、その数を爆発させる。

ちなみにこの二人の少女、先の彼女の言うとおり、ノイズの群と一緒に呼び出されればかなりの割合で遭遇するのではや顔馴染みである。

槍を振り回し、ノイズ殲滅へ凄まじい気迫を発している紅の少女が、奏。何故かその

気迫が俺に限ってさらに跳ね上がっている気がする。

精妙に刀を振るい、ノイズを斬り捨てていく青き少女が翼。どこことなく引つ込み思案な印象を受ける。

その、正反対ながらも息が完全に合っているところが、お互いに寄せる信頼感が抜群であることを示していた。

名前を知っている理由？ 割と近くで暴れていると会話が良く聞こえるのだ。

彼女らの歌に魅了されている身とすれば、近くにいなければ良く歌が聞こえないため、自然と近くで暴れるようになる。

結果——お互い印象を抱くに至る、と言うわけである。

豪雨の様に降り注ぐ無数の槍に俺は感激する。

おお、何という采配！

これぞ待ち望んでいた武器ではないか！

周囲のノイズを次々と打ち砕いていく槍のうち、俺に向けて投げてくれた一本を受け取り、一振りの感触を確かめる。

見事だ。重心、質量、好みの槍である。

「おあ!!? あたしのガングニイイイイイるうツ!!?」

俺もまたノイズを砕いていく。

これだ。

自らの手で敵を打ち倒す感覚。

これを待ち望んでいたのだ。

俺の望んでいる支援を迷わず放った奏に感謝し、今までは手を出しにくかった大型ノイズを頭頂から真つ二つ、縦に引き裂く。

「ねえ、奏、奏！ あのノイズすっごい喜んでる！ 奏にお礼言ってるように見える！」

「は？ あ、ああ？ ああ、あ、あああああッ!? あんにやろおおおおお！」

「奏落ち着いて、そんなにムキになっても意味ないって分かってるでしょ、表立って言うる事じゃないけどむしろ協力的なんだから！」

「分かってる！ 分かってるけどさあ！ むしろ倒せても労力に見合わないって分かっているけど、あいつ、あたしの GANG ニール（分身）振り回して、うっわ、ノリノリなつてやがるううううう！」

「あ、ちよ、待、奏えー！」

「あ、出ちまった。まあ良いッ!! まとめてブツ飛べええええええええええ！」

『LAST∞METEOR』

その一撃は、見事であった。

奏の槍から繰り出されたのは竜巻。

決めに入ったのだろう。

一気に広範囲を消し飛ばす。

絶妙に互いの隙間を縫う、折り重なった乱気流はノイズ達から逃げ場を奪い、殲滅し
尽くしていく。

かく言う俺も風切音から流れを先読みしなければ、粉微塵にされていた筈だ。

縫うように何度も姿勢を切り返し、風の合間を縫うのは至難の業であった。

竜巻が収まり、ノイズを一体残らず殲滅した大地に着地する。

……あ、俺が居るから全滅ではないか。

ふう。

ガラランツと金属音。

見下ろせば、奏から借りた槍が転がっていて、光に消えていく様子が見えた。

何故落ちたのか——そう、槍を持っていた俺の腕が炭化し、崩れ去っていたのだ。

時間切れもあるだろうが、流石に対ノイズ兵装を手にするのは無理があつたのだら
う。

ポロポロと加速度的に崩れゆく体を確認しつつ、二人の少女へ向けて、最大の敬意を
示す。

この国の戦士達がしていた、手刀を額で斜めに掛ける仕草である。

「あ、これはどうも。でもそれ、手が逆……ああ、片手だもんね」

「いや、翼？ なに普通に対応して——て。へ？ あ、お前ちよつと待てって、もう時間切れかよ！ あ、ああ、ああああああ、また勝ち逃げされたああああああ！」

うーん……。そう言つて貰えるのはありがたいのだが、体が崩壊始めたら一気だから止めようがないのだよなあ。

奏の叫びを耳にしながら、俺の意識は肉体と共に崩れ去つたのだった。

コアモジュールの回収完了

搭載予定の筐体に異常無く取り付け完了

筐体に待機指示

次期指令の下賜まで活動を休止

コアモジュールに規格未登録の関数を確認

起動後の活動時、作戦へ支障の可能性、上限値の予測不可能

対処命令。コアモジュールを抽出、ルーチンの規格統制後、再搭載

拒絶確認

摘出不能

修正不能

一時保留不能

廃棄不能

破壊不能

排除不能

——関数による筐体の改竄を実行

ロールアウト

起動実行します

とか、最早慣れきる程に何度目かの反復を終え、今回もなんとかかんとかし。

ただいま。

「あ、お帰り。今日はどうだった？」

いつもどおりだな。

「これからご飯なんだけどうする？」

自分は食べることは出来ないが、卓には同席しよう。

セレナの待つ居住空間に帰ってきた。

相変わらず、会話が通じないので、セレナにとっては独り相撲だろう。

だが、俺達はいつものやりとりを何となく、大切にしていた。

たとえば言葉が通じなくても、同じ仕草を返すことでいつものやりとりであることが実

感できる。

美しい旋律が耳に届く。

それは、セレナが奏でるものだった。

その身には先程も見た、身にフィットした軽鎧が纏われている。

そう——彼女もまた、ノイズに対抗する力を有しているのである。

そう考えると、彼女と出会った場の胡散臭さから、何をしていたか……おおよそでは

あるが察する事が出来るものだろう。

そして、ノイズに抗する為にある力で彼女が何をしているのか、たとえば、ごく一般

的な人型ノイズを抱えている。

不思議なことなのだが、俺達が生きる空間において、ノイズは人である筈のセレナに

襲い掛かって来ない。

故に、ノイズと戦うための鎧を展開する必要はないのだが、やはり、生身でノイズに

触れるのは避けたいものであるらしい。俺には容赦なくどついたりしてくるのだが。

ノイズを一体抱え、ごろんと装置に寝かせて蓋を被せる。

「今日はどんなのに、しようかな」

コンソールを吟味し、一つ一つ命令を入力していくセレナ。

その間も、歌は流れ続ける。

彼女らが身に纏うこの鎧は、歌を力の源としているのだという。

昔、聞いたことがある。

聞いたのは、確かあのうっかりだったか……。世間話の合間だったと思う。

始まりの音楽、それは風であると。

……そして。

始原の自然現象は全て、星の生理的活動である。

神々は擬人化した星の末端とも言われている。

ならば歌とは、最も古くからある星の祝詞なのかもしれない。

そんなことを考えながら、歌に身を任せて身を安らげる。

これは、別格だ。

奏と翼の歌も、魅了されうる素晴らしいものだった。

思わず体が動く、と言う事が現実になる程だ。

だが、セレナはそれすらも超越する。

文字通り、感動が全身に染み渡る、とでも言おうか。

このノイズの体に疲労と言うモノは感じられないが、作業を続ければ精神は疲弊する。

それが、心が。胸に蟠るものさえ。

清流に清められるが如く澄んでいく——心地よさを与えてくれる。

「ごはん、食べられれば良いのにね」

まあ、それほどは仕方がない。

俺は、本来生物にあるべき生理的機能が殆ど存在していない。

ただ、この毎日のやりとりに相挟まれ、流れてくるこの歌が——まるで糧となるような——そんな気がして心身共に充足されるのだ。

こちらとしては不満はない。

だが、セレナにとっては食卓を共に出来ないのは寂寥感を抱いてしまうのだろう。

この問答も、もはや何度目になるか分からないものなので、いつものように肩をすくめると、哀しそうに微笑むセレナは完成を知らせる音に身を翻し。

完璧に調理されているのにノイズそのままの形状をしている夕餉を運んできた。

……ちよつと待て年頃の少女よ。

「それじゃあ……いただきまーす……あむう」

なんて可愛らしく言っているが、その実態はノイズを羽交い締めにして頭から食らいついている猟奇的な少女である。

そう、今セレナが調理に使ったのは、俺が治療装置と間違えてセレナを美味しくしかけた至宝の一つだ。

取説の粘土板曰く、神す^ヒら殺す^ド毒多頭^ヲ童の肉すら下拵えをすれば絶品料理へと仕上げてくれるらしい。

以前、セレナに提供した粥もそれで作ったのだ。

ん？ 材料？ ここにあるモノがなんなのか、それだけで察してくれ。

今セレナが召し上がったモ^ノイズと同じものしかないのだ。

それ以外に資源は——ああ、この間見つけた黄金色の蜂蜜酒なんて飲んだあかつきにはどうなるか分かったもんじゃやない。他にも食べ物つぼいのは曰く付きしかなさそうで手が出せないのだ。

ただ、俺が調理した際は、今見てるような質感と味だけを作り替え、そのまま丸かじりで良しとした事など常識から考えて一度もない。

眼前でバリボリもぐもぐノイズの形をしたものを食しているセレナに対峙し、無性に

茶が飲みたくなかった。

間が保たぬなあ、この絵面は。

なので、色々と思案に耽ることにする。

毎度毎度ノイズを呼び出している元凶は、何故そのたびに妨害を繰り返している俺を性懲りもなく呼び出すのだろうか。

……もしや、ノイズを用いて人を襲っている下手人でさえ細かい指示や制御が出来ないのでは無かろうか。

如何なるモノか、このうっかり臭、どことなく覚えがあるのだが、そのあたりの記憶がもやつと霞掛かっついていてどうにも思い出せない。

まあ。

あまりにズボラなのでついでに俺まで呼んでしまうと言うのなら、それも良いだろう。相手が対処するまでとことん付き合っつてやろうではないか。

ところで。

今し方思案していると昔飼っていた青獅子ブルー・ウガルがじゃれ着いてきたのと同じような感じ

で何かが噛み付いてきたので、青獅子と同じように上顎と下顎を掴んでうーりうーり。

たまたまず逃げようと仰け反るので、仰向けに押し倒して腹毛をもふもふもふ……。

たまたまずにやーにやー鳴くのが可愛いのだ。

獅子と言えど所詮は猫でしかない。

……ん？

が、どれだけ揉みほぐしても全然もふもふしない。

全く以て全然もふもふしないのでがっかりしてふと見下ろすと——
顔を真つ赤にして倒れているセレナがいるだけだった。

なんだ。

やつぱり青獅子ではなかったか。

「——な、ななな、なにうをしておるうんだオヌシいわあ——！」

ぶぐふあ!?

いつもはしないような口調で下から殴り飛ばされた。

しかも、例の対ノイズ装甲を展開している本気ぶりである。

吹き飛ばされ、その勢いがとぎれて高度が下がり始めたので一回転して着地する。

うむ。飛距離はざっと大体町一区画分ぐらいか。なかなかの膂力である。

セレナは背中から炎を噴出させて跳躍、こちらまでやってくると真つ赤な顔のまま物言いを始めた。便利だな、その対ノイズ装甲。

「い、いきなり女の子を押し倒してお腹をまさぐるなんてなに考えてるの!?! しかも思い切りがっかりしてるし、がっかりしてるし!」

どこを強調しているのだお主は。

そもそもだ、そちらこそ考え事をしている間に青獅子のようなじやれ方をするからついで昔のノリで相手してしまっただけでな……。

ん？

青獅子の様って……。

頭をまさぐると、やはり、綺麗に並んだ鋭利なモノが突き立った痕がある。

少女や。何故に俺を噛んだのか。

俺が歯形をなぞっていると、セレナはそれに気づいたのか。

「いやね……一人ですつと考え事してて、声掛けても聞いてくれなかったし……」

どんだん声がか細くなっていく。

反応しなかったから寂しがらせてしまったか。

ここでは、意を示すのが俺とセレナだけだからな。俺が反応を返さないと寂しくなるのも仕方があるまい。ましてや、今日は出撃したからな。

存分に寂しい思いをしたのを埋め合わせねばならない筈だったのだ。

これは、俺の失態だ。

申し訳ない。俺は一度に複数の事柄をなすのが苦手なのだ。

だが——それなら、体を揺するなり叩くなり、してくれればいいのだ。

ぺちぺちセレナの肩を叩き、続いて自分の肩を叩いて示す。

教え方がボディラングージだけなので伝わらないことも多いが、流石にこれなら分かるだろう。

「あー……」

俺の意が通じたのか通じないのか。

途端に視線を泳がせ始めるセレナ。

待て。

まだなんか、あるのか。

「いや、ね？　素のノイズの歯応えがどんななのかちよつと知りたくてね？」

ほら、わたし、調理したノイズ食べてるでしょ？　だからちよつ——と、調理してないノイズがどんな噛み応えなのかなーって。でも、他のノイズってギアがあっても調理前のを生身の部分で触るのは抵抗があってね、だから、丁度触っても大丈夫なあなたがいたから、試したくなって、ね？」

ほう。

どんな噛み応えなのか単に知りたくて、考え事に没頭して抵抗出来なさそうな俺に噛み付いたと。

よろしい。

歯痒いから噛み付く動物染みた行動ならば、俺も動物に相対した時の態度でいこう。両腕を上げて手をワキワキさせると、何かを察したのかセレナが後ずさる。

「いや、でもね、美味しそうだから噛み付いたってんじやないからね！　なんか動いてる様子見たらグミみたいだなーとか思っただけじゃないから！　ないからーッ！」

言うことに欠いて全て暴露してゐるがな。

見苦しいぞセレナ。

青獅子が猫のようにゴロゴロ鳴く我が妙手、存分に身を以て堪能するがいい。

にやあにやあ痙攣しているセレナを寝台に転がして、転がっていた宝の一つである全気候対応毛布を被せ、俺は寝台の下で腰掛ける。

俺は、睡眠する機能も失っているので、このまま、セレナが起床するまで手持ち部沙汰となる。

迂闊に離れているときセレナが目を覚ますと、少々やつかいなことになるのである。最近は大分改善されてきたが、それでも離れるときは前もって断りを入れておかないと、少々大変な状態に逆戻りだ。

そのため動くことは出来なくなるが、思考に耽るだけなら有り余る時間の始まりであるわけだ。

お題目は昼間、奏と翼に会ったことにより、同じぐらいであるセレナについてである。4年は、俺にとっては瞬く間だが、年若きセレナにとっては、掛け替えのない、貴重な期間である。

俺と出会った当時、まだ幼かった子は既に、とても美しい多感な少女となった。

正直、一番気難しい年頃である。

思春期というと、猿のように盛る同年代男子を軽視したり、逆に恋に興味を抱くようになる。

子育てなど久方ぶりであるが、異性の子育てにはどうも色々と心が挟られたもので。こんな海星の身になった事に初めて感謝した瞬間であった。

なにせ、余所様の娘であるセレナがこんな美しい少女へと育っているにも関わらず、一切男性的反応が肉體、情動共に兆しさえ起こらない。

生物として男性という反応も失われたようである。

まあ、元の俺であったとしてもだ。

面倒を見ることになった子にそんな劣情を抱く不屈き者が居たら居たでぶつ殺すが、さあ。

それで、だ。

これからが本題だ。

如何にしてこの空間からセレナを脱出させるか。

確かに、ここにいれば生きていくことに関して言えば困ることなど何一つ無いだろう。

だが。この年代のこの期間は、この今にしかない。

この期間にしか出来ないこともあるだろう。

この時期であつたからこそ生涯に渡つて輝く出会いもあつただろう。

俺は出撃、後に妨害と言う形で外に出向くこともあるが、セレナはずっとここに幽閉され、外界から遮断されている。

奏と翼も普通とは言えない特殊な事情に身をおいている少女だというのは察することが出来る。

だが、それでも同年代の友が居る。

それだけでも、セレナは貴重な経験を損失している。

決して、海星との二人暮らしに浪費していい時間なんかではない。

ノイズと対するための、歌を力の源とした装備。

共通項のある二人とセレナが交流する事になればな、と思う。

布団から伸びてきたセレナの手が俺の二等辺三角形な頭部を掴んできた。
いや、手も頭も同じ形なのだからまあ、それは仕方ないが。

「……姉さん……」

あの炎の中、セレナを案じてきた二人。

その内、駆け寄ろうとした方……。

名前は……えーと、4年前聞いたつきりだったからなんだったか。セレナは姉さんとしか言わないし……うん、確か、ま、まり、うん。確かマリオだった筈だ。

彼女が姉なのだろう。

今まで何度もセレナとの会話で出てきたその存在は容易に彼女に重なる。

何故か脳裏にマンマミーア！ という叫び声が聞こえたがなんなのだろう。
きつと幻聴だから気にするようなことではあるまい。

無理もない。

寂しいのだろう。

会話を飢えているだろうさ。

やはり、人が必要なのだ。

海星では駄目なのだ。

せめて、俺が口を利ければ……。

なんか、喧嘩しそうだな。

すぐさまその光景が頭に浮かんで閉口した。

「好き嫌い多いから、お昼に食べたの何の虫か秘密に……うにゆむにゆ……」

待てセレナ、お前はかつて、姉になにを食べさせたのだ。

聞き捨てなら無い寝言だった。

きつと過酷で、今日食べるものさえ苦勞してきたのだろう。

だが。

先ほどのノイズといい、食べるのに躊躇無さ過ぎではないか？

待て待て待て待て待てセレナ、その手をどうするつもりだ？

引つ張るな引つ張るな。寝てると力強いなおい。例の装甲で身体強化して——てか

やっぱりかやめろ。うみゆうにゆいってもあざといどころか危ういんだがやめつ——

がぶ。

遠慮なく頭部に食らいついて来たああああああ——っ！

暫くして、セレナが熟睡するまでの間、何とかセレナに嘯みちぎられないように四苦

八苦する俺なのであった。

02 雑談（打ち上げ）

ラッキースター。

それは誰が言い始めたのか。

気付けばノイズと相対した自衛隊員や特異災害対策機動部一課の対ノイズ初動部隊で広まっていた。

ノイズの大群の中に、星形のノイズがいれば生存率が高まるらしい、と。

実際、何度も目撃している側からすると、人型や蛭型と言った陸戦小型ノイズの中に一体だけ違和感バリバリで混じっている。

違和感が何か、というのは言うよりも見れば分かる。

一発で分かる。

まず、見た目がそいつしかない。

その上で形が星形。

レモンイエローのカラーリング。

言ってそのまま、ズバリ直立している星形なのである。

その上で、挙動が目立まくる。

もしこのノイズが星形でなかったとしても、一発で分かるだろう。

出現した瞬間を目撃した貴重な報告からのものなのだが、まず出現直後、キョロキョロと辺りを見回し、続いて気合いを入れるように両手を打ち合わせたようだ。

それだけに限らず。

伸びをしていた。

四股を踏んでいた。

目に見えて落ち込んで肩を落としていた。

リズムに乗ってステップを踏んでいた。

いったいお前等命のかかった戦場でなに見てるんだと言う程ふざけた目撃情報が集まっているのである。

よほど印象に残るのは、仕草が無闇矢鱈に人間くさく、感情豊かだからだろうか。

そして、その存在を知る大多数に好意的に見られる最大の理由。それは――

人間などに見向きもせず同じノイズに襲い掛かる事だった。

開幕一番、隣にいた手がアイロンみたいなノイズにドロップキックを食らわしたかと思えば、蛭型にストレート、鉤爪持ちにフック、ブドウの房のようなノイズはアツパ―で上空に打ち上げていた。

冗談みたいに直上へすっごい飛んだ。

しかし、解析班の報告によると、とんでもなく吹き飛んでいるのだが、ダメージは一切無いらしい。

位相差障壁の応用なのか、ノイズ同士の行動ではお互いダメージを受けないようで、星形が暴れ回った後、ノイズが一体も減っていないことに気付いて地団駄を踏んでいたらしい。

極めて分かりやすい事である。

星形もその事には学習したようで、手段の無いときはただ弾いて飛ばしているのだが、道路標識を引っこ抜いて棍棒代わりに使ったり、5 mぐらいの大岩を投げつけたりしてノイズを破壊し始める。

ああそうだ。このノイズ。

無茶苦茶力持ちなのである。

ノイズの驚異として共通認識となっているのはその人間を対象とした炭化能力と、通常物理法則下のエネルギー法則に干渉、物体に対して接触と透過を自在にコントロールし、人類側の対抗手段をほぼ封殺する能力である。

だがこのノイズの場合、炭化されるより素でぶん殴られた方が見た目悲惨極まりない結果になりそうなのだ。

なんとこのノイズ、山岳地帯で震脚をかましたらそのまま土砂崩れが勃発しやがったのである。

冗談抜きで山一つ崩落したのだ。

星形自身、意図せぬ威力だったのか、何らかの理由で地盤が緩んでいたのか。

間抜けな事に、巻き起こした本人ごと巻き込まれる大災害となつたのだが、普通に土砂を吹き飛ばして飛び出てきたので、二課のメンバーはこう叫んだものである。

司令かあいつはーっ！

一斉にハモつたらしい。

……………別のところに突っ込んだ方が良いと思うのは気のせいだろうか。

天羽奏はシンフォギア装者である。

星形は対ノイズ装甲と呼んでいたが、実態はそれで正しい。

正式名称はF G 式回天特機装束。

詳細は省くが、要は身につけた者の身体能力を増幅し、ノイズの炭化能力から身を守り、逆にノイズの特記すべき防御機能である位相差障壁の波長を強引に調律することで

物理法則が有効な位相で固着し、詰まるところ殴れば砕ける状態に引きずり落とすことである。

ノイズに効果的な、現在唯一の装備である。

その力を手にするため、奏は文字通り、血を吐くような努力をしてきたのである。

彼女の根幹において、そこに根付くのはノイズへの復讐心、憎悪である。

その想いが揺らぎかねない事に、彼女は戸惑いを——それは苛つきなのだ、と言うことにはしていた。

言い聞かせざるを、得なかった。

「ああんら、奏ちゃん」

もの思いに、耽りすぎていたのか。

接近に気付かなかった。

「おわあっ!? ってあんたか」

「いやあ、ツレないわねえ」

まるで軟体動物のように奏にしなだれ掛かっている女性は櫻井了子。

シンフォギアのコアとも言える聖遺物。

世界各地の遺跡等で欠片だけとは言え発見されるそれら超先史文明による異端技術

の代物を、何とか現代の技術で活用できるレベルに押し上げた理論の提唱者である。

その理論は彼女の名から櫻井理論と呼ばれ、世界有数の第一人者として立場を確立している事をなにより証明していた。

表向きには存在していない特異災害対策機動部二課における聖遺物関連の技術を一手に担っていた。

だが彼女。

優秀なのだが人として絡まれると。

うん。大分良く言っても……うざったいのだ。

奏は普段なら要領よくかわしたり、相棒である翼を生け贄にしたりするのだが、今日
は考え事をしていただけに逃げ遅れたのである。

もとい、そんなタイミングを見越して絡んできたので故意犯なのだが。

「ん、分かってるわよ、奏ちゃん。あのノイズの変わり種の事、考えてたんでしょ？」

「いや……そんなこと……」

「ある。でしよ？」

「ぬぎぎぎぎぎ……」

ざつくばらんで気っ風の良い奏であるが故に、歯切れの悪い言い方が実際、本音を証明していた。

「と、言うわけで。これ見て」

了子の差し出したタブレットにはなにやら難しい波形やデータがびっしり書き込まれていた。

思わずジト目になって了子を見る。

何も分からない。

「なあ、あたしの頭が悪いつて分かっててやってるよな」

「あら、間違えた。大丈夫よ奏ちゃん。これ、そこらの科学者でも分析できないレベルだから。えーと、えーと」

なんだその嫌がらせ。

奏が視線で避難する中、全く馬耳東風でデータをフリックしていく了子。

「あーこれこれ」

「いや、やっぱりわかんないんだけど」

「まあ、分かりやすく言うからね。このノイズ。あなたの歌を聴くと活性化するみたい」

「……………はあ？」

「実際、あなた達が現場に到着すると真っ先に突っ込んでくるでしょ」

「確かに」

星形は他のノイズを吹っ飛ばしたり飛行型にト突かれたり、山を掘り抜いて温泉を噴

出させたりしていたのだが、奏と翼が現場に到着すると地面を吹き飛ばす勢いでやってくるのである。

「あいつ、めっちゃテンション上がるしなあ」

「余程気に入ってるのねえ。実際活性化してるのよ。しかも翼ちゃんよりもあなたの歌の方が相性いいのよね」

「まぢか!」

「マジよ!」

「ぐあああああああああああああああ!」

知りたくない事実だった。

思わず頭を抱えて仰け反る奏。

まさかのノイズが自分の歌のファンである。

この——歌の、と言うのが致命的だった。

「て、待てよ、つまりこのノイズ」

「ええ、フォニックゲインを取り込んでエネルギー源に出来るわ」

さて——今新しく出たフォニックゲインと言う名称。

それは櫻井理論における最重要事項である。

超先史文明の遺物は、様々であるが総じて共通する項目として歌に込められた力を源

とする。と言うものがある。

この、聖遺物を稼働させる力を了子はフォニックゲインと名付けたのである。

シンフォギアは、聖遺物をコアとしたものだが、用いられているのはほんの欠片、本来ならばフォニックゲインを供給したところで力を発揮することは殆ど無い。

故に、了子が開発したシンフォギアは持ち主の戦意に反応し、持ち主の歌を補助し、適合するフォニックゲインを生み出すことで適性に併せて聖遺物の機能を順次解放、増幅していく代物を作り出した。

特筆すべきは先も述べた通り、ノイズの位相差障壁を歌の波長で調律し、物理攻撃が通用する物理法則下へ固着させることである。

加えて堅牢かつノイズの炭化作用を阻害する防護フィールドを展開する、まさにノイズへの切り札と言っていい機能を持っている。

それが。

まさか。

ノイズを打倒すべき歌が。

「ノイズを活性化させる……」

まるで、シンフォギアではないか。

自分の歌がノイズを討ち滅ぼし、人を救う。

そのはずの……歌を。

ノイズ側が早くも対抗処置を施してきたのか、と断じても無理がない脅威である。

こちらの力の源を横からちよるまかして自己強化に当てるノイズがこれ以上増加な
どされてしまえば、こつちの優位性が一気に奪われる。

——ましてや、奏のようにシンフォギアの使用に制限があるタイプは、殊更に、だ。

「そう。もつとも代償が無いわけ、でも無いのだけれど」

「どう言うことだよそりゃあ?」

「奏ちゃんの歌を聴くとポテンシャルが軒並み跳ね上がるのは確かなんだけど、その分
活動時間が縮められるみたいなのよ。本人(?)は気付いていないみたいだけど、半ば
暴走的なものなのかもしれないわね。前回、奏ちゃんの槍を握った時なんて顕著だった
わ。すごい勢いでノイズを駆逐していったけどいつもより5分近くも早く崩壊を始め
たみたいだし」

確かに、分裂増殖した槍を握っている腕から崩れて行っていた。

そう言えば敬礼なんてしてたなアイツ。

妙に生意気で奏はムカッ腹が立ってきた。

「ああ、それで聞きたかったんだけど。毎度一体しかないから同じノイズとして扱っ
てただけだし、アイツ一応、制限時間に達して炭になるだろ? その次に出てきた奴

は別個体……で、良いのか？ どうも、同じものにしか見えないんだよな」

「おお、奏ちちゃんにしては良い着眼点ね」

「あたしにしてはーつてのが気になるんだけど何だよ、続けてくれ」

「確かに、毎度あのノイズは炭化崩壊を起こしているわ。でもね、モニターしている側から言うと、明らかに次に出現した個体は前回の経験を継承……つまり引き継ぎしているのよ。」

自分の動きとそれによって周りがどうなるのか、それを受けたノイズがどうなるのか、確認しながら動いていたみたいだったのが、出現の都度どんどん模索して挙動が洗練されて居るみたいだったし。

何らかの形で経験値の継承的な事を行っているのは確かだわ。これがあのノイズだけなのか、他のノイズも含めてなのかは分からないけど。

ノイズの行動ルーチン継承なんて悪夢以外の何者でもないわねえ。

弦十郎君なんかは、意図した動きと体のズレを少しずつ認識を擦り合わせているみたいだーなんてマンガの武術家みたいな事言ってたしー？」

「旦那の言うことだとあながち冗談だと笑えねえんだけどなあ……でも、つまりそれってあれか？ あのノイズ自体も、今あんな風になってるのが想定外ってことなのか？」

「案外、そうだったたりして。今度話しかけてみない？」

「冗談じゃねえ。ノイズに話しかけるなんて正気の沙汰じゃねえよ」

「でも、一課の隊員がジェスチャーしたら真似して返したみたいよ?」

「何やってんだよそいつ!? っていうか余裕あんなあオいいいつてひやあああああ!」

頬をひきつらせる奏の耳元にぬるりと入り込んだ了子は声を忍ばせた。奏が飛び上がったのは耳の穴に息を吹き込んだだけだが……。他には何も無い。無いつたら無い。

「これは……ここだけの話なだけど」

「なんだよ、こそばゆいな。そんな声潜めるようなことなのかよ」

「結構重要よ。あのノイズが通常の殴打では他のノイズにダメージを与えられないのは確かなんだけどね」

「いや、そりゃあたしでも知ってるけど」

今更秘密にするようなことでもない。

「それはあのノイズにも分かってるけど、やめようとしなのはね、単にノイズが人間にぶつからない様になっているだけじゃないみたいなのよ」

「はあ?」

「あれに叩かれると、位相差障壁が暫く展開できなくなるみたいなの。なんか親近感抱いた隊員がああノイズを援護するつもりで銃を撃つたら、無効化される割合が余りに低いんで色々試してみたらいいわ。そしたらピンゴ、星形のノイズに接触したノイズ

は、しばらく位相差障壁が展開出来なくなつて普通に撃破できるつて。この事に関しては箝口令が即座にひかれたわ。分かるでしょ」

「あたしらのシンフォギアの特性を独占しときたいつて事だろ？」

「上つて本当に面倒だものねえ。他にも方法があるかもしれないつてなつたら、何かしら言つてきてシンフォギアの開発に難癖付けられても困るもの。翼ちゃんにはもう言つてるわ。現場にいたら気付きやすいでしょうと思つて先に言つておくわけ？」

「おつけー。あたしもシンフォギア取り上げられたら困るからな。分かつたよ」

自分達しか居ないから、副作用の強い投薬を使つてまでシンフォギアを使つている事が容認されている奏である。

だが、もし他にも手段があるとなれば。

人命尊重や、人体実験への忌避感からシンフォギアが奪われるかもしれない。

まったく面倒な——あのノイズへの敵愾心。その理由が一つ増えた、と奏は嘆息した。

「で。今のが本題なら、もう良いかい？」

「もう、奏ちゃんつたらつれないわねえ」

「あたしは翼と違つて可愛い路線じゃないんだよ」

「それはいけないわね。女の子はいつまでだつて可愛くなきゃ」

「いや、良いから良いから！」

なお絡む了子を引き剥がし、奏はそそくさと去っていった。

逃げていった、とも言う。

さて。

残された了子はしばらくねくねくしていたが、顔を真顔に戻し、イレギュラーについて
思案する。

出現は4年前から。

まさかとは思うが、時期が一致する聖遺物による事故がアメリカで起きている。

ノイズは一切関係のない事故だったはずだ。

シンフォギア適性者。しかもずば抜けたフォニックゲインを生み出す適性者が命を
落としたらしいが、ほんの僅か、勿体ないと言う感情が僅かに持ち上がるぐらいである。

ずば抜けたフォニックゲイン生成者と超先史時代の遺物は組み合わせ次第では如何
様なことでも起こりえる。

そう。例外的に皆認識しているが。

ノイズもまた聖遺物だ。

世界各国に残る怪異の伝承の元である、と知れ渡っているせいも、聖遺物、と言う単

語の印象と一致しないかもしれない、だが、実態はおそらくシンフォギアに用いられている聖遺物となんら変わらない。

しかも、一切欠けていることのない完全聖遺物である。

他のものと違い、粗悪な量産型ではないが。

だが、ノイズは他の聖遺物とは違い、フォニックゲインには反応しないはずなのだ。

あれは、人間が人間を殺すために作り出したもの。

もし、殺戮対象の中に適合者が居た場合、そっくり戦力を奪い取られる可能性がある。

コマンド入力者及びその指定した例外を除く不特定多数を対象として殲滅活動。

かつコマンドを入力するだけであとはほぼ自律活動する性質であるために、万が一にも鹵獲を防ぐために決して人の放つフォニックゲインに反応しないように出来ている、筈なのだ。

しかも、破壊されても経験値を引き継ぎ、再生産されているようだ。

そのやり方が分からないが、いずれ突き止め、初期化してやれば今のような例外行動はとらない……筈……だ、と思っている。

もうじき、ネフシユタンの鎧への機動実験が行われる。

必ず、あの星形も出現するだろう。

いつもどおりの行動なら問題がないのだが。

「あの……どうしたんですか？」

「あら緒川君、どうしたの？」

「さつきからチンアナゴみたいな動きしてますけど、何かありましたか？」

了子は気付かぬ内に再びくねくねしはじめしており、それを疑問に思った男性職員に声をかけられたらしい。

「……………」

「あの一？」

色々な感情が相混ざった状態ながら臍を蹴っ飛ばした。

「あたあーっ!!」

面白いぐらいに跳ね上がった、と言っておく。



一つ。気になることがある。

ノイズが攻撃する際、形態変化を実施するものは多い。

たとえば飛行タイプ。

普段は鳥のような形で飛行しているにも関わらず、ドリルのように捻れて降ってくる。

実際ドリル状の先端で人間を突き刺し、諸共炭化するのである。

さて、ここで本題である。

俺同様、陸戦歩兵タイプのノイズに良くあることなのだが。

腕とかを伸ばすとそのまま細い筋となつて高速移動、そのまま突撃する攻撃がある。

あれ。俺にも出来はしないだろうか。

使えたら実際、あれはかなり便利である。

だがあれ、どうやれば出来るのか見当も付かないのだ。

と言うか、変形にも度が過ぎるのでは無からうか。

だが、ノイズに出来るというならば、俺にも出来るはずなのだ。

位相差障壁を展開できない俺だが、他の機能ぐらいは出来るはずなのだ。

やり方がさっぱりだが。

と、なれば話は簡単。特訓だ。

だが、何をどう特訓すればいいか検討も付かないので、とりあえず思いついた端から試してみる他はない。

しかし、その姿を見られるのは恥ずかしいものがある。

努力は尊いものであるのは誰しも周知の事実であると思うが、実際その様子を見られるのは年を重ねることに恥ずかしくなっていくものなのである。

と、言うわけで。

いつも暇つぶしに広大なこの謎空間を散歩している俺は、いつも通りと、さりげなく距離をとり、一人こっそり特訓することにした。

陰ながら研鑽を積む。どことなく格好良い気がしないでもない。

ふっふっふ。実はこのために、大分前から散歩を日課にして不自然に感じさせないよう伏線を張っていたのである。

この空間に無造作に投げ捨てられている至宝の取説粘土板を読みあさるのも、結構楽しかったりする。

ハマりすぎて帰るのが遅いと、セレナが食事を待っていたりして臍を曲げるので注意が必要だが。

俺は食事が出来ないから気にせずとも良い、と伝えてはいるのだが……。

後でセレナに見せて驚かせようと言う童子心も無いことは無いのだし。

ではまず、見たままを真似してみよう。

出撃した際、見たままに。

腕を突きだして変形しろおおおおお！ と念じてみる。

しかし、何も起こらない。

変形、では無いのだろうか。

もしかしたら細くなっているのかもしれない。

細くなれえええええ！ と念じ、心なしか体を細めてみる。

しかし、何も起こらない。

なお、延びろおおおおお！ でも駄目だった。

早くもネタが切れた。

仕方がないのだ、想像と言ってもそれぐらいしかないのである。

待てよ、とふと思いつく。

しばし、後ずさり。

助走をつけて前方へと突撃、飛び込みつつ、突きだした手を中心に螺旋回転。

うねくりながら突っ込んだ俺は偶々そこにいたノイズに炸裂、その身を抉りながら、

共々上空へ伸び上がり、とうとうそのどてつ腹をぶち抜いた。

回転をおさめつつ、姿勢を直し、着地。

残心し、構えをとる俺の背後でノイズが大爆発した。

期せずしてなんか新技が出た模様である。

……ところで……フレンドリー・ファイア防止機能はどうした？

しかし、本来の狙いが出来ない。

……構えがいけないのか？

アイツ等は無造作に手を差し出しているように見えるが、実は複雑な工程を経ているのではないだろうか。

思いつく限りに、様々な構えをとってみる。

違うとは思うものの、奏や翼が対ノイズ装甲を展開していた時の姿を真似て体捌きを真似てみたり、翼の真似をして逆さまになり、足を開脚してぐるぐる回ってみたりした。当然だが、やっぱり出来ない。

ふーむ……と、こめかみ……と、自分では感じるところに指先をこつんこつんやりながら思索していると、ふと気付いてしまった。

バレバレながら身を隠しているセレナがこつちを矯めつ眇めつしていたのだ。

心なしか頬が紅潮しており、鼻息が荒い。

見・ら・れ・て・た。

思わずズサササアアアッ！ と後ずさる。

「あ、うわっ、見つかった！」

我ながら失態である。

こんな、さっぱり気配が消せていないセレナに気付かないとは。

「うわ、赤っ！ 全身真っ赤！ ごめん！ ごめん！ ごめんなさい！ なんか毎日ふらつとどこかに行ってるから何してるのかなーって気になって……」

うわあああああ！ 複線どころか興味持たせて墓穴掘ったあああああああああ
あ!!!

今日が特訓初日なのになんつーたいみんなぐううううううう!?

「うわ、打ち上げられた魚みたいに暴れてるんだけど！ 大丈夫、格好良かったから！
な、なんて言うか、腕を伸ばしているところとか、さ、様になってたよ」

初めから見られてた。そりゃ尾行されてりや見られてるよな。

あとそれ、慰めにしても不出来に過ぎてこつちが心配になる。その……語彙的に。
「うわ、赤っ！ と言うより心なしか発熱してる!? 熱っ！ 本当に熱っ!? え？」

ちよ、て、え、え、ええ、え、ええええええええええええええええええええええッ!」

ズツゴオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

とばかりに爆音が足下から炸裂した。

あまりの恥ずかしさに顔が火を噴く状態になったのだろう。

温度の高まりと共に内圧が高まっていき、それが。

星形故に頂点形状になっている足裏から放たれたのであった。

「飛んだ！ 飛んだよッ!? 飛んだあああああああ！」

死滅しているセレナの語彙を下方に、凄まじい勢いで急上昇。

ノイズの身とはまっこと摩訶不思議なり。

ちようど2分後、セレナの姿が見れなくなつて平静に戻つたのか、急に推力が切れて俺は墜落した。

本当にこの空間広すぎる。

そう、広すぎるのだここは。

ていうか、ここ何処だ？

ていう流れで、三日ぐらいガチで遭難した。

結局、いつもの出撃、からの、炭化崩壊で帰る羽目になった。

セレナの脱出も考慮すると、やっぱり探索して地図でも作らなきゃいけないかもしれん。

真面目な話である。

03 貫通

知識と認識で、妙にズレがある。

前々からあったのだが、やっぱり気になるのである。

例えば。

「……うー、なんですか？」

卓を挟んでをくるくると材料：シイス。パスタに材 料：クリームソースを絡めているセレナをが首を傾げて聞いてくる。

いや、セレナに注目したが、焦点はセレナではなく、食べているものである。

だから、気にせず食べてくれ、と手を振ると、可愛らしく頬張り心底おいしそうに食べ始めるセレナだった。

そう。パスタだ。

小麦を素材とした食事は俺の時もあった。

パンとかな。

だが、アレも随分変わったものだ。

前にセレナが材料：シイスパンを作った事があったのだが。

え？ なにアレ。なんであんなふわふわなんだ？
密度無くね？

食べた気がするのかそれで？

思わずこねたら、セレナにひっぱたかれたからなあ。

食べ物が関わったときのセレナはガチである。

いや、脱線したが、パスタであるパスタ。

このパスタ、という小麦を細長く練ったものだが。

はつきり言おう。

俺はパスタ、と言うものを当然ながら知らなかった。

だから、初めてセレナがパスタを作る旨を告げたとき、脳内にはクエスチョンマークが埋め尽くされたものである。

だが、セレナがパスタを含めた複数の料理を運んできたとき。

そのどれもが知らない料理だったにも関わらず、セレナの言うパスタがそれであるという事が分かったのだ。

言葉に名詞の質を内包して伝達している、と言えばいいのか。

会話すれば、その単語がなにを意味しているのか分かるのだ。

だが、それがどのようなものは説明を受けないと分からない。

例えば、前にも紹介したゴムだ。

この謎空間内に無造作に球体があったので蹴り転がしたり頭の上に乗せてバランスを取ったりして身体操作の練習をしていたら、セレナがそれをボールと呼んだのである。

先も述べたとおり、自分が扱っていたものがボールと呼ぶのだとはすぐ分かったが、それを自分も使いたいと言ったセレナに渡したら。

「うわ重っ、なんですかこれギョツとしてる。まさかこれゴムの固まり!？」
 が、ゴムの話題になった切っ掛けである。

つまり、ボールが球体を示す名称であることは聞けば分かったのに、その素材であるゴムに関しては、ボールがゴムで出来ていると言うことを除いて、その性質もなにも分からなかったのだ。

その点に関して補正がない、と言うことは……推論でしかないが、言語の呼称や言い回しの世代間を埋める補正であって、知識は補填しない、と言うことなのだろう。

どうしてこうなっているのか全然分からんわ。

ん？

「ん?」

また、セレナと目が合う。

で、俺はそのまま固まった。

セレナがパスタをぐるぐるぐるぐる全て大きな玉に丸めていた。皿に乗せられた山盛りパスタが丸々ボール状になっている。

正直、セレナの顔より大きい。

一度、やってみたかったんだよねー。とはセレナの談である。

「……………どうやって食べるんだろう」

普通に齧りつくんじゃないか？

「いや、そうしたらせつかく丸めてるのが一気に崩壊しそうで……」

ああ、分かる。

結局。

セレナは皿におろして、端からあらためてフォークに巻き直し始めた。

「いちそうさまでした」

わお、この娘ぺろっと全部平らげおった。



様々な色合いの投光器からの輝きを浴び、半球状の建造物の天井が開き、誰が演奏しているかも分からない複雑な演奏が彼女達を踊らせる。

その手には、槍でも剣でもなく拡声入力端子を持ち、舞と共に歌を唱え、凄まじい数の聴衆が息を合わせ、彼女らの美声に合わせ盛り上がる。

祭りだ、と思つた。

祭りは政。

王が民を率いるに不可欠な高揚を生み出す大儀式。

中心には祭壇ステージがあり、祭具シンボルがあり、巫女アイドルがいるものだから。

アイドル。

偶像を語原とするも微妙に意味合いが違うらしい。

俺には違いがよく分からないものの、人々の羨望を集めるものである、ということとは違くない。

それを一身に受ける彼女らは、輝くようであり、いつも戦場での凜々しく刃鳴散らす姿とは打って変わって別の魅力を示しているようであった。

さて、ここらで彼女と近しい年頃である、今朝のセレナを思い出してみようではない

か。

「最近、新しい移動法を思いつきました」

寝転がりながら思い切り伸びをしたセレナはそのまま転がってこつちまでやってきた。そのまま尺取虫のように上体を持ち上げ、何を考えたかこちらに枝垂れ掛かっていた。

「このあと、あなたが歩けば私は労力なくして移動することができます」

えへん。とこれが齢十七の少女が発した言動である。

世代が違うであろうから言うまいが、俺の頃なら数人子供を産んでいてもおかしくない歳だというのにこれである。

はっ。

呼吸するための器官があれば鼻を鳴らしていたであろう俺はそのまま彼女の望むまま進み、ずりずりつま先を引きずられながらセレナは上機嫌に鼻歌など嗜んでおる。

「ふんーふふふー。これぞ労力ほぼゼロの移動法くゆけーのいずーほう。」

いい気で居られるのも今のうちだ。

俺は真つ赤な敷物の上にセレナをぶち転がし、そのまま敷物でセレナを梱包して行く。

「ぶべっ!?」 ちよ、何何何何!?

ぐるぐる巻きにした後、敷物の端を持ち上げる。

「ま、待って! 待つんだ! それ以上いけない! 確かに労力をほぼ使わ——」

最後まで聞く気はない。

思い切り、引いた。

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふああくれえええええ——ツ!!」

—セレナが対ノイズ装甲で作っていたなんか回る送風機《プロペラ》に向かって声を放つような奇声を放ちつつ、ものすごい勢いでセレナが転がり去って行った。

駄目だ。モノグサが天元突破しつつある。まるで干物だ、なんとかしないと。

調理用にと積み上げていたノイズの山にセレナストライク。崩れたノイズの山に埋もれていくセレナの悲鳴を聞きながら、いかにしてあの子を活動的にするか思案する俺であった。

——と、いう朝の経験を経た俺である。

なんでうちの子と、こんなに差がついてしまったん?

嘆きたくなくても仕方がないではないだろうか。

と、言い忘れていた。

いつもの如く、謎の召喚で出てきたのはいつにない程最大規模の群衆の真つ只中であった。

不幸中の幸いというべきか、初の出来事だが、俺しかその場に呼び出されなかつたため、俺を目撃した数人の延髄に軽く刺激を与えて意識を奪い、その場にいる人の群れ、その死角を縫つて逃亡、巨大な祭壇の開いていく天井に飛び移り、儀式を見下ろす位置を陣取することに成功したわけである。

どうやら、今回は機を読んでノイズ共を群衆へ襲い掛からせるべく待機させているようである。

呼ばれたくせにそのような指示的なものからはハブかれる俺であったが、それはそれで幸いだ。

出鼻を殴りつけて挫かせてやろう。

ならば——襲撃し、何かしらを妨害する意図があるというのならば、やはりこれは儀式であつているのだろう。

だが、一つ足りない。

祭壇はある。

巫女の実力は申し分がない。

信徒の数と狂奔も十分だ。

では、祭具はどこだ？

祀られるべき、信仰を集める焦点としての役割を持つ、偶像は何を以って立てている？

この身の感覚を跳ね上げる。

この場での媒介は、当然ながら、巫女の歌である。

歌は歌う者、聞く者問わずトランス状態に移行させ、不純物のない高度な祈りを奏で出す。

セレナや奏、翼の歌を聞いて分かったのだが。

我が身は歌を糧にするようなのだ。

ならば、俺同様、何某かの特異なモノは、言つては難だが、歌を喰らうのだろう。

つまり、今まさに俺の力となつている二人と信徒の歌は、意図的に流れていく先にある何かへ歌を捧げているということだ。

……地下、か。

我が身の糧になる歌を量として測つていくと、その流れが地下に向かつている事がわかる。

もう少し、この歌を聞いていたいゆえ名残惜しいが。

この儀式の真相を断じてからでも遅くはあるまい。

だが、俺が身を乗り出す前に歌は中断されてしまった。

その他でもない、地下から吹き出た爆発によつて。

……遅かった。

少し、歌を堪能しすぎたようだ。

二人の高い練度の歌とそれをより盛り上げる設備による祭場全てから来るような歌を受け、腰が重くなっていたらしい。

これではセレナの事を言えまい。

煤が舞っている。

……待機中に活動限界に達した個体でもいたのか、すでに人と心中を遂げたモノがいたのか。

爆発の中心に、いったい、どれだけの人がいた？

巫山戯るな。

他でもないこの俺の怠惰が招いた不要な犠牲ではないか。

地中より、振動が登り上がって来る。

上等だ。

この間の特訓で何故か対フレンドリー・ファイア効果判定を免れた肉弾攻撃を受ける

がいい。

開いていた天井より、飛び降り、全身を捻る。

螺旋回転でうねる俺は地面から顔を出した巨大ノイズに出会い頭、炸裂した。

た、たたたた、た、たた、た、対フレンドリー・ファイア効果判定・修正・有効

ちい——前と違って対象が肉厚すぎたか!!

弾かれる我が身、質量の差で同じ反発が起きてもこちらだけがこうなる——相手は反動でその面を地面に叩きつけていた。時間が稼げたのがせめての効果か。

だいぶ飛ばされていたのか、目線と同じ高さに、鳥型がいた。

腰を捻る。身を振り、鳥型の変形、地上へ今まさに特攻を掛けようとしているところ

へ回し蹴り。

対フレンドリー・ファイア効果判定・有効

お互い反発、鳥型は遙か彼方へ、俺は弾き飛ばされた倍の速度で墜落する。

全身回転、ジャイロ効果で垂直落下のベクトルを拡散、かつて、幼き日に女神イシユタルが魅せた武術の動きを持って足から衝撃を偉大なる大地へ解放。

速度を以って、足りない質量を補う爆撃が大地に炸裂した。

無論、無差別な爆発ではなく、垂直に土砂が吹き上がるようにだ。

再度跳躍。噴き上がったものは武器となる。

俺の数倍サイズの瓦礫。

持ち上げることまでできるがここは素直に地に引かれる質量を頼るとしよう。

両手を添え、双掌打。

叩きつけるというよりは、押し込む要領で、地下より這い出た虫のような巨大ノイズの頭に押し付ける。

大地と、挟み込むように。

巨大な炭が吹き出した。

弾き返された意趣返しはこれで終わりだ。

無論、これで終わりではない。

地を食い破って来た巨大虫型は、一体ではないのだから。

そして、巨大芋虫型は液状のノイズの群体を吐き出した。

今まさに、俺が向かう先でまるで嘔吐のように吐き出される液体。

撒き散らされたそれは、泡立つように盛り上がり、その一つ一つに周りの液体が収束し、一般的な小型サイズのノイズ集団として出撃する。

えー。

思うのだが、俺の体もあんな風にデロゲロ自由自在なんだろうか。

あの細長くなって高速移動するのさえできないんだが。

今現在、武器はない。

先の回転突撃も、すでに対策されている可能性もある。ならば構わん。

たとえ撃破できずとも、遙か彼方までぶち殴り飛ばしてくれりしやがみ込み、頭が膝よりも低く下がった時点で足を蹴り出す。

超低空反動突撃。

助けられなかった男性を尻目に、死にたくない泣く少女を助けに向かう。

そのまま頭突き。

構うか、と黒炭ブチ撒けながら吹き飛ばし、反動で吹き飛んだ少女を受け止める。

彼女が俺に向ける顔は恐怖に固まっていた。

仕方あるまい……付け加えるなら、遅かった。

吹き飛ばしたノイズは煤になりながら砕け散って行った。

つまり――

炭素変換機能を發揮し終えた、という事だ。

次の瞬間には少女は炭になりきった。

恐怖に凝り固まったままの表情で。

そのままある意味ではあるが精巧なデスマスクそのものとなって。

腕の中で崩れゆく少女の最後が焼き付いている。

セレナと、たいして変わらぬ年頃の少女が……。

最近、セレナだけではなく、兵士達にラッキースターだの何だの、扱われていたから失意していた。

俺もまた、人類から見れば不倶戴天の化生である事を。

彼女にとっては俺もまたノイズ、俺では最期の瞬間まで、安堵すら与える事ができなかったのだと。

逃げ惑う人々。

その恐怖を向ける目には、当然俺も映っている。

これだけの人々の真つ只中に出るのは初めてだった。

市街地に出た事はある。

それでも、一般的な道路にせいぜい通行しているぐらいだ。

これ程の祭りの只中は初めてだった。

いつもは遠巻きに恐れられるだけ出あった。

これだけの群衆の只中、俺を中心にここまで恐れられるのは、思ったより堪えるものなのだな。

人の進行を逆行し、追ってくるノイズを迎撃する。

自分が向かってくる事に気づいた人々がまるでマグロに襲われるイワシの群れのように左右に開いていく。

それでいい。

俺はノイズでしかない。

本来、あなた達の敵でしかないのだから。

死にたい。

死なせてくれ、と。

人を触媒とし自身を炭素変換するべく、死なせる事も厭わぬノイズに遠慮も、躊躇も必要ない。

海へ殴り飛ばして文字通り星と変え、前進する。

助かりたい、死にたくない、と。

我先にと。人々は他者を顧みず押しつけ、弱いものは転倒する。

それは主に幼い者や年を重ねた者達であることは、いつの世も変わらない。

倒れた子供に蛭型ノイズが覆い被さろうとし。

させるか、たわけが。

隙間につま先を差し込んで、触れさせる事なく蹴り飛ばす。

「……………えっ……………」

ゆけ。

言葉は通じない。何か叫んでいるようにしか見えぬだろう。

だが、語気だけは通じるはずだ。

行け。

生きろ、と。

しかし、子供は呆然として、動き出さない。

助からないと思っていたからか、助けたのがノイズだったからなのか。

動かないのならば、待っているのは死のみだ。

俺は子供と言えど一人のために他の助けられるであろう多数を見捨てる事は……そ

う、たった一人を最優先にすることはできない。

俺は、もう少し語気を強めて、地を踏みしめた。

「う、うわああああーん」

碎ける舗装、そこに込められた力を本能的に察し、恐怖した子供はベソをかきながら走っていく。

ああ、それでいい。

——しかし、なんだろうか。恐ろしい程体が軽い

ずん、と重い心持ちとは裏腹に、身体のキレが恐ろしい程良い。

打ったノイズが彗星のように飛んでいく。
もしや。

先の儀式か？

先も言ったが、俺は歌を糧とする。

セレナ達、対ノイズ装甲を扱う者達はその力になる歌を歌う事ができる。

その装甲もまた、歌を動力源とする。

なるほど……そうか。

本当に、儀式だな。

今逃げ惑う群衆。

彼ら、奏と翼の歌に魅了され、興奮のただ中であつた人々もまた、彼女らの歌と同調し、歌の底上げに貢献していたのか。

初めは、奏と翼の歌を、地下の何かに供給させる口実のための祭りだと思つていたが。だが、それだけではなかった。集つた人々の精神的なパルスを束ねて位相を揃え、一点に指向させるためでもあり、祭りであることは必然であつたのだ。

ならば、地下にあるのは、俺のような何か、歌を喰らうもの、それも大食いだ。

先に、そちらを片付けねばならないか。

通常のノイズが歌を糧としないことはわかつている。もしそうならば、俺が今相對し

ているノイズが相当強化されていなければおかしいからである。

先程、大型ノイズに弾かれた技で一気に掘り進めるべく、腕を振じり上げる。

「悪い、そっちは、多分うちらがトチった奴なんだ。行っても解決しないから止めてくれないか」

見上げる。俺を止めたのは、奏だった。

話しかけてくるとは珍しい。

いつもは、何かと血気盛んに挑んでくるというのに。

俺としても、若い戦士を鍛えるのは楽しかったから、よく相手をしたものだ。

「……さつき、あんた子供を逃がしただろう？ 虫のいい話なんだけどさ……あの人をさ、助けてくれないか？ 悔しいんだけど、あたしは、時限式なんだ。せつかくあたしと翼の歌を聴きに来てくれた人達なんだ。本当なら一人だつて死なせたくはないんだよ……」

……時限式というものが、よく分からなかったが、今彼女はまともに戦える状態ではないのは確かだ。

纏っている装甲から溢れ出していた力が弱々しいものとなっている。

助けるのは無論だ。もとより、そのために俺はいる。

彼女は、俺を含めたノイズというものに強い敵愾心を抱いていた筈だ。

大切なものをノイズに奪われたという事は、容易に……想像がつく。抱く感情よりも、人を救う事を優先した——その決断、敬意を向けるに値する。その時であつた。

砂嵐混じり、と言う意味でのノイズ混じりの光景が脳裏をよぎつた。

花に囲まれる家屋の隅。

年老いた女性が、花々の陰で、声を堪えて泣いている。

……誰、だつたか？

その手に握りしめているのは、誰の服だつたのか……。

ついに祭場が崩壊し始めた轟音ではつ、と意識を取りもどす。

俺は……一体、何を思い出そうとしていた？

既に、隣に奏はいなかった。

戦場で惚けるなど日和つたか俺は！

「目を開けてくれ！ 生きることを諦めるな！」

奏は、戦場において自殺行為としか言え無い——槍を投げ捨てて、胸から血を流す少女に駆け寄っていた。

かろうじて、という形で少女は生きてはいたが、至急治療が必須であり、逃げる事などではしまい。

祭場には奏と翼、少女と俺含めたノイズ多数といったところだけが残っていた。

後は逃げたか、ノイズの自殺に巻き込まれ、煤と化したか。

——逃げ惑う同じ人に踏み潰されたか

仮説だが。

奏たちが纏っている装甲は、歌の力を蓄積できない。

故に、戦う最中は常に歌っている。

歌唱が途切れれば、スペックが著しく低下するようなのだ。

もし歌っていない時も、もう一人が歌う事でそれをカバーする。

だが。

では、俺は本日どうだっただろうか。

歌を聞いた。

力を蓄積、いつに無い力を引き出せた。

それは、奏でと翼が装甲を纏う前はどうかだっただろうか。

答えは、是だ。

俺の体は、喰らった歌を蓄積できる。

ならば、先の二人の歌とそれに同調する会場の民草。

そして装甲を展開してから二人の歌った歌。

一体、どれだけの力が今の俺には蓄積されている。

そして。

力が満ち溢れつつも、肉弾戦。しかも生身では飛ばすことしかできない俺と。

力を失い、装甲も崩れ落ちそうな奏。

力は、一体どちらにあればいい？

後は、俺の決断と覚悟だけだ。

構わない。

言つたろう、助けられる数——いや、もうここで失われる可能性があるとするれば、少

女と、力を失いつつある奏。

対して、炭化しても幾度も再構築される俺。

比べるまでも無いだろう。

奏が槍を拾い上げる。

その顔は晴れ晴れとしたもので、俺はこの顔を今までなんども垣間見てきた。

一番、最近なのは四年前。

セレナだ。

俺が持つてすぐ使えるように奏に背を向け前に立ち、彼女の槍を掴む。

「おい、何してんだお前、急にぼーっとして動かなくなっただと思つたら今度はあたしの邪魔しやがって」

阿呆はお前だ。若き戦士よ。お前はまだ生きられる。この人生を戦い続けられるにも関わらず、死ぬ気だろう。

「こら、引つ張るなって、あたしはこれから——」

一拍、間をおき。

「思いつきり、歌うんだからさ。せつかくこんなに沢山の連中が聞いてくれるんだ。だから、あたしも」

同じか。

セレナがかつて歌った、もれ無く歌えば七孔噴血、血まみれの凄まじい顔付きとなること請け合ひである、あの歌を。

だから、させるものか、と言つてるだろう。

俺の方が槍の前の方の柄を掴んでゐるため、前方に踏ん張る。奏もまるで綱引きのように踏ん張り、重心を後ろに掛ける。

これでは埒が明かん！

「ええい！ 分かったよ、こうなったらこのままやってやらあー！」

Gatrandis babel zigurat edenal——

あ、この馬鹿娘歌いだしやがった。

ならば、このままやってくれる！

なんか似たような事を言い。

俺は槍の切っ先を。

「Emustolorronzen fine el baral zizzl——あ、この馬鹿なにしていやが——」

俺が何をしようとしているのか直前で気付いた奏は、慌てて槍を引き、槍の軌道を逸らそうと——

あ、が。

——しきれず俺を後頭部から額までその槍で貫通した。

が、が、が、が、がああああああああああああああああああッ！！

当然、力が弱まっているとはいえ、ノイズを軽く破壊するエネルギーを内包した一刺しだ。刺す事は意図していたが、まさかの頭部貫通に凄まじい衝撃が脳髓を揺さぶる。

まあ、脳があるのか、そもそもそこは本当に頭なのかも知らんのだが。手と同じ形だしな。

刺して供給できたわ自業自得だこの馬鹿娘！

「ええい！ どうせ思いつきり空っぽになるまで歌う予定だったんだ、ここでいつそ綺麗に女、天羽奏、一華咲かせてやらあ！」

G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l ———

奏はそのままやけっぱちになったのか、続きを歌い始めた。

「いけない奏、歌っては駄目！」

俺と奏と違い一人シリアスな空気の悲痛な翼の悲鳴が届く。

了解した。

途中で止められ無い。

いや、そんなギャグにしてはならん。

それは、半端な状態での暴発を恐れてだろう。

そう、正しくは自分では止められ無い、なのだろう？

実際奏の人命が掛かっているのだ。

自棄っぱちになってるが、生きられるなら生かさねば、男が廃るといふものである。ならば。

俺は奏に向き合い、その顔を両手で鷲掴みにし、奏を触診する。

かつてのセレナほどでは無い。

だが、すでに奏は内部に相当のダメージを受けている。

よくぞ歌えるものだ。食道に血がこみ上げてきているはずであろうに。

「え？　ちよ、待ッ、何すん——」

無理やりにでも、物理で止める。

お前こそ生きる事を諦めるなこのたわけがあッ!!

思い切り仰け反り、ムシユフシユすら打ち砕いた我が石頭を振りかぶる。

「おま——ちよつと待て！　お前わかつてんのか！」

聞く耳持たん。彼女の額に頭突きを振り落とす。

「デコからあたしの槍がまだぶぐがふああッ!？」

額から結構な出血を撒き散らし、奏は白目をむいて意識を消しとばした。

……あ、そうか……やべ。今俺、額から槍の切っ先が飛び出たの忘れてた。

割とざっくり奏の額に槍は刺さった。血がぶびゅった。仰け反った。

「奏ッ!？」

翼の悲鳴が2割り増しになった。ん。まあそうだな。本気ですまん。

そして。

奏の切り札の歌は、中途半端な発動でかつ、手を離れてなお槍の切っ先を中心に放た

れた。

俺は文字通りロケットの如く吹き飛んだ。

その影響は、進行上にいた、ノイズをほぼ全て広範囲に巻き込んで消滅させ。

同じく爆心地にいた奏は俺とは逆に吹き飛ばされ、負傷している少女のすぐ横に炸裂、並んで俯く事となるのであった。

……狙っていた事と、だいぶ違うのだが。

しかし、先程奏が歌っていた歌にさりげなく入っていたジグザットとは懐かしい単語である。

セレナに会ったときは、すでに歌い終わった後だったしな。

そして。

飛んで、飛んで、飛んで。

あー。俺にぶつ飛ばされたノイズ共、こんな感じだったのかあ。

なんて考える余裕がある程吹き飛ばされ。

着弾。

そのあまりの衝撃に。

俺の意識は闇に沈んだのであった。

子供の泣き声が聞こえる。

子供とは、あらゆる未来を内包した、無限の可能性の卵である。その子供の、現実に打ちのめされる鳴き声には耐えられない。

泣き止まさせねば。

未来に、まだ希望はあるのだと、指し示さねばならないのだ。

だが、凄まじい衝撃で打ち付けられたダメージ故か。

対ノイズ兵器を体に突き刺したせいなのか。

体はピクリとも動かない。

あれからどれほどの時間が経ったのかは分からない。

だが、そうだとしても、とつくに活動限界時間に達し、崩壊してもおかしくはない筈だが。

コアモジュールにフォニックゲインの過剰投射を確認

警告

キャパシテイのオーバードロード。コアモジュール、並びに筐体が臨界点に到達、崩壊を及ぼす危険性があります

警告

過剰投射されたフォニックゲインを直ちに放出等、対処を実行命令下達

……

……

……

対処の未実行、もしくは不可を確認

応急処置として、コアモジュールの機能拡張、及び、新規格コアモジュールに適合可能な筐体構造へ拡張・更新

当該事案活動時、接触していたフォニックゲインデバイスの構造を模倣

警告

危急時の応急的な回路拡張処置により、対■エ■バ■ファイアウォールにセキュリティホールが生じた可能性、多大

ただちにプラントに帰還し、再調整を実行せよ

実行を断念

保留を指示

筐体に待機指示

筐体の更新を終了するまで活動の休止を実行

それから、いったいどれだけの時間が経ったのだろうか。

なにかが、俺を叩く振動を感知する。

俺は痛覚を有さない。しかし、触感はある。

感じ方からして、これは攻撃ではない。

むしろ、これは自傷行為か？ 何か鬱屈した感情を叩きつける時のそれに近い。

つまり、俺はノイズどころか木石と同じ様な扱い。動くモノだとさえ認識されていない可能性がある。

衝撃が変わった……もしかして俺の額から突き出ている槍で傷付いたのか。

ただ、その事で、何か変化が生じたらしい。

いつもとは異なるアナウンスが脳裏に響くことにより、俺の活動は再開する。

当機のアウフヴァアッヘン波形に完全相似形質の生態波長を確認
波長保有個体、物理接触を実行

波長の完全同期、確認

該当個体を当機の一時的ユーザーとしてチケットを発行

経過継続報告、ゲノム情報を取得

該当個体を、当機の最上位システム管理権限者として提言

命令上位権限者として登ろ――

現在実行中の作業タスクを全フリーズ

最優先執行項目を強制起動

コアモジュールに規格未登録の関数を確認

起動後の活動時、作戦へ支障の可能性、上限値の予測不可能

修正不能

一時保留不能

廃棄不能

破壊不能

排除不能

自己崩壊命令実行拒絶

——貴官を関数による筐体の命令最上位システム権限者として登録

セルフチエック終了

再起動実行します

整備担当者には後日、レポートの提出を実行義務を付与

雨が降り注いでいる。

初見の少女が泣いている。

濡羽色の髪をぐっしりと雨の重さで垂らし、整っていないながらも極東人特有の彫りの浅い顔を。

その顔を濡らしているのは、雨なのか、それとも涙なのか。

手を押さえており、赤い雫が俺に降り注がれている。

やはり、怪我をしているのか。

なんとか——泣き止ませられないものか。

駄目なのだ。

子供の泣き声は、本当に駄目なのだ。

身を起こす。

そう言えば、包帯一つ持ってない体たらく。

「ノ……ノイズ……」

うんまあ、そういう反応だわな。

目の前にいた少女は腰を抜き、へたり込んでしまった。

しかしな、俺は知っているんだぞ、さっき何かへの憤りで俺に拳を打ち付けていたことを。

まっことただのノイズだったらお前さんはとくにその時炭化して死んでるんだからな。ここに居るのが俺であつた事を感謝して欲しいくらいだ。

「え……？」

まあ、まだ子供相手だから仕方がないのだが、もう少し観察眼を鍛えてほしいものだ。「ノイズだからって、それは言い過ぎだと思うんですけど……」

……………は？

ちよつと待て。

今俺は、何のジェスチャーもしていなかった。

関わりの深い者は、俺が首を傾げたりするだけで結構意思が伝わる事が多い。

セレナとか。最近は割と奏にも読まれていた気がする。

だが、今回は別だ。初見の相手に克つ、俺は身振り手振り、ボディランゲージを表し

てなどいない。

だとすれば、何故この少女はナチュラルに俺と会話できたのだ……!!

「え? だって言にこうやって喋って……」

残念だが少女よ、俺の発する声は人には気合い一発叫んでいるようにしか聞こえないらしい。

「え……ええ……」

当機へ行動規範を下達

「きやあつ……また、今の、なんの声……?」

なんたる事か。少女は、俺に命令とログを兼ねて下されるアナウンスすら聞こえるらしい。

「めいれい……と、ログ……?」

全く理解できず……それは想定外すぎて俺も同様だが……戦慄する少女の事情など知った事か、と無情にもアナウンスは淡々と下るのであった。

曰く――

問われよ。『貴官は、当機のマスターか?』

驚いた……俺に、そんなものがあるのか、と。

事態は依然、全く以って不明だ。だが、目の前の少女が少なくとも、足掛かりになる

事は違いあるまい。

帰還への。

ならば。

最低限の礼儀として、俺が何者であるかを告げぬ理由はない。

まずは、我が正体を明かそう。

俺は、生前、ウルク第一王朝第六代王ウルヌンガル直属兵士団兵士長……そうだな、ハイトと呼んでくれ。

「……ハイト？」

ああ、今はしがない、生前の自我を取り戻した、ただの機能不全稼働中まったただなかのノイズにすぎないがな。

「そ……それはどうも……？ わたしは、小日向、未来といいます……ちゆ、中学生です」

これはどうもご丁寧に。

アナウンスの指示通り、というのは腑に落ちないところもあるが、俺は一度、何としてもあの謎空間へ帰還しなければならぬのだ。

……そう、俺は活動限界を越えてなお、炭化する事もなく外にいる。

きつと、セレナが泣いているはずだ。

この間、三日間遭難した時などは、もう十七になると言うのに目を真っ赤に腫らして

出迎えてくれたものである。

人と四年間、全く接していないせいで、新しい問題が発生しているのだ。

セレナはかつて、献身的な活動により、自分達を実験対象にしていた者達を含めて助けだした事がある。

他でもない、俺と彼女が出会った時なのだが、それに対して帰ってきたものは、感謝では無く実験台の損失への不満でしかなかった。

安堵でさえなかったのだ。

当然、彼女は傷付き、不信感を抱くようになった。

だが、セレナの本来の性格ならば、それでも、その心根が揺らぐ事はなかっただろう。彼女には姉がいて、人々と接する中でその心を癒し、再びより強く立ち上がらせたであらうからだ。

だが、良くも悪くも、彼女が傷ついたその時以来、接していたのは言葉の通じない俺だけだ。

その結果、心の傷が歪な形で縫合されてしまったのだ。

人にとって、最も大切なのは人との交じり合いなのだ。それを一切絶たれたセレナは、元々お姉ちゃんっ子であったようだし、その欠乏している部分の代用として俺を求め……。

あれは駄目だ。依存でしかない状態になっている。

「ああ、いつか。姉に返してやらなければ。」

セレナを本当の意味で癒す事ができるのは、家族だけなのだから。

全く、俺は子供を泣かせてばかりで育児に難のある男だな……。

……あれ？

いやいやいや、何を脱線してるのだ、と気をとりなおし立ち上がる。

少女——小日向未来の前に跪き、告げる。

故。我は問いに対する返しを請う。

問おう。

「あ、は、はい」

佇まいを直す少女へ。

貴女が俺に適合したマスターか。

「……………え、あ、はい？」

当然ながら、彼女の、返答は困惑だった。

分かるわー。俺だって言われたらそうなるしなあ。

04 芻夢

「響！ ライブ行かない？ ライブ!!」

始まりは、取り立てて特別でもなんでもない、ただ、感動を共有するイベントで済んでしまうような――

――そんな一日の開幕に過ぎなかった。

「うゝむ、ライブ？ はて……あつ！ 『フードファイター灼熱電流爆裂デスマツチ実況生ライブ』の事？ はて。これは年末だった気が？」

「自棄っぱちの色物三倍段みたいなものが飛び出してきた!」

私の目の前にいるのは立花響。一番の親友で幼馴染だ。

趣味は人助けとご飯さらにご飯。あと、けっこうお父さんっ子でその影響かはわからないが、一般的な女子とは大分感性がずれている。

だから、思っていた反応とはぎよろりと違うものを持ち出してきても、いつも通りだなあと思えなかったし、何よりこの話を持ちかけるに至った高揚がそんなこと関係ない！ とばかりに私を後押しするのだった。

「そうじゃなくて！ ツヴァイウィングだよツヴァイウィング！ 新進気鋭の美人歌手

二人組！ 綺麗なだけじゃなくてリディアン音楽院の在学生でそれに裏付けられた歌唱力も抜群なんだよ！」

「へー。それは凄いなー」

「響つてば反応薄つすい！ 聞いて驚いても知らないよ！ なんと十倍以上の競争に勝ち抜き、ライブチケット2枚、ゲットしたのです!!」

「凄い未来頑張ったね！ それで？」

「察しが悪いですよ響さん。私は今、一緒にいこう、と誘っているのです。しかも終わつたら口コミでのみぞ知られる名店、ふらわくで鉄板焼きフルコースなのです！」

思わず芝居がかつたセリフ回しをしましょう。リディアン音楽院へ進学した先輩から。「行け。立地的にも味覚的にもリディアン名物であるアイドルとふらわくをハシゴせずしてなにが音楽院生かツ!!」と強く勧められている。音楽院生関係あるのだろうか。あと、当然この先輩は音楽院生なので女子である。

「はいっ！ 立花響、ふらわく食い倒れ全速前進致します！」

あくやっぱりかあ。

私は頭を抱えた。

チケット争奪戦の激闘を勝利でもって幕を降ろしたにも関わらず、その敢闘を讃えるよりもヨダレが分泌されてしまっているのだ。

だが、響マイスター特級（自称）の私には分かるのだ。
ツヴァイウィングは、響にとっても合うのだと。

しかし、響は鉄板焼き、鉄板焼き、とりフレイシしながらぐるぐる回っている。

ちよつと失礼かもしれないけれど小型犬みたいで可愛い。なんて感想が出て来てしまふ。

私自身、ツヴァイウィングの大ファンなので、胸が躍るとはこの事を言うのだろう。

しかも、響と一緒に言うのならその感動は一際輝くというものだ。

そうそう。自己紹介を忘れていた。

私は小日向未来。

響の親友で、陸上部員。ツヴァイウィングのファンであり、彼女達の通うリディアン音楽院に進学希望の女子中学生。

それが私です。

しかし、ネット上の争奪戦は激闘だったよ。

わざわざプロバイダと中継局から私の家からの回線速度を比較検討、予約のコンピュータサーバーとなるべく同期を取つていの一歩にチケット購入の情報を滑り込ませられるか、即席で勉強して頑張った甲斐があるというもの。

本番自体は確定事項な感じで手に入れられたけど……うん、勝利は事前の準備が全てを決めるのです。

その積み重ねで正直……眠気が限界でありまして。

授業中、これは、耐えられなさそう、です。

案の定、授業中にすっかり落ちた私は起こしてくれようとしているのは有り難いけど騒ぎ過ぎて即バラしてくれた響共々チョーク投擲の洗札を浴びたわけで……。

今時、そういうのはやらないでいいと思います……。
だけど……。

「未来……聞いて?」

と言うお母さんの声を聞いて、私は嫌な予感がした。

「盛岡のおばさんがね。怪我したみたいなの」

「え、大丈夫なの?」

「怪我自体はそんなに酷くないんだけど、動けなくなっちゃったみたいで。荷物をまとめ次第、お父さんが車出してくれるから」

「え……」

「今日、響ちゃんとライブに行く予定だったのは知っているわ。ごめんなさいね。断りの電話、入れてあげてね」

そんな……としか、言葉が出てこなかった。

だって……。

だって……。

私は自分からは結局、断りの電話を入れる事ができなかった。

「未来今どこ？ 私もう会場だよ〜？」

響から、呼び出されるその時まで。

「ゴメンちよつと行けなくなっちゃった」

本当は、もっと早く行けない事は分かっていたのに。

「ふおおおええええええええええ!! どうしてええ!! 今日ライブって未来が誘ったんだよお

?」

「盛岡のおばさんが怪我をして、お父さんが今から車を出すって」

「私よく知らないのに〜」

「本当にごめんね」

自分から誘っておきながら、自分から響をがっかりさせるのが嫌。ただそれだけで、響からの連絡を待っていた臆病者のせいだ。

「うん……私って呪われてるかもお」

なんて、通話を切った響が言っているのも容易に想像がつくぐらい、あなたの事を熟

知しているのに。

結局、おばさんは入院への付き添いだけで終わった。

病室で、大したこと無くて良かったね、とそんな当たり障りのない談笑を終え、帰ろうと廊下に出て。

『ツヴァイウィングのライブで発生した特異災害、通称ノイズの被害状況について、死者数、負傷者の受け入れ先の病院等は未だ把握仕切れていない混乱が続いています――』

「……………え？」

そして、私は自分の罪を知った。

病院の談話室で見ってしまったこの一報に、ライブに行けなかった不満や、このぐらいなら自分はライブに行っても大丈夫だったではないか、という落胆や、響をがっかりさせただろうなあ、という罪悪感は全て自己嫌悪で瞬く間に塗り潰されたのだ。

それから、どうやって自宅へ帰ったのかは記憶にない。

時間の経過を後から逆算するに、行き同様お父さんの運転する車で帰って来たのだろ

うけれど。

だって……。

だって……。

ああ………。

ああ………いつも通りだ。

いつもこの時この瞬間に辿り着き、繰り返す。

だって、響はライブ自体にはあまり乗り気ではなかった。

尤も、ツヴァイウィングの歌唱を一目見たのなら、響なら一発で感動し、そんな事気にならなかったであろう。

問題はそこではない。

もし私がライブに行けない事、それが分かった時すぐ連絡を入れれば響は一人でライブに参加したりしなかったのだ。

私の、単に私の口から響を落胆させたくない、という自己保身が。嫌な事を後回しにするその性根が。

私が。

「響ちゃん、大怪我したって、緊急手術しないと予断を許さない状態だって……」
響を、死地に追い込んだのだ。

許してはならない。

決して時間の経過で風化させてはならないと。

「あああああああああああああああああッ!!」

「未来、待ちなさい!!」

私は、両親の制止を振り切り、自分の罪を棚上げして、走り出した。

雨が降り注いでいた。

水たまりも避けずに踏み抜き、降り注ぐ雨粒を遮ることもなく、走って、走って、走って。走って。

ただただ、自分に残ろからにじり寄る罪悪感から逃げ出したくて。

だけど、そんな事出来るわけもなく。

どれだけ走ったのかわからない。

こんな時、陸上部員である事による無駄なスタミナが自分をかなり走らせていた。

それでも、配分も呼吸も意に留めず闇雲に走れば力つきる。

そこは、河川敷に並列して敷設されている小さな公園だった。

普段の私ならその異様さにすぐさま気付いただろう。

まるで、隕石が炸裂したかのように地がえぐれ、遊具がひしゃげたり潰されていたり

したのでから。

だけど、当然その時の私はそんなことに気を止める余裕なんて微塵もない。

体温が低下する雨の中を無作為に全力疾走し続けたせいで呼吸は乱れ、視界も踊り、天地が上に行ったり下に行ったりぐるぐる、ぐるぐると胃の中身を吐き出せと行つてく
る。

どうでもよかった。

ただ、自分を痛めつけたかった。

それが単なる、気を紛らわせるといふ。自己肯定——自分を傷付けているのだからそろそろ許されてもいいだろうという気持ち——に気付いて、もう一段自己嫌悪。

手近な遊具に手を叩きつける。

ぐえ。

星の形をした、どうやって使うのか見当もつかないレモンイエローの遊具だ。

うっ、ぐ、ごはっ。

それに拳を打ち付け、ただひたすらに自分を痛めつけたくて。

ごっ、がっ。

その度に、息が詰まるような音がするが、それが私の口以外から出ようが知ったことではない。

いや、これはだな。

うるさい、黙って。

「痛ッ……」

何度殴った時だろうか。

遊具から飛び出ていた鋭利な……棘？ でかなり深く手を切ってしまった。

ポタポタポタ、と、止血が間に合わず、遊具に次々と血液が注がれる。

きつと、それが決定的なことだった。

ゲノム情報を取得

「え、なに……？」

その時、ようやく気づいたのだ。

頭の中に、無機質な声が呟る。

ヴン……と鈍い音と共に星型の遊具、その中心に光が灯る。

紫色の地に濃いめの黄色い幾何学模様が描かれたモニターが灯る。

そこでようやく気がついた。

これは。

「ノ……ノイズ……」

私が無遠慮に殴りつけていたのは、人類の天敵とも言える存在、ノイズだった。

そう。今日、出現して響に襲いかかったのだ。居たとしても何もおかしくはない。ノイズは一定時間の経過で崩壊し、単なる炭になってしまうようだが、まれに長生きする個体もいるのだと思う。

響を大怪我させた私にふさわしい罰だった。

ノイズへ追いやつて親友に大怪我を負わせた私なら、ノイズで死んでしまっても妥当であろう。

自業自得、とはこのことなんだろう。

うんまあ、そういう反応だわな。

「え……………」

ノイズが、喋った。

まあ、まだ子供だから仕方がないのだが、もう少し観察眼を鍛えて欲しいものだ。

ノイズからも凄いだめ出しをもらった。

「ノイズだからって、それは言い過ぎだと思っただけ……………」

自分の目の前に鎮座する命の脅威に対し、間拔けな抗議をしてしまった。

……………は？

ちよつと待て。

レモンイエローの星型のノイズは、モニターのような中央部分を黄色と紫に明滅させ

ながら高速で何やら自問自答を始めた。

聞こえるのだけれど、物凄い早口で……いや、考えだから高速思考なのかな？ 流すものだから、全然理解が追いつかない。

愕然と、といった感じでこちらを注視（目が分からないけれどそう言う雰囲気なのは分かる）するノイズは結論を出した。

何故この少女はナチュラルに俺と会話できたのだ……!!

結論とも言えない結言だったのだけれども。

でも、そんな普通に聞こえるのだからしょうがないではないか、との旨を伝えると。残念だが少女よ、俺の発する声は人には気合一発、叫んでいるようにしか聞こえないらしい。

「え……ええ……」

え？ 私なんか変な電波受信してるんですか？

当機へ行動規範を下達

「きやあつ……また、今の、なんの声……？」

いよいよ以って末期に到達した。

目の前のノイズの声らしきものとは違うものまで頭に飪している。

いや、最初に聞いたのはこの声ではなかっただろうか。

その事が分かったノイズはまたも早口で慄いていた。どうやら、動揺すると早口になる気質であるらしい。

なんとか聞き取れた内容だと命令と、何かしらのログであるらしいけれど。

問われよ。『貴官は、当機のマスターか?』

ログとやらは容赦なく私の頭に響いてくる。

これは目の前のノイズにも聞こえているらしい。

そして自己紹介された。

どこぞの王国で兵士長とやらをしていたノイズで、ハイトと呼んで欲しいらしい。

多分偽名だと思うけれども、名乗られたのなら、こちらも返さなければならぬ。

私が名前を告げると、しばしハイトは沈黙していたのだけれど、おもむろに立ち上がり、私の前まで歩いてくる。

り、私の前まで歩いてくる。

この時、既に私の中で、このノイズで死ぬことは出来ないだろう事は分かってしまっ

ていた。

だけど。

問おう。

「あ、は、はい」

ああ……もうすぐだ。

もう、目が醒めるのだ。

この夢を見ない日は無い。だから、もう分かるようになってしまった。

これは自戒なのだ。

たとえ響が許したとしても……いや、響なら絶対許してくれるだろう。だから、それだけは乞うてはならないのだと、決して楽になろうとしてはいけないのだと。

私が、私を絶対に許してはいけないのだと。

罪を無かった事になどしてはならないという事を。

常に自罰し続け、許す事なく苦しみ続けよ、と。

響を傷つけたノイズという存在……このノイズ、ハイトのせいでは無いのだろうかけれど、提示した事を受ける事は、これ以上無い私への罰となるのだと。

貴女が俺に適合したマスターか。

「……………え、あ、はい？」

それを聞いて抱くのは当然ながら、困惑でした。

だけど、ストーン、と胸に落ちる納得が、そのノイズへ手を伸ばす切欠となったのは確

かで。

「よく……分からないけれど、その……私で良ければ、お願いします」
そう告げて、その手を握ったのだから。

かゝらゝの――

日差しがカーテンの隙間から差し込んで来る。

そう。

いつも通り、毎日見る悪夢から覚めたに過ぎない。

そう。

一日の始まり、誰が何と言おうと、朝であることは間違いない。

朝だった。

朝だ。

そう、朝である。

朝、朝、あさ、アサ、アサ！

朝になったってゆーのに！

「ふん……ぬうつはあああああああ……!!」

瞼を開いたらヒトデによる腕立P u s h i u pて伏せが視界一杯に広がっていた。

うつわー。

朝っぱらからこれは食欲無くすなー。

寝返りを打って天井を仰ぎ見る。

「クウウウウウ……つかあああああああ……!!」

梁を握力だけで掴み、身を上げ下げするヒトデC h i n i u pの懸垂。

オーマイゴツド。

神は私に天を仰ぐ赦しさえ下さらないらしい。

身を起こす。

「ふん、はあ！ はっはあ！」

「もつと……もつとだ……!!」

「………はあ」

大して広いとは言えない私の部屋を埋め尽くさんばかりに犇めき、ビルドアップに勤しむヒトデ、その数実に九体。

目が覚めたのに。

この胸焼け間違いなしの暑苦しい光景が延々と続いている。

ここだけで、間違いなく気温は10度以上上がっているに違いない。

「この悪夢が覚めてくれない……」

ねえ……響……。

手を差し出したその結果。これも罰だとは……正直思いたく無いよ。



さ
ご
て。

マスターと契約したものの。

まずどうするのか、で非常に悩んで居た。

うーむ、まずはマスターを家に返すべきだろうな。雨でずぶ濡れだ。このままだと肺炎だな。

結構な雨なのだ。深く切った手の手当ての際、止血に大分手こずった程である。

「いや、そんな重症にならないと思いますけど……」

マスター。「雨をなめるな。」

「あ、はいごめんなさい」

素直に謝れるのは美德だ。誇るといい。

「あ、はい。ありがとうございます」

帰ったら湯に浸かるかどうにかして、体を温めるといい……問題は、俺かー。

特異災害とまで言われているノイズ。これ以上日常にそぐわぬ物もいまい。

俺は他のノイズと違ってすり抜けとか出来ないしなあ。

「あの……家に来ませんか？」

……一般家庭に、ノイズを？

「私の両親ならなんとかかなりそうです」

凄いな。凄いな。凄いな。

「魔法少女物の漫画とかで、家族に隠すのとか、大変とかよくないと思ってたんですよ。絶対無理生じますって」

ふむ……魔法少女か。パンケーキなる単語しか知らないが。現代を俺より知っているマスターが言うのならばそうなのだろう。

「な、なんでパンケーキなんですか？ あ、それともう一つ、良いですか？」

ある魔法少女は、魔神を捏ねてパンケーキを作るらしい。魔神のトラウマになったらいいな。それと、マスターなのだからそんな一々畏まらなくて良いぞ。

「魔神をパンケーキに……？ どうも、目上の人に感じてしまつて……あの、そのマスターって呼び方止めてもらえませんか？ いえ、マスターとしてちゃんと契約しますけど、そう呼ばれるのはちよつと……はい、未来、と普通に読んでください」

こちらなりのケジメだったのだが……そう呼ぶならば、従おう。ミクと。うん。俺の発音だとこれが好ましい。

「こちらこそ、ノイズのハイトさん。これからよろしく願います。先ずは……おうちかー」

気が重そうだな。あと、ミクがマスターなのだから、呼び捨てで頼む。

「呼び捨てですか……が、頑張つてみます。」

気が重いのはしょうが無いですよ。こんな遅くに家を飛び出したんですから。間違

いなく怒られます。だからこっちはインパクト叩きつけて有耶無耶にしようかと」
インパクト……?」

「そう、ハイトさんですよ。うん。やっぱりこれ以上のショックはないと思います」
ミク……。

彼女は思ったより、強かなようだった。

が。

見積もりはそんな予想を遙かに上回って甘かった。

そりやもうこつてこてに甘かった。

「駄目でしょ未来! また生き物……海モノ? 拾って来て! いつつもお母さんが世話する事になるんだから、元の場所に返して来なさい!!」

「大丈夫だから! ハイトは自分でご飯も取れるし、面倒殆ど見なくていいんだから」

「まあたそんな事言つて! そう言つて飼つたダイオウグソクムシ餓死にかけてたでしように!」

……ふむ。

おお、この家は土足禁止なのか。

雑巾で足を拭いていると、男性に手招きされた。

ミクとその母の言い争いから逸れるようにそちらに向かうと——
「チーカマ、食うか？」

餌付けしてきた。

その心遣いは有り難かったが。

口が無いので……。

「そうか……」

手を振って断るととても残念そうな顔をされた。

辞めろ。罪悪感湧くじゃないか。

「お父さんも勝手に餌あげないで!!」

しかも目敏く見られていたようで、母親に咎められた。

可哀想にビクツと跳ねる父親。

「そうやっていつつも自分だけ好かれようとするんですから。それで逆にチワワにマウンティング取られたの忘れてないでしょう？　なんだかんだ言っただけあなたも未来に甘いんだから——未来！　あなたも聞いてるの!!」

哀れ父親。

だが、色々と俺も笑えないので口にしない。したら様々なものが自分にも刺さるのである。

「まったく……前も蟹とかイソギンチャクとか蛸とかヤドカリとかウミウシにホヤとか海栗まで！ まあ大半お父さんが食べちゃったんですけど」

食ったのか。

「うん……」

通常、食えやしないと嫌われている海星擬きで良かった、と胸を撫で下ろしつつ。

ところでミックよ。

「え……なにかな？」

背骨の無い海産物が……お好きですか？

「ええ……それなりに……」

「未来、聞いているの！」

「はいッ!!」

先は、長そうである。

「もう駄目くお母さん、説教が長すぎるんだよお……」

しばらくして。

俺はミックの部屋にいた。

なんだかんだ、育てきれなくなつて放流するまで、という条件で飼育の許可された俺

である。

……俺とか、放流されたら大騒ぎになると思うんだが。

しかし。

部屋を見回し。

「あんまりジロジロ部屋を見られると恥ずかしいんですけど……」

ああ、それは失礼した。

ところでミクよ。もしや君の家は裕福なんだろうか。

「え？ 普通の一軒屋ですし、平凡な中流家庭ですけど」

未成年に個室を与えるとか俺の感覚で言えば裕福としか言いようがないのだ。

「えーつと、失礼ですが、貧しかったですか？」

確かに楽とは言えないが、収入は他所より多くもらっていたため貧しくはなかった。

ただ、子供が十三人居たからな。個室という概念は裕福でなければありえんな。と

言うかミク。申し訳ない。忘れていた。

両親だけではなく、兄弟にも挨拶ぐらいはしておかねば——八人ぐらいか？

「そんなにいませんよ！」

そうか。いやでも。五人ぐらいは居るだろう？ 魔獣にでも食われてなければ。

「いません！ 一人っ子です！ 今時、そんな大家族は話題になるレベルなんですよ！」

馬鹿な！ それでは人口が増えないではないか！

このままではこの国は滅ぶな。

王や祭祀は一体何をして……いや、業務からしてこれは巫女達の仕事か？

「……なんでノイズに少子高齢化を真剣にダメ出しされてんだろう……」

割と人がポンポカ死ぬ世の中だ。

それに負けず産めや増やさねば人類は食い尽くされてしまうぞ。

「いやそこまでこの国物騒じやないですよ!! 今日ノイズ出ましたけどそんな引つ切り

無しにあんなの起こるわけじゃないですし！」

それは感覚が麻痺しているんだよ。

目の前で起きなかった現実味の無さも原因だろうな。

アレは、間違いない——エスカレーターするぞ。

「え、ハイト……さん、現場に……居たんですか……!?!」

それについても話そうと思う。

俺は、セレナという少女と四年間謎の施設にいた。

「謎……って、なんですか？」

謎としか言えないからなんとも言えんが……もう、なんとというかウネウネのげにやげにやだったからなあ。

「うねうねのグニャグニャってなんなんですか……」

いやもう、そうとしか言えなくてな。

「なら……もう良いです、それで」

うむ。そうしてくれると助かる。

腕をぐねぐね踊らせる俺を見て、頬をヒクつかせるミクは、思考を一旦横に置いたらしい。促して来た。

だが、なんの施設だったかは辺りが付いている。アレは、ノイズの生産工場だった。

「ノイズって……作れるんですか」

俺もよく知らんが……少なくとも俺が生きている時代にノイズなんてものはいなかった。

分かるのはアレの目的が対人殺戮一択だという事だ、そして、ここ数年、そこから自然に溢れ出すのではない……意図的な稼働が頻発している。明らかに、その頻度が加速度的に増加中だ……。間違い無く、これから物騒な事になるぞ。

「そんな……でも意図ってどうして分かるんですか？」

明らかにな。その時点の最善で動けばギリギリ人口密集地への流入が阻止できるような呼び出され方なんだよ。人類側の対ノイズ勢力の動きや効果を知っていなければ出来ないような絶妙さだ。まあ、何故か出撃に巻き込まれていた俺が邪魔していたか

ら、実際はずっと楽だったんだろうが……。

「出撃に巻き込まれていたんですね」

そうなんだよ、しかも割と毎回。

それで、今回のツヴァイウィングのライブにも呼びされたわけだ。

ミクの友人が誰だったのか知らないが、もしかしたら見ているかもしれないな。

「はい……」

ミクは陰が残るものの、明るさを取り戻していた。

それと言うのも、重症で担ぎ込まれていた友人が、なんとか峠を越して安定したとの連絡を受けたからである。

ミクにとって最大の懸念事項が解消されたのは有り難いので、次は俺、となるのだが。

正直、マスターを得たからと言って、実際、解決できるものではないのだ。

「と……言うのと、どう言う事なんですか?」

情報漏洩していたようである。

それと言うのも、俺とセレナはその工場に半ば幽閉されていたようなものなのだ。

俺は巻き添えで呼び出されていたが、ノイズは長時間こちらに滞在できないからな。

いつも炭化崩壊した後、コアと思えるものが回収され、新たなノイズの体に埋め込まれるのエンドレス。

それが今回、これだけの時間が経っているのに炭化崩壊する兆しもないのだ。

俺としては牢獄から解放されたことは有り難いが、生憎、俺にとっては一番あの牢獄から出したいのは人間であるセレナだ。

……初対面のマスターに言うのもあれだが、セレナは非常に情緒不安定だな。

一人にして置けないのだ。

「まるでお父さんみたいですね」

実際、それ以上の年の差だろうしな。

「……ハイトさんは、一体、何歳なんですか？」

さつきからさん呼びが戻ってるんだが……まあいいか。正直分からん。

街並みの変わりように度肝を抜かされているのは事実だ。相当の年月だ、と言うことだけしか分らん。

ちなみに、昔俺が仕えた王、ウルヌンガル王はご存知か。

「すいません、ちよつと分かんないです」

別に責めてはいない。人としては有能な王だったが、年月に伴いその伝承が風化していてもおかしくはあるまい。

「は……はあ」

今、この場での最大の問題は、俺がセレナの元に戻れなくなつたことなのだ。

最善はセレナがこちらに来ることなのだが……無理だろうし、嫌がるだろうしなあ。

「その……コアとやらを回収する時はどうやってるんでしょね」

……………あ、それか!!

だが、どうやって、が全然分らない。

「困りましたね……私がマスターだから、コアを回収する時の作業をさせられるかな……?」と思っただけですけど」

可能性はあるが、ミクがマスターとして権限を把握する必要があるだろう。

時間が掛かってしまう。出来ることなら今すぐ帰らなければ。

「うーん……」

それはきつと、困り果てている俺の気を紛らわす為の、何気ない冗談に過ぎなかったのだろう。

「例えば……『開け〜ごま〜』とか……いや、なんでもないで——」

ミク自身が恥ずかしくなって最後まで言えなくなるようなそんな冗談になる、その筈だった。

コアモジュール回収ゲートへ伝達

当機マスターの要請により、緊急展開

隠蔽性を度外視、裏門を開門

なんてログメツセージが出たせいで、二人とも固まった。

……はあ!?

「じよ、冗談ですよ、冗談で言ったんですよ!?!」

分かってる!

だが、幾ら何でもブカブカ過ぎんだろう、認証オ!

思わず頭を抱えた瞬間、俺の全身がエメラルドに輝いた。

お、おお?

輝きが全身を包むや否や、頭頂部からレーザーのような物が迸り、中空にエメラルドの波紋が浮かんだ。

待て……! この開門、俺は見たことがあるではないか。

波紋が広がり、やがてその向こう側が見えてくる。

その先には果たして――

なんと言うことだろう。

その先には、見覚えのある正気の磨り減りそうな空。

そして……。

遅かった。

耳を除く顔中の穴という穴からあらゆる液体を垂れ流し、美少女という単語をドブに突っ込むようなヴィジュアルに成り果てたセレナがエメラルドの波紋の放つ光に気付いたのだろう。

俺と、目があつた。

「あ、ああ、あ、あああああああああああああ！」

セレナあああああああああああああ!!

セレナの泣き声を止めるべく、俺は一直線に波紋に向かう。

だがしかし、俺は少し考慮すべきだったのだ。

この門は本来、コアモジュール回収限定の門であり、ミクの何らかの力で無理やり本来の規格をはるかに上回るサイズで展開したものである。

つまり……。

俺の通過を考慮して展開したものではない、という事である。

ぎゅぼっ。

「あ（ミク）」

あ（俺）。

「あ、あ、あ（セレナ）」

つまり。

止まった。

ハマった。

つつかえた。

すっぽり俺は閉まり行く門に嵌め込まれ、時間の経過に伴い、門は閉まっていく。

お、おお、おおおおおおおおおッ!?

しかも安全装置全くなしの問答無用。

四肢を踏ん張るが、全く功を奏せずメリメリシミシ全身が潰されていく。

「ああ、ああ、あああああああああー!」

その姿に、セレナが悲鳴をあげる。

「あ、ヒあ、トあ、のあ、夢、あ、小あ、夜あ、曲あ、星あ、のあ、瞬そ、きう、だ。

Seilien coffin airgetlamh tron」

はい？

セレナが、対ノイズ装甲を展開し、よいしょお、と拳を振り上げた。

待て。待つんだ。何するか分かってるので敢えて言うが、何をする気だ。

「エネルギー・ベクトル収束、推進強化ッ!!」

待て、いや、それどんだけ本気だ。

身体駆動など全くもって適当な踏み込みはしかし、そのエネルギーを全て全く無駄にする事なく、セレナの唸喊力に変換され、爆発的な速度で突っ込んで来る。

ヤバイ。砕け散るぞこれ。

全身完全にハマっていて身動きは全く出来ない。必滅とはこの一刺しとは正にこの事か。

だから、俺を救ったのは外的要因だった。

「えと……ええつと……もつと開けゴマ!!」

背後から聞こえるミクマスターの声に全身が輝き——

コアモジュール回収ゲートへ伝達

当機マスターの要請により、緊急展開・規格拡張

隠蔽性を度外視、裏門を維持

開くんかい!!

いや助かったから文句がいかんのは分かるが。マスター権限大きすぎやしないか？

とはいうものの、流石にギリギリである。

生じた僅かな隙間で体を振り、ストラックアウトよろしく俺を撃ち抜こうとしていた拳をかわず。

「え、うわ避け——」

「きゃああああ」

「え、今誰の声、見えない!?!」

分かり易く言うと、拳をかわされ驚愕したセレナが俺に激突。

スポンつと言う音と共にすっぽ抜けた俺は背後にいたミクに勢いよく突っ込んだ。

俺の背中に押し倒される形になったミクは当然悲鳴をあげるが、俺の体が邪魔でセレナには見えなかったのである。

よいしょ、とセレナを退かしてミクに手刀をかかげて謝罪。

なんと——言う事だろう。

セレナ脱出ミツシヨンコンプリート!!

「え……どうして一片の悔いも無さそうに拳振り上げてるんだろう」

まあ、ミクは分からないから仕方あるまい。

この達成感を。

「ところで、この子、誰?」

周りを見回し、訝しげなセレナ。

相手が年下なのに、全身が逃げ腰なのが情けない。

「き……綺麗な外人さんだ……」

ミクが思わず漏らした言葉に眉をひそめるセレナ。

確かに、セレナは顔中ギットギトにしている自身の体液がなければ極めて美少女である。その補正を逆算して美少女と見極めたミクはすごいものだ。

さて、今のは賞賛だと思うが、どうしたのだろうか。

「Who are you?」

「すみません英語分かりません!!」

まずはミクで対人関係リハビリだと息巻いていた俺はいきなり壁に激突した。

人はそれを言葉の壁という。

分かりやすく粘土に表を作ってみる。

セレナ↓俺。基本一方通行。ただし付き合いよりジェスチャー翻訳精度高し。

ミク↑↓俺。マスター権限的何かで完全に相互意思疎通が可能。

セレナ↓俺中継↓ミクが可能。逆が問題か……。

「本当粘土好きだよね……」

言い忘れていたが、ミクの開いたゲートが今度は開きつぱなしになっている。

大丈夫だろうかと思いつつ、粘土を取ってきた次第である。

「これ、使うとかどうかな」

と言つてミクが取り出したのは手のひらサイズの……なんだろう、礼装かこれ？ 星
見の魔術師達もこんな端末を持っていたようだが……。

『何を言っているか分かりますか？』

……端末が喋った。

市政の民にまでこれだけの礼装が普及しているだと……！

「うわ、なにこれ凄い。もうこんなに技術進んでるの!？」

セレナはこれを知っているらしい。

まあ、謎の空間にいた間に大分技術革新が進んでいるようだが。

「え、ここ触れて喋れば良いの？ 凄いね。『うん。分かる分かる』」

『はい、分かっています』

「やった、通じた!」

今度はセレナの言葉を訳したのだろう。

こうなれば話は早い。

粘土に記録を刻む傍、俺を放つて少女二人は対話を進めていく。

よし、次の粘土だ、と門に身を乗り出したその時。

「ねえ、ハイトつて言うんですね。仕方ないとは言え、人伝てに名前を聞いたのは仕方ないですけど」

ぐわしつ、と頭を鷲掴みにされた。

どうした、セレナ。

ぐいっと持ち上げられ、視線を合わせられる。

折角再開できたし、脱出もできたのだ。

だと言うのに、何故そんなに不機嫌そうな顔で俺を睨んでいるのだろう。

「マスターってどう言う事？」

『成る程、確かに事情を知らなそうな子にマスターをさせるとは何事か、と言う事だろう。』

しかしだ、俺自身、思うことがないでは無いが、帰還の手を失ってしまったが故、手段を選べなかったのだ』

実際セレナ、顔が凄い事になっていただろう。

ありがたい事に、ミクが礼装で翻訳してくれるサービス付きだ。

以前ならこの後異様なジェスチャーゲームが始まっていたから画期的革新である。

だがミクよ、顔の事も翻訳して構わないぞ？

「いえ、女性に顔の事は敢えて言うものじゃ無いです」

成る程。

「……………むう」

どうした……セレナ？

覗き込むが、なんでもないと、となんでもある顔で流されてしまった。

ミクの温情か、顔の部分は訳されなかったが、なんの中継も挟まずスムーズにコミュニケーションを交わせる様はセレナに疎外感を与えてしまったらしい。

ふむ。どうしたら良いマスター。同じ女性として教えてほしい。

「無理難題ふっかけないで下さい！　しかもなんでこんな時だけマスター呼びなんですか！」

難儀だな。

「ていうか……何コレ」

くいくい、と俺の頭を貫通する槍の刃が弄られる。

こちらこちら。それ思ったよりバツサリ切れるからやめなさい。本気で危ないから。

ミクだって実際それで結構深く切ったのだ……お陰で適合が確認できたから俺としては助かったのだが。

やはり、怪我はいけない。

「……なるほど、この子がマスターかどうかつてのは、血で分かつたんですね……よお、しギエツ、あだあつ!?　ひでブツ!　……い痛ったあ!?　いきなり三連チヨップとかなににするの……あーえーと、ハイト！」

『いきなり自傷行為に疾ろうとするからだ馬鹿者。』

しかし、今でずつと一緒に暮らしてきたとは言え、改めて名前を呼ばれ始めるとこ
う、新鮮な気分だな。大変よろしい。

これも一つの進展だな……だがしかし、血でマスターになるなら、初めて出会った時
なっているはずだ。あの時のセレナは七孔噴血状態だったんだから……いやあ、本当
元気になってよかった……!』

「なんか急にお父さんになってる」

いやな、ここはいきなり自分の手首かつ捌こうとしたセレナを窘めてほしい。

「うーん……部屋に変な穴空いてるし、変なヒトデならなんとかなったけど、外国の女の
人とか、どうやって……」

この状況を両親になんて説明したら良いか悩んでいるミクに、セレナは向かい合って
端末に。

『まあ、ミクがいれば行き来出来るようだし、なんとでも——あ、ごめんストップ』

笑顔が固まったセレナは百八十度反転、門に突貫。

その淵に手を掛け——

「ごめんやつぱ無理気持ち悪おおおええええええええええええええええええええええッ!!」

「うわーっ!?!」

思わず引くミクに、手刀で謝罪し、セレナの背中を摩る。

人間不信を拗らせているセレナは、ミクが歳下であるし、俺と無関係では無いため平静を装うとしたのだろう。

まあ、門開けたてのあの状態から持ち直したのは流石だが、やはり、親密度の低い状態ではストレスリミッターが限界だったらしい。

「響ー。体はどう?」

「いやあ、想像以上に快調快調でございますわー。でもですね、未来さん。私、響は入院食だけでは少々物足りないのをごさいます」

「はあー。まったく、響ったら。はいチョコバー。見つかったら怒られるからこつそりね」

「うわーい! 未来ってばやっぱり私の陽だまりだよ」

「チョコぐらいでそんな大げさな……でも陽だまりだと溶けるよね、チョコって」

冷静にツツコむ未来だったが、その鞆の中に暗記帳があるのが見えた響は首を傾げる。

「あれー？ テストってまだだよねー。どうしたのその暗記帳」

「うーん……実は、急に外国の人とメル友になっちゃって……大至急、実用英語覚えなきゃいけないんだよね」

「そのシチュエーションが想像できない……でも未来、私にも紹介してね！ あー。でも今度、私にも英語教えて欲しいなー、とか……具体的に今度のテスト、元々やばいのに入院で補習へのカウントダウンが止まらないんだよー」

ああ、これが休みを持つものの苦悩と言うやつかーと頭を抱える部分はスルーして、未来は領いた。

「うん。きつと紹介するよ。でも吐くかもしれないから気をつけてね」

「なんで吐くの!？」

「いや、それは——ってうっひゃああああ!? なにッ!? 何これ! 近くにいるの?」

「え、どうしたの未来?」

「いや、響なんでもな——念話ってなに? 基本? ……あ。本当だ私も出来てる!？」

送って、てどういう事? えええい、とつと落ちてって!」

「ほおーう」

「……イヤ、ナンデモナイヨ、ひびき」

ギギギと、錆び付いたかのような動きで今更響の目の前で念話していた事に気付い

た。

分かってる分かってるよ、思春期特有の症状って奴でさあねえ。エル・プサイ・コングルウ、などと言っている響の誤解は結局解けなかった。

あの海星ええええええええ!!

と、自室で枕を濡らす未来がいたと言う。

イイイイイイイイイイ——ツ!

頭を貫く槍が震える。

まるで鈴が鳴るかのように震え、ただ鳴っているだけではなく、俺の体のある方へ向
けようとジリジリ圧してくる。

隣でノイズを吸っていたセレナがその音にびっくりしたのか、咽せていた。

だから口の限界まで一気に頬張るな、いつも言ってるだろうに。

セレナの背を摩っていると、彼女は顔を跳ね上げ、整列しているノイズを凝視した。
翡翠の輝きに包まれる。

喚ばれたのだ。

「やった! 今回呼ばれてないね」

どうやら、槍が刺さった事でどうとう規格から外れてしまったらしい。

だがそれでは、無辜の民がノイズの犠牲となってしまう。

セレナの肩に両手を置いて、首を振る。

俺は行かねばならない。

「分かったけど、その状態で首を振ると刃が危つぶなっ!」

……おお、これはすまん。

「しよぅがないなあ……でもどうやって行くの?」

任せろ、こんな時こそマスター。

ミク衛門えもんの出番である。

ところで、この国では困った時の何でも屋風の相手に衛門の称をつけるのは何故だろ

うか。

推測だが、かつて貴賤の区別なく、あらゆる問題を解決して回った、そんな英雄がい

るのだろう。

……衛門。

俺も見習いたいものだな。

どうしたセレナ。また俺が見当違いな事を考えていると思っっているな? その顔は

そう言っているぞ。

なに? 気にするな早くしろと? 最近セレナの態度につれないものが増えて来て

少し寂しい。ああ、かなり遅いが思春期だもんな……と、分かった分かった早くするか
ら対ノイズ装甲を展開しようとするので無い。今連絡するから――

――あ、もしもし？ ミクか。

門を開けてくれ。

え？ なんだこれは近くにいるのかって？

ただの念話だ。基本だろうに。実際今ミクも出来ているだろう？

うむ。あまりの喜びに頭を抱えているようだが、すまん、ノイズが召喚された。

後を追うために俺が通過する門を開けて欲しい。

特に開通先を指定せずとも、側でこれだけ空いていれば近くに連鎖解放されるはず

だ、申し訳ないが――

皆まで言う前に、俺の足元に門が開き、俺は垂直落下した。

流星我がマスター。返事をする暇も惜しいと。以心伝心バッチリだな。

ん？ そんなムキになって否定しても、本心は分かかってしまっている。微笑ましいも

のだ。

では、出撃するでしょう。

※なお、ハイトからセレナへの意思伝達方は依然、ジェスチャーのみである

実は未来経由で英語を学び始めたが、ジェスチャーの方が早いので実用は当分先の様

である。

唸るエグゾースト。

背後より、次々と前方へ流れゆく景色。

俺は背後に向かい、凄まじい速度で移動するものに出現したらしい。

ペタンと座り込んだ姿勢のまま、高速移動を堪能する。

しかし俺とて、青獅子ブルー・ウガルを駆り、度々風となった男だ。

騎乗の安全性から言えば、馬車やこの時代で言うなら自動車が一番であろう。

だが、違うのだ。

その身をもってして風を切る、早さを感じる爽快感はそこにはない。

その点でいえば、上下移動もないこれは、僅かに……僅かにウガルを上回るかもしれない。

だが、そんなものでありながら、背に風を感じない。

それどころかじんわりと背に熱が伝わってくる。

そんな風防など聞いたことがないが、ミクとセレナの通訳を果たしている礼装を見る

に、そんな技術の発展もあるのかもしれない。

あー…うん、分かっているさ。現実を見る、とね。

背に温もりを感じている場合などではなく、いい加減現状を掌握せねば、と。

俺は振り返り。

どういうタイミングか、ぴったり合わせて振り向いた人物と目を合わせることに
な
た。

ああ、俺の背にあり、風を遮ってくれていたのは人の同じ背で、背中合わせだとい
う
ことか。

すつぽり頭部を包む形になっていいる球形の兜を被っているが、目元は透明度の高い素
材で作られており、こちらから覗くことも…、あ。

翼だった。

うん。びつくり。真実の確率はフィクションより奇なり。

「え？」

キョトンとしている彼女。

いやいやいやいや、俺に注目しても何もないから。

それより、今現在の俺たち共通の目的を思い出して欲しい。

ミクの手でまあ、送還された俺が翼の騎乗している何かに着地したのは偶然だが。

この偶然は俺の目的と翼がこちらに向かつていた目的が同じだからだ。

そして、俺は当然現地直送であり、翼もまた目的地間近であるからだ。

さつきまで彼女も注視していたであろう。

俺達が一直線に向かつている巨大ノイズを思い出して欲しい。

俺は必死になって、翼の背後にいるノイズを指差し、教えているにも関わらず、翼と言えよ。

「性懲りもなく出たな星形……！ お前が奏にしたこと、忘れたとは言わせないぞ！」

いや、それより後ろ。後ろ！

「甘い、そうやって私を謀ろうとしても無だA——」

無論。事故った。

だが、負傷者は幸いなことに一人もいなかった。

俺は言うまでもなく、この程度の速度なら普通に降りる事が出来るし、衝撃で真上に吹っ飛んだ翼もいつの間にか対ノイズ装甲を身に纏い。

脛にぶつけられ、乗り物が爆発、炎上している巨大ノイズはそのまま縦一閃、左右に

分かたれ、爆発、炭化消失する。

対ノイズ装甲は歌を力の源にする。

何故か知らないが俺もその力を取り込む事ができる。

故に。

完全戦闘態勢の翼が近づくと、俺もパワーアップするのは当然なわけで…。

ん？

「お前が……！」

その翼が、歌にこもる程に怒りをしたためている。

「お前は私達と同じ、ノイズを倒す、その目的だけは同胞だと思っていたのに……！」

まあ、そうだな。

「領くなぁー！」

はぁ。

「お前が奏の絶唱を中断したのは感謝している……間違いなく、歌ったのなら、奏は命を落としただろうからな……だが、お前の……お前が！ お、おま、貴様の一撃で！」

あ、言い直した。

「奏は未だ意識不明の昏睡状態だ！」

………え？ そんなに重症？

あ、まさか。

頭突きだけではなく、奏の歌を中途半端に暴発させた、その余波か!?

……………あー、うー。

これ、出し難くなったな…。

だが、準備していたのに出さないのはいけないだろう。

俺は出撃にあたり、用意した粘土板をおずおずと差し出した。

ミクのゲートで出入りするのなら、出撃と違って物を出し入れできるのである。

翼は非常に警戒していたが、ジリジリ刃を差し向けつつ、受け取った。

「……………うん？　これは覚書か…？」

覚書が何だか知らないが、それは、ミクをマスターにして以来、積み重ねた努力の成果である。

「日本語…………？」

そう。ミクがセレナと会話するため英語の勉強をするように。

俺だってミクの国で活動するのに何かと便利なこの国の言語を勉強中なのだ。

今現在、漢字は殆ど出来ないが、ひらがなとカタカナはほぼマスターしている。

わが努力と誠意を見てほしい。

どれどれ、と翼は、粘土板を一瞥し。

「……『ぐぬンナちい』……」

シンプルに書き記された謝罪を読み上げ……ん？

ンン、気を取り直そう。それはだな、俺が現在可能な日本語で精いっぱい書いた、頭突きかました奏への謝ぎ……え？

俺書いたのと違うのか？ 読み間違えてないか？ 翼よ。

「星形、曲線が多いひらがなを、楽だからとカタカナにするな。最初はやろうとしたけど『め』で力尽きたな……『ぬ』になってるが。曲線増えてるぞ？ あと、間違えやすいものは悉く間違えている。『さ』とか、鏡文字になって『ち』になってるし」

……ほぼだし、間違いやすいモノ以外は大丈夫だし。

「気持ちには分かった……もう少し、勉強してくれないと奏には渡せないな」

……すまん。

「それはそれとして、落とし前はつけてもらおうぞー！」

と、ぐだぐだになりかけた雰囲気言いながら実はこの合間もわらわら群がってきているノイズを薙ぎ払っている翼は俺に刀を突き付けた。

道理には適わない、と翼も分かっているのだろう。

だが、必要なのは心のしこりとの折り合いなのだろう。

ならば、それに付き合うのは戦士として先に立った者の務めであろう。

まあ、そんな風に意気込んで見たところで、つまるところはいつものノリだ。いつもは奏がメインなんだがな。

彼女が戻って来るまでは翼に実践訓練を積ませてやるのも、良いかもしれない。でも正直、いつも絡んでくるのは奏だから、キヤラ掴んでないんだよなあ。

しかし、予想外に翼は普通に刀を構え、斬りつけてきた。

歌を歌い、刃に力を込める。

それに従い、攻撃性の歌の力が俺にも収束する。

俺の頭蓋が、震える。

翼が弾かれたかのように跳ねた。

俺の頭部を貫通する槍の刃部分が突如伸び、それを咄嗟に回避したのだ。

意図していないのだが……なんだこれ。

俺の槍を警戒し、距離をとる翼。

開く距離に反比例し、槍は縮んでいく。

おや？ これってもしかして……。

いや、まさかなー。

翼に近づいていく。

伸びる槍。

今度は後ずさる俺。

それに伴い、縮む槍。

間違いない。どうやら粘土板を渡したときのように対ノイズ装甲を展開する程度の歌だと変化はないが、武装を行使するレベルの出力で歌唱した場合は、その力を受け、距離が近いほど質量が増大するようだ。

うわーい。ナニコレ面白い。

待てよ、縮むのは力が足りないからとして、近づいて伸びている時、力が十分な状態なら伸縮を制御できるのではないだろうか。

と、言う訳で翼、実験するから歌ったままこつちこつち。

「戯れるなあー！」

いやあ、面白いもので。

怒って巨大な剣を射出してきた翼の一撃をギリギリでよけ、その側面を滑らすように槍を掠らせる。

「なっ!?!」

目的はその攻撃に含まれる歌の力。

狙い通り、力を吸い尽くされた剣は消失、驚愕する翼には悪いが、即座に延びようとする槍を抑えつける。

まだだ、まだだ。

翼を傷つけないような立ち位置に移り、開放する。伸びろ。

一瞬に力を収束したためか。

その長さは、実に1.3kmに及んだ。これは予想外に凄い。

兎も角、これだけあれば、有り余る。

首を振り、そして薙ぎ払う!!

塵取りで払われる埃のように、一気呵成に炭化していくノイズの軍勢。

首の膂力を頼りに頭を振るう俺はさぞ間抜けに見えただろうがな。

だが、俺は。

ようやく、ノイズを自ら討滅した実感を得たことに充足していた。

素晴らしい。

やっとな、やっとな俺は、まっとうに戦う力を得たと。

「だから……一体、どっちなんだ……」

炭が散る中、呆然としている翼は、泣きそうな、笑い出しそうな、歪な表情を浮かべていた。

何がどっちなのか、俺にはわからないが、俺の行動が翼にとっては何か法則外であり、

混乱を与えているのは分かった。

だから、翼を狙い、体を引き延ばして特攻する陸戦型ノイズに気付いていない事に気付けるのも、また俺だけだった。

額より生えた奏の槍。

今の薙ぎ払いで歌の力は吐き出した。

だが、刃がなければこの身がある。フレンドリーファイア対策が発動して倒せなかったとしても、拳で十分だ。

一歩踏み出す。

後足を引き寄せつつ、その身を一拳に滑り込ませる。

「馬鹿な！ 縮地だど!」

縮地とはなんだかは分からない。

だが、これは女神イシユタルが地上で魅せた、打撃技の歩法。翼に迫るノイズを撃破するため、拳を固める。

すると、なんたる事や。

赤、青、緑。

三食の輝きが拳を包む。

スキル発動——文明浸食——

……え、なにそれ初耳。

脳裏に響いたログに怪訝となる。

しかも初めて聞いた内容だ。

唾然としながらも、反復動作により刷り込まれた動きは、細長く伸びるノイズをはたき落とした。

二度、三度。バウンドしたごく一般的な歩兵タイプのノイズは——

激しく暴れ始めたのである。

起き上がれず、仰向けになったまま、手足をジタバタと振り回している。

うわ、ちよつと気持ち悪い。

のたうつノイズはついにビクンビクンと痙攣まで始めた。

え、俺の拳っていうかスキルってなんなの？

ブルブル震えが止まらないノイズはやがて輪郭がぼやけるほど振動し……。

奇怪な形状へと変貌した。

五方へ腕を伸ばし、中央の盤に水晶のような物が埋め込まれ。

全体的なシルエットはまさに星飾りのよう。

つまり……海星である

ああ……そうだよ、皆まで言うな、俺だよこれ。

そんな、姿に変形していたのだ。

だが、胴体のベースは赤色である。

ええ……。

思わず、翼に向け、助けを求むように注視してしまった。

「え？ 私？ なんで私!? 私を見ても分からないからな！ だいたいやったの星型でしよう!?! そもそも同じ形になってるし!?!」

そうなんだよなあ……。

慌てると口調が普通に戻るらしい翼から向き直り、仕方なしに俺と同じ形になったノイズと向き合うことにする。

同様に、こちらに正対した赤い海星は――

「えい」

……え、なんか言ってる。

こつちもとりあえず、手を挙げてコンタクトをとることにした。

「ジェアツ！」

とか多分発声しているが仕方がない。

「エー」

「ジュワツ！」

「A」

「ジュオオアアツ！」

……埒が明かん。

すごいな皆。こんな感じの俺とコミュニケーションとってたのか…。

我が身を持つて味わう自身の理不尽である。

どうしたものかと、しばしお互いジェスチャーで意思疎通を頑張ってみたのだが、敵ではない事が辛うじて分かったただけであった。

うん……ああ……本当セレナ凄いな。

あと、奏。

その終わりは呆気ないものだった。

活動限界に達したのか、炭化し、端からサラサラと崩れていく。

あっさり風に溶け、消えた。

星型ノイズが居たいた辺りを示しつつ、翼に振り向くと、泣きそうな顔で拒絶された。

そうか……そんなに嫌か……。

その時である。

ん？

ズ……ズズ……。

何かが、擦れる音がする。

あ、ああ……なるほど、さっきのか、やりすぎたな。

考え込んでいると、先の狼狽はなんのその。翼はキリツとした顔で、こちらに刀を突きつけた。

「さあ、邪魔なノイズはこれで一体も居ない。相手してもらおうか」

そうしたいのは山々なのだが。

一つ気になることがあるので、今回はここまでとしよう。

先程返された粘土板の裏に文字を掘り、見せる。

「は!? ……ここまでできて逃げる気か!」

うむ。そう言うことになる。

それと言うのも。

ズザザザザザツ——!!

あ、始まった。

先ほど薙ぎ払った俺の1.3Km長の槍は、周囲の高層建造物までに及び、アツサリ叩っ斬っていたのである。

失敗失敗。やりすぎた。

高揚感に乗せられると俺は本当にすぐ、ポカをするなあ。

でもまあ、今役に立っているので——良しっ。

と、言うわけでもたミク、頼む。

未だミクは機嫌を直してはいなかったが、要望には応えてくれた。

つまり、エメラルドの波紋が足元に広がり、そのまま開門したのである。

ボツシユート。

「あ、ちよ、待ッ」

重力落下は一切待たない。

同時に、崩れてくる周囲の建造物。

切断面は、俺の立ち位置より高い場所である。

つまり、俺と翼のいる地域から斜め上に両断していたわけで。

一勢にこちらに向けて崩れ落ちてくるのである。

「き、貴様ああああああ——ッ!!」

なにやら悪役チックなセリフを吐きながら巨大すぎる瓦礫を対処せざるを得なくなる翼。

うーん。謝罪の粘土板、翼の分も作っておくべきか。

俺は、それを尻目に、セレナの待つノイズプラントに帰還した。

——いや、それ火に油注ぐだけだから

ミクのツツコミが虚しく響くのであった。



「あ、ハイトお帰り……あれ？　そう言えば、コアだけで帰ってくる事はなくなっただっけ？　………まさか!!」

いつものように、帰ってきた反応を感じ、セレナは迎えに行こうとして気が付いた。ハイトは時間経過で炭化、コアが回収される形で帰ってくる事はなくなっただと。では、この気配は？

通常のノイズのコアが回収される時とは違う反応、ハイトと同じ反応であるという事

は——

コアの回収を余儀なくされる程に筐体を破壊されたという——
慌てて反応の方へ走って行くセレナ。

衝き動かされる様に、息を切らせながら到着したセレナは、いつも通り、通常のノイズがコアの命令に従い、星型へ変貌して行くその様子を見守っていた。

どうしてこの形で帰って来たのか。

ハイトは自身を省みず無茶をするので、叱らなければ、と不安と憤りが相まった感情を持って余しながら変形完了を——

「うそ……」

それは、紛う事なき、ハイトであった。

だが、頭部に刺さっていた槍の刃は無い。

やはりボディごと破壊されたのか。いや。

それよりも

「そんな……ハイト、真っ赤になってる!?!」

レモンイエローの爽やかな色合いだったハイトが、血をぶち撒けた様な紅に染まっていた。

「ねえ、何があったの? もしかして茹でられたの? あれ、それエビだっけ? カニだっけ?」

どっちもだ。

「ねえ、なんか言つてよ、ハイト！」

違和感だらけだ。

色だけじゃない。

雰囲気、仕草、身なり、後色。

全然一致しないのだ。

そのジェスチャーが何を示したいのかも分からない。

突如出現した『理解不能』に、セレナの元々僅かな許容値が限界寸前まで飽和しかけた、その時。

「A」

「え？」

「えい」

確かに、なんか言いおつた。

「そんなハイト、声まで変わってッ!？」

だが、初めて聞くその声にまさか、とセレナは危惧を抱いた。

ハイトは出撃の度、何度も肉体を失い、コアだけで体を乗り換えて来た。

槍の使い手の絶唱を受けて、変質したとか、負担が残っていた、とかそういう事だけ

ではなく、肉体を交換して行く事は、彼という個我自体にも深刻なダメージを与え続けているのではないか。

嫌だ。

「嫌だよ、いつもみたいに特撮スーツ着た人みたいに叫んでよ……ねえ!」

「えええい」

「う、うわああああ……ハイト、ハイトおおおおおおおおお」

こみ上げる絶望感。セレナは慟哭を――

「ぐうえっ」

断ち切られた。

真上に開いたエメラルドカラーの門から降ってきたハイトに押し潰されて。

「ジエイアツ!」

「ふへえ?」

ただいま、と、謝罪を兼ねて、セレナから降りたハイトは手を挙げていた。

「へ、え、なに? ハイト? じゃあ、これ、え? なんで? どうして? わたしの見

間違い、でも、やっぱり赤いの、いる、よね、え?」

「a」

「へアツ!!」

居る。

それどころか、ハイトと挨拶をかわしてさえいる。

幻覚、なんかではない。

そう、認めねばなるまい。

「ふ、増えてる——！！」

セレナは今日何度目かの絶叫をあげるのであった。

この数日後。

再び未来の開いた門で出撃したハイトがノイズをしばき倒しまくったせいでも大量増殖した星形ノイズが溢れかえり、セレナと未来が阿鼻叫喚のありさまを描くのは、当然の成り行きといえるのであった。



これは、ミクをマスターにして、しばらくした後の話である。

「ン〜フフ〜」

中々上機嫌なセレナの鼻歌を聞きながら、俺は実験を開始した。

「フン〜フフフン〜」

セレナの歌は上質だ。

その歌を聴けば、手足の欠損程度なら一呼吸で再生する。

そう。

どうやってここへ戻って来たかは後で述べるとして。

俺は、制限時間無し、活動時間半永久化したノイズとなった。

これで時間を気にせず戦える、と思っていたが、これが存外、そこまで良いものではない事はすぐさま発覚したのだ。

制限時間があるのは思った以上のノイズボディの脆さからもあることが分かったのである。

弾力を気に入っているセレナ曰く、歯応えの強いグミのようなボディは実際歯応えの

強いグミ程度の恒常性しか維持できなかったのだ。

無論、気を張れば鋼を砕き地を割る我が身であれども、常に気を張り続けるような神経は流石に持ち合わせていないのだ。

戦闘どころか普通に生きて活動するだけで末端が擦れて削れて行く。

その劣化をもものともせず、コアモジュールを使い捨ての筐体に次々と移して行く事で最善のポテンシャルを維持していたのである。

その事に気付かない程頻繁に出撃し、ノイズを張り倒し、ボディを最善に更新し続けていたのだ、と思うとこれが現代人の言う社畜という奴か、と遠い目になってしまう。かの王のように過労死しかねない。

では、リメイクされなくなってしまった俺はどうしているのか、と言うと、正にいま行われている『歌』を聴き込むことだった。

我が身は歌を糧とする。

動力源やブースターとしてだけではなく、我が身の修繕にも用いることが出来るとは……歌の汎用性、まさしく推して知るべし。

尤も。この事に気付いたのはセレナなのであるが。

彼女が鼻歌を一曲歌い終わり、俺を見てみれば、たしかにあつた筈の引つかき傷が消えて居たらしい。

それ以来、セレナは俺に何でもいいから歌を聴かせる事が習慣になったようだ。

俺としても、体を万全に保つ事ができるし、いい事尽くめなものである。

さて、ここで本題に戻るとしよう。

果たして。

実験とは何かと言うと。

同じく、セレナが歌を聞かせている時に、俺の頭部を貫通する奏の槍、その刃の一部が気になるようだった。

確かに、セレナは眠る時、俺をベットの側に座らせ、眠りにつくまで手と同じ形で俺の頭を握って寝る癖があったのだが、頭から触れたら危ない刃物が突き出ているのだ。昼日中なら兎も角、就寝間など危なくて触らせるわけにはいかない。

実際、出会った時の未来は思いつき深く切っていたのだ。

セレナ。何度頼まれようとも、そんな危ない真似はさせられない。手を握らなければ眠れないと言うならば、頭ではなく、手を貸そう。いくらでも付き合ってやるから。

「いや、そうじゃなくてね？　まあ、手は握って欲しいんだけど……それは別で。その頭に刺さってるのってなーんか、波長に覚えがあるの。なんだっけ、なんだっけ……姉さん？」

いや、お前の姉、マリオはどこからも槍は出て居なかつたぞ？

「いや、ピアスじゃないんだから貫通したら普通人は死んじゃうから」

本当、俺が思っている事よく分かるな。流石に「槍」だとは分からないらしいが、最早読心術と呼んで差し支えないのではないだろうか。

セレナは俺とのやりとりに一区切り付いたのか、発声練習を始めた。

普段歌うときはそんなことしないのだが、それだけ本格的な歌唱、と言うことだろうかと聴き込んでいると。

「アゝ（徐々に高音へ、ある一点で上昇が止み、行ったり来たりを繰り返していた、その時）」

ぶるり、と。

俺の頭を貫くものが、震えたのである。

「Jackpot!! よし、この波長だね！ やっぱ姉さんのと同じかー。日本にもあつたんだ……でもなんだっけ名前」

セレナは、奏の槍に心当たりがあるらしい。

確かに、それ以外に方法がないとはいえ、奏にずいぶん副作用の強い薬物を投与するような組織だ。セレナのいた研究所と何かしらの繋がりがあるのは自然な事なのかもしれない。

「ゲイ・ボルク？ ブリューナク？ ミストルティン？ ドウリンダナ？ ロンギヌス

? ロンゴミアント? トリアイナ? なーんだっけなー?」

だが、肝心な名前が出ないようである。

伝えていないのに槍と看破したのは恐るべし。まあ——だが、大丈夫だろう。別に真名解放が必要なわけで無し。

「聖詠には大元の聖遺物の名前が必要んだけど、薬物ガン盛りの無理やりとはいえ一回起動したの見たことあるからなくても出来るよね……うん。これだ——」『起きろ、槍』

瞬間、質量が爆発した。

な、な、なな、なんだと、おおおおおおお!?

俺の額から奏の槍が飛び出てきている。

なんか色が所々黒々しいが、その形状は奏の槍であった。

ちなみに、前に奏が名前を読んで居たので俺は名前を知っている。確かガングートで合っているはずだ。

幸い、槍の刃は俺の額から出たところで生成されているので、内側から俺の頭がパァンツ! にならなかつたのは幸運だが、長い柄が後頭部からずいぶん伸びている。首を振ったら危なっかしい事この上ない。

「ははは」

その様子を見て、セレナが嘖き出した。

「わははははは！ シンフォギアになるかなって、期待して起動させてみたのに、アームドギアだけ、ぷぷつ、し、しかもなんか食い込んでる！ もう無理！ あはははははははははは！」

腹を押さえて——あ、我慢しきれなくなつて寝転がつて足をバタバタさせながら爆笑している。

「いや、シンフォギアになつても、ノイズが装備したらどんなになるんだろうって期待したんだけどね？ いやー、これはないわあひやひやひやひやひやひやひや！」

淑女にあり得ざる大つびらげな笑い声に流石に俺も慄然とする。

「ははは、ごめん、ごめん、起動に使つたフォニックゲインを消費しきれば元に戻るからね」

待て、俺はフォニックゲインとやらがなんの事か分からんが、それが歌の力だとすれば、そう簡単には戻らんぞ。

俺は元々歌の力を蓄積し、奏や翼と違つて消費さえしなければ保持できるのだから、時間経過では相当な時間がかかることが想像できる上に。

気付いて居ないのか、セレナ。

お前がした事は、音響反射だけで、鍵の形を探り当て、あまつえさえ奏が戦闘時放つ

ている歌の力を十倍以上の出力で発して、その扉をゴリ開けたのだという事を。

ついでに言う、今俺にチャージされている力はそれだけの量である。そう簡単に抜けるものではないと言う事だ。

凄いなものだ。

生前ならば、巫女長か、若しくは祭祀長の候補として推薦されて居てもおかしくはない。

俺は生前、当時の巫女長と元祭祀長。共に身内だったからな。間違いなく推薦する。

歌の力は儀式の力。間違いなくどちらからも引く手数多だろう。

ならば。

セレナにばかりお披露目させるのもアレだろう。

見るがいい、我が座右の銘『技に著作権はない』が名ばかりでは無いことを。

奏直伝！ 『LAST∞METEOR（笑）』！！

我が額より生じている槍が、回転を始める。

見るがいい、我が額から生み出される無数の乱気流を！

「え？ 何やる気になつてるの？ ねえ、ちよつと半端じゃなく轟々言つてるんだけど

？」

そう、今度驚かせるのはこちらの番だ！

そうして俺は、無数の竜巻の出力により、凄まじい速度で後方へ吹き飛んでいった。

奏の戦闘時の十倍近い歌の力である。踏ん張り切れるわけもない。

「あーはっはっはっは、あーっはっはっはっは、あははははははははは、あぎや……
攣った、お腹攣った！ 痛だだだだだ、で、でも笑いも止まらないから、づでででだ
だ、あはっば痛ったあッ!？」

一瞬で流れていったそれを見たセレナの腹筋は壊滅的に大崩壊。

力は一発で消費したのであっさり戻ったものの……。

仰向けで天を仰ぐ俺には、サイケデリックな謎空間の空が映し出されて居た。

……兎に角、切ない、ものだった。

05 憂慮

「ねえ、響……」

「あれ？ 未来、どうしたの、今日はなんだか暗いけど」

「ごめんね、響のほうが大変なのに」

「いや、もう大変って事はないんだよねえ。元氣爆発へいきへつちやらばんばんざい！ って感じでしてね。えへへ……いつも言ってる通り、ご飯が少ないってこと以外は」

「ああ、うん。それ以外は？」

「未来が凄いきらつと流した!？」

最近新しくできた人脈のせいで、スルースキルが着々熟練度育成されている未来である。響自身言っているが、言われすぎて飽きてきたのである。

それは、未来の幼馴染である響がリハビリに勤しんでいる時であった。

響はもうじき退院ということもあり、リハビリの運動はどちらかというとハードな筋トレになりつつある。

心臓近くの切開手術であったため、がつつり体力を失ったのだが、一言若さ、という

レベルをはるかに超越したレベルで復調しているのだ。

後は経過観察を経て、良好とさえみなされれば、いつでも退院出来る程である。

そのため、初めは響の痛々しさを目撃して悲壮感と自罰意識を隠し切れなかった未来であったが、近頃は響の食欲に慄き、さっぱりそのような事は無くなったのであった。

そんな未来だが、今日は珍しく浮かべる表情が重かったりする。

そんなこんなで、響が持ち前の明るさでぐいぐい攻めていくと、ついに観念したのか、ポツポツと話し始める。

響は珍しく、黙って促すだけである。

「実はね？ 前、外国の人とメル友になったって言ったよね」

「うん。英語の勉強すつごく頑張ってたよね！ ……私、せめてテスト終わるまで入院しようかなあ」

「それ、復学直後に追試受けるタイプだから観念したほうがいいよ」

「未来の平坦な口調が怖い！」

「そう、英語頑張ったんだよ私」

「今のスルーするの!? もしもーし、もしもーし！ もしかしてそれ、メル友さんからの影響なんですかー!?!」

「あー。大きいねそれ。何故かって？ 私が頑張つて英語覚える前に、二人……いや、一人と一匹？ いや、一体？ 分からないけど、どっちも日本語完全にマスターしちゃったんだよ——」

「え？」

日本語は世界で最も複雑怪奇、習得が困難とされる言語の一つとされる。

未来が英語の日常会話を習得しきる前に、セレナが日本語をネイティブで話し始めたのである。

ハイトの方も、奏への謝罪文での失態がまるで嘘かのように、翌週翼に完璧な文章を提出したのである。

拝啓で始まり、敬具で終わる形式文である。

近頃開花した、花の美しさから時候の挨拶に始まり、丁寧な謝罪へ繋ぐと、最後に季節の変わり目であるために、体を案じつつ締められていた。

日本のしきたりやらなにやらの英才教育を受けていた翼をして唸らせかけ、何やら引つかかる文面である。

どこことなくビジネス定型文じみてるなこれ……。

などと言う感想も併せて抱いたのだが。

ただ一つ、粘土板で渡してくるのは全くブレなかった。

そこまでするなら筆でしたためてこい、と口にしなかつた翼は我ながら自重したものだ、と自画自賛である。

一方、残念ながら、奏はまだ意識を取り戻していないため、その文章への反応はないのだが。

脱線したが、未来は決して勉強が出来ない訳ではない。

どちらかと言えば優秀である。

だがしかし、相手は学歴皆無とはいえ、日がな一日暇なセレナ^{ニート}である上に、脳そのもののスペックも高い方なのだ。

ハイトの目論見同様、彼女は、会話に飢えていた。

習熟することさえ出来ればよいのだから、そりやあもう、頑張った。

加えて、セレナには娯楽が乏しかった。

彼女らの居住環境でありふれているのはノイズである。

付け足すならば、ハイトしか読めない取説付きの聖遺物の山である。

まだ未来がハイトのマスターになる前、マネキンのような聖遺物にフォニックゲインを注ぎ込み、起動させたのだが、普段使っているものとは別の調理機器であつたらしく、危うくセレナが滅多斬りのなめろうになるところであつた。

慌てて駆けつけたハイトと調理マネキンがそれだけでアクション映画一本取れそう

な激闘の末、セレナのシンフォギアの特徴を重ね、白金色のオーラをまとったハイトが崩拳を奇跡的なタイミングで炸裂、機能を停止させた（壊れてない）一大事があったのだ。

勝手の分からない物を弄ってはいけません、的な内容で、正座させられたセレナは、何を言っているのか大体分かるが、口にしてはいる言語がその実全く分からない説教という苦行を延々と行われ、グロッキーになった経験でだいぶ懲りたものである。

未来がいるのだから通訳してもらえばなんとかなるのだが、未来はサイケデリックなこの空間に踏み込むことを頑なに拒んだのだ。

星型ならば兎も角、通常のノイズに対して、一般人寄りの未来が忌避感を抱くのは当然と言えるのだが。

何より、あの空間に入ったら最後、ノイズ食べさせられそうで……と未来は語っている。

そんな感じで、非常に娯楽に飢えていたセレナは、未来に頼んで東京スカイタワーの近くに門を極小で開けてもらい、居住空間にテレビを設置したのだった。

結果、テレビで日本語を覚えつつノイズをボリボリ摘みながらテレビの前で寝っ転がる無精者が爆誕した。

テレビという娯楽を味わい尽くすために、とんでもない速度で日本語をマスターしたのは言うまでもない。

それを見たハイトは随分と深刻な面持ちで、未来に相談というか忠告をせざるを得なかった。セレナにゲームやネットはまだまだ早いと念押ししたのである。

まあ、テレビという情報媒体があるので、興味を持つのは時間の問題だったりするのだが。

そして何より、ハイトが筆談ではあるが英語と日本語をマスターしたのが大きい。

理解できる会話は、セレナの元々優秀な知性に、学習意欲をますます加えることとなった。

結果。

それは何の前触れも無く起こった。

ある日、自室に戻った未来は、デスクの引き出しから生首が生えているのを目撃した。

危うく絶叫するところだったのを口の奥に飲み込み抑え込むと、そのホラー的物体は「Heeioo」なんて言っている生首セレナだった。

流石に何か一言言ってやろうとのしのし前進する未来だったのだが。

実はその引き出し、内側がセレナとハイトの居住空間に常時接続されているのであ

る。

未来みらいの世界のネコ型ロボットが未来からやってきた経路を見てこれだ！ とハモっている（未来にはハイトの言葉がわかるのでハモっているのが分かった。さすが育ての親と子である）のを見てうわあ、と思わずツツコミかましたものである。

結局、頼み倒されて実行したのだが。

実際採用するとシニールな上に不気味だった。

スペース的にあり得ない所から人やら海星やらが湧いてくるのだ。冷静に見るとただただ不気味である。

そんな、ホラーな見た目のセレナがいきなりネイティブな日本語をくっちゃべり始めたものだから、未来は怒涛の情報過多に思考停止するしかなかったのである。

当然、のしのし進んでいた歩みものしの、ぐらいで止まってしまったぐらいだった。

完璧にマスターするまでは、イントネーションのおかしいカタコトを通すという筋金つぶりで、サプライズしたかったらしい。十分驚きましたよ、そりゃあ。

「私の努力ってなんだったんだろうって……」

遠い目をする未来。

響はビシイッ！ と指をさして。

「あー。それはきつと私に英語を教えてくださいるために巡ってきたものなんだよ」
「うん。分かったよ響」

未来はにっこりと微笑んで。

「じゃあ、明日から勉強セット持ってくるね？」

「へ？」

「ノルマクリアしないとおやつ無しだから？」

「そ、そんな未来さん……わ、私に絶食しろと、そうおっしゃられるのですか！」

「……初めから諦めるとかないなー。うん。冗談のつもりだったけど、やめた」

「ちよ、ちよちよ、未来さん……？」

「促成コースで頑張ろうか。追試とか鼻で笑い飛ばせるレベルまで引き上げてあげる」

ハイライトの消えた瞳で、顔だけは満面の笑みだった。

翌日から、退院まで、響は勉強漬けの地獄の中で悲鳴を上げ続けたという。

学校では、もうまともに勉強できないかもしれないから。

病院から帰る電車の中。

未来が睨みつける中吊り広告には、ツヴァイウィングのライブで起きた特異災害の特集が組まれていた。

そこで、何が行われていたか。

どれだけの被害が出たのか。

生存者が何をして生き残ったのかと。



「ただいま」

ミクの御母堂が行う夕餉の支度を手伝い終わった俺はミクの部屋で新たにできた趣味である読書を勤しんでいた。

丁度一息付いた、そのタイミングで我らがマスター、ミクは帰ってきたのである。

ああ、おかえりミク。A、B、Dもな。

加えて護衛に追隨していた三体を労い、挨拶を交わしている間に、ミクは、俺を横目に見つつ鞆を放り出してベッドに倒れこんだ。

制服着たまま寝ると皺が出来て、明日の準備に余計な手間が加わるぞ。

「うゝるゝさゝいゝ。ちゃんと自分でやるからゝ」

言質はとつたぞ。

「分かつてるからゝ」

なんてタレている我がマスターから一步遅れて、床やら壁から三体のヒトデが湧き出てくる。

それぞれ、赤、橙、青色のヒトデは、それぞれA、B、D、とミクに名付けられている。

何故そんな、アルファベット単字というシンプルすぎる名が付けられているかと言うと。

「えい」

「ビー」

「泥^{ディ}」

発音からそのまま取っているのだ。

この三体は女性格を有しているため、ミクの護衛として常に侍っているらしい。

……俺、やってなかったな、そういうの。

何せ女性格であるから、男性格である俺なんかを立ち入れ難いところでも安心してついでに行けるんだそうだ。

……思春期だねえ。

セレナも見習って欲しいものだ。

見習われたらそれはそれで寂しいかもしれないが、な。

そもそも、俺は日常生活では致命的に護衛に向いていない。

ヒトデ型の中で俺だけが唯一、透過能力を使えないのである。

これが、日常においてミクの側に居なかつた理由だが、考えて見て欲しい。

学生生活を謳歌する十代前半の少女。

ただしノイズ同伴。

恋をし、気になる相手の言動に一喜一憂する少女。

ただし、ノイズがいる。

各所省にコールなりつばなし請け合いの台無しに間違いない。

その点、他の奴らは壁でも床でも透過して潜り込み、常に側で護衛が可能なのだ。

適材適所、これが一番だ。

「ところでさつきから何読んでるの？」

お、やつと興味を持った様だ。

いやなに、せつかくこの国の言葉を学んだのだ。

この国の製紙技術は素晴らしい。

かつて我が故郷では、大神獣が森林資源を守っており、先王とその友による大激闘の末やつと確保できた贅沢品なのだ。王宮ですら、記述には最新の技術をもつて練り上げられた粘土板を使い続けていたというのに、知識をそのような贅沢品に記して残すとは贅の極み。堪能しない訳にはいかないと意気込むのも至極当然と言えよう。

そして、俺が主に読むのは生きるために必要な知恵を得るための手段としてだ。

これは、民草でも実践可能な医術知識をしたためた――

「長い長い長い、簡単でいいから」

折角この国の讚えるべき事柄と知識の貴重さをこの国出身であるミクに事細かに説明しようとしたのに。

どうもミクは、俺の言葉が通じるのではなく、正しくは言語化した思考を受信しているらしい。

「いや、だから、何を読んでいるの？」

ふむ。そうか……。

つれないな、ミク。

ならば、率直にタイトルで示そう。『過信してはならない民間療法』だ。

ここを見てみるがいい。ネギという植物の薬効が事細かに記されている。この国の研究は素晴らしいな。

「……一番肝心な所に読解が及んでない!？」

むむ。失礼な。ちゃんと読み込んでいるぞ。

例えば、この蜂蜜と生姜の効能についてだがな。

「いや、だからそこじゃ無くて」

……………ふむ。

人が、進歩を止めるのは、自分を動かしていたそれまでの考えに拘り、人の意見を聞かなくなることだと言う。

俗語でいう老害、と揶揄されるものだ。

ならば、幾つになっても不知を認め、学ぶ姿勢をなくしてはならない。

新しいものを取り込み続けなければ、何事も澱むのである。

ミクの方が年若いからと言って知識面で俺を勝らぬなどあるわけもない。

謹んで教えを受けるとしよう。

この、『人類古今東西拷問史』についてだが……。

「このタイミングで違う本出すの!？」

何故か難しそうな表情で差し出した本を睨むミク。

「また凄い内容の本だよね……」

俺としては、鉄の処女とヤギの刑が気になるな。
アイアン・メイデン

そもそも、鉄の処女とか、拷問じゃなくて処刑じゃないかと思うんだが？

「疑問持つのそこなんだ……っていうか、ヤギってなに？」

足に塩を塗ってヤギに差し出すと延々舐められ、凄まじくくすぐったいそう。

「想像以上にしようも無いなあ……でも、そのくすぐったさは確かに拷問かも」

その様子を想像したのか、苦笑を浮かべるミク。それは大変微笑ましい。

だな——

これは実際、大変恐ろしいぞ。ヤギの舌は猫と同じでザラザラしているのだから。

このヤギという奴は、一旦舐め始めたが最後、延々と足を舐めるからな……。

「くすぐったくておかしくなっちゃうとか？ 確かにそれは怖いなあ」

それもあるが、足の肉がだんだん削ぎ落とされる。しまいには骨まで見えてきてな。

痒みがだんだん激痛に代わるのだ。股ずれの超凶悪版だな。

「やめてイメージが途端にグロテスクになったッ！」

見ざる聞かざる状態になったミクは頭を抱えてブンブン振り回している。

はっはっは、新しい知識を得るのは感情に刺激を与えられて、素晴らしいだろう？

とまあ。このように、価値観の違う者同士の知識の交換は本来、大変有意義なものなのだ。

「今の私はいつたい、どこに有意義を感じられたんだろう……」

そうか？ と、前置きはこの辺にしておいて、だ。

「今の一連が前置きだったんだ……」

そうだが。

俺なりに、俺とミクの主従状態を考察してみたんだが、聞いてくれるだろうか。

「いいよ、興味あるし。」

そういう重要そうな話は断り入れてくれるのに、さつきみたいなのドギツイ話題はなんで問答無用なんだろう。今度セレナに聞いてみるかなあ」

セレナとはほぼジェスチャー会話だから会話の癖なんかは分からないと思うぞ？

変に嫉妬に拗れるかもしれないからやめて欲しいが、同年代の会話を制限するのも憚れる。

うむ。難しいものだな。

「また、小難しい無意味なこと考えてるし、私にはどっちも聞こえるんだから、会話か考え事か独り言か区別がつかなくてちよつとキモいよね」

……聞こえてるぞミク……それで、だ。俺とミクの主従関係だが。

「ふむふむ」

古代文明の遺物とそれを扱う者、と言うならば、ノイズとそのマスターという関係だろう……普通、ならばだ。

俺たち以外にノイズとそのマスターという者がいるのかは分からんが。

「え、違うの？」

大きくは変わらない。未だあの製造プラントからノイズを召喚するものとノイズ達の関係ならば、間に挟まれている何かしらがあるとはいえ、まさにそれと言って相違ないだろう。ツヴァイウイングの二人が、対ノイズ装甲を展開し、戦うのもまた同じだ。

つまり、この場合は道具と担い手の関係だな。

あくまで判断は担い手が全て下す形だ。

その命令は絶対であり、道具はただその意志通りに働く。

だが、俺とミクは主従でありながら意識がある。自我があるだろう？ 命令に意見を挟むことが出来る。故に、偏に道具とは言えないのだが……。

実はな、ミクは俺達に前者である事を強いる事が出来る。

「え？」

疑問は尤もだろう。だがな。ミクは未だ意識していないが、やろうと思えば俺たちの意思を完全に殺して絶対遵守を執行することができる。

ミクのマスター権限はそれ程に強力だ。

このことは、教えておかなければと前々から思っていた。

ミクは知らなければならぬ、自分に出来る事を全てな。

「それ、逆に教えない方がハイトには良かったんじゃないかな？」

ミクはそれが俺のデメリットではないかと言いたいな。

だがな。ミクがそれを自覚しているか否かで大きく変わるんだ。

俺達はな。紛いなりにも自身の意思というものがある。

つまり、極論するなら判断基準は大きく『やりたい』か、『やりたくないか』で、その

基準にいたってはそれぞれ異なる、ということなんだ。

当然、俺や他の海星型ノイズ、ミクもそれぞれ違う。

何が言いたいのか。

そう、意志の差異が生じるんだよ。

当然、食い違つて反発することもたくさんあるだろう。

同じ事柄を目的としたとして、優先順位はそれぞれ異なる。

ミクと俺の意見が違つたでしょう。

俺もミクもそこまで幼稚ではない。互いの要求を擦り合わせ、落とし所を見つけたら
ろう。

——だが、それが譲れぬものならばどうだろうか。

意思を通してミクの発言が、俺の意思を完全に無視した『命令』となってしまうたら、俺は一切抗えない。

文字通り、言葉のみでねじ伏せられるのだ……そうなってしまえば——それまで通りの関係を継続するのは至難を極めるだろう。

人生、そういう訣別は何度かあるものだが……ミクとはその様な別れはしたくないのでな。

「ん？ 言いたい事は分かるけど、そんな風に意思がぶつかったりしないと思うけれど」
そうだなあ。

俺は言うべきか一瞬考え。

ミクの幼馴染が居ただろう？ 確か、立花伊吹、で合っていたか？

「響です」

忌引きだったか？

「響です！ ひび、きき！」

ミクが怒っている。

おかしい。間違つて居ないはずだが……。

軒、だよな？

「真面目にしてくれないと、私にも考えがあるんですよ」

いや、こつちとしても真面目なんだが。

「そうですか。そつちがその気なら……小日向未来がマスター権限を持ってハイトに命
ず……じが」

まあ、待て。俺にジガディラス・ウル・ザケルガは出せん！

何か不吉なことをミクが言いかけるので慌てて遮る。

具体的にひとでなし！ とか言われそうなことをされるような気がしたので。

「私だって魔本持つてませんよ!? と言うかハイトはナグル系の魔法しか本に出ない気がする」

身体強化系か、いいとこ突くな。

しかしだな。ミクよ、思い返して欲しい。

ミクの行いかけた不吉な何かを遮り、俺とミクの間を振り返る。

あの漫画見て思ったのだが、俺たちの関係は似ていないか？

「それは確かに……じゃなくて！」

彼女とミク、お前が等しく危険にあつた場合。俺達はミクの望みに逆らつてもミクを優先する。この意味が分かるか？

再びミクの言葉は遮られた。

ミク……いや、この場合はマスターと言った方がいいだろう。

俺達の第一根本命題、それはな。ミクをマスターとして戴くことだ。

それぞれ、俺たちは何らかの目的を持って活動することだろう。

俺にだって、そういうものはある。

だが、そのためには何より。ミク、君が、マスターであることが最低条件だ。

そのためには、マスターの望みが自分の生死よりも友の命を優先した場合、そもそもミクに従うための最低条件である『ミクがマスターである』が危ぶまれる。

恐らく、皆自主的に、彼女を見捨ててミクを守ろうとするだろう。

絶対にミクが安全な上で、余裕があれば、動く者もいるだろうがな。

……どう、思った。

「駄目……それは絶対、駄目」

それを聞いたミクは、顔を真っ青にしながらも、意志を強固に固めて告げた。

絶対に、友を助けると、自分を見捨ててでも、という魂の発露だった。

そうか。それがミクの望みなら、命じて、従えろ。

それだけが、その場合、彼女を守る術だ……俺が、初めに言いたい事が、分かったか？

こくり、とミクは頷いた。

しかし……その目は危いものを宿していた。

ミクは聞こえないと思っていたのか。

「折角……何のために……契約……」

なんて言っていたのだ。

やはり、本心ではノイズ等のマスターになんてなりたくなかったのだろうなあ。

だが——ノイズを従えるのは、ノイズに危険な目にあわされた幼馴染を守るために有効だと思っただろう。

例え、ノイズに襲われたことでその幼馴染がノイズにトラウマを持っていて、自身がノイズと関わっていると知られて恐れられる可能性があったとしても。

……自罰的だな。

危うい。っていうか、俺のマスターになるのは罰認定なほど嫌なのか……嫌、なんだろうなあ。

だがまあ、この残酷な想像はしてもらわなければならない前置きがあるが、対処法がないわけではない。

ミクよ。俺とミクは念話が見えるだろう？

「……使えるけど……」

なんで、そんな親の仇を見るような目で俺を見るのだ？

「おかげで、響に時々生暖かい目で見られるんですよ……!!」

「……は？ ミク、もしかして念話の時声が出るタイプか？ 念話の意味ないだろうに。」

「いきなり話しかけられたら声出るに決まってるでしょ!? で、何が言いたいのか？」
えーとだな。

念話を通じるいうことは、俺達は間違いなく経路パスが繋がっているということだ。

「パス？」

首を傾げるミク。うむ、専門用語だったか。

まあ、所謂見えない導線のようなものが俺とミクの間では繋がっていて、念話なんかはそれを通じて行われていると思えばいい。

「分かりやすいような、分かりにくいような」

言ってしまうえば糸電話だ。

「あ、それだとなんとなく分かる」

普通の糸電話と違うのは、伝えるのは声だけではない、ということだな。

「えと、例えば？」

まあ、焦るな。

先ほど言った関係性以外にお互い意志を持つが、優劣のある関係に使役者マスターと使い魔サーヴァントと

いうものがある。

ミクのイメージでいえば、魔術士と黒猫やカラスが近いかな？

「それはどつちかかっていうと、魔女じゃないかな……」

言つてて気付いたが、大量の海星を従える女性とえば、最早魔女と言つても過言ではないとおもうのだが、どうだろう。

「勝手に増えたのはそつちでしよーがああああああああ!!」

無節操に『文明浸食』で殴り倒しまくったからなあ。

いや、貶した訳ではないのだ。

どうどう、と荒ぶるミクを揺さぶつて宥め、本筋に戻る。

つまり、印象だけではなく、使い魔として俺たちを運用することも可能ではないか？
ということだ。

魔術士として使い魔にできることがミクと俺たちにも出来るはずだ。

幸い、使い魔の運用に関しては、妻に習っている。拙いが、元々難しいところは使い魔を従える事だ。それは既に解決しているからな、今日中にもマスターできるだろう。

「ねえ、ハイト。結局あなたは、私に何をさせてくれようとしているの?」

流石に気づくか。

「導入から結構無理があつたからね。意図は分からないけれど」

「そうだな、俺は話術が下手だからな。」

「だが、こう見えても俺は元十三児の父親だ。」

子供と呼んで差し支えないミクが、何か不安事を抱えていることくらい分かっている。きつとご両親も心配しているだろう。

「そんなに分かりやすいかな」

普通、子供といえど、思春期に突入した女性の心は察し難いのが俺なのだが……その俺が分かるのだ。ん？ さつきといってることが逆だつて？ 娘を持つ父親はいつもそれに苦しんでるんだ。分かれ。

ただ、相当気に揉んでいる事だということが分かるさ。そしてそれが、最初の優先順位の話題で分かった。

大切な幼馴染である、挿し花軒嬢の事だろう。

「いや、響だから。『すつ飛べ』」

ぐつふおおおおおへぶべばぐつふおおおおお！

躊躇なくノーラグで命令が下された。

グミ強度の肉体が部屋で数度、猛烈な勢いでバウンドした。

思ったより強烈だった。

「まあ、確かに響の事で不安事があることは確かだから……」

な、何事もなかったかのように話題が戻っただと……!!

恐るべし。マスターとして順応しすぎである。

なあに、この技術がマスターできれば、少しは心配事が減るだろう。

「つまり、ハイト達に何かさせるんだね？」

そうだ。なにか、心配事があるのなら、ミク自身が離れていても見守れるようにすればいい。

手筈は住んでいるな、A、B、D。

「英！」

「B i i！」

「D e i！」

さつき、ミクと帰ってきた三体を呼び出す。

何か、心配事があるなら、見守れるようにすればいい。

幸い、目ならば、このようにたくさんあるのだから。

「ハイトだけじゃなくて、皆も呼んだりして、どうするの？」

言っただろう。パスが伝えるものは声だけではない。

俺達を遣わせ、視覚の共有。それを試してみないか？

06 惨状／参上

特異災害対策起動部二課。

ノイズから人々を守るため、一般からは秘匿された様々な活動を行う組織、と言えは分かりやすい。

それは、ノイズを撃退するための出撃だけにとどまらず、シンフォギアシステムを初めとした対ノイズ技術の開発までこの一部署で行われている。

だが、人々の安全を守るのならば、決して疎かにしてはならないセクションがある。

各地に設置されたセンサーやモニターを介し、聖遺物やノイズの兆候をいち早く察知せしめるオペレーター達だ。

交代で24時間、常にデータと睨み合い、いざシンフォギア装者が戦うときは情報の収集・分析・処理を即座にこなし、その裏方として支えるのも勿論ではあるが、彼らの本来の戦場は平時こそにある。

「う〜ん〜なんだかな〜」

そう言つて天井を仰ぎ見るのは藤堯朔也。常識離れた人材が満ち溢れる特異災害

対策起動部二課、略して『とつきぶつ』において、情報処理能力が優れているところを抜かせば比較的常識人の一人である。

どうも、関係なしとは思えないデータの類似があるのだ。

しかし、断定できるほどの証拠でもなし。

そのため唸っていたわけだが、そんな彼の首元に、紙コップが押し当てられた。

「うわっ！ なに、なにさこれ！」

中身がわからなければ、火傷する程ではないがびっくりするほどには熱い。

「いや、そんなに慌てるほどの事でもないでしょ。どうしたの？ 藤堯ったら唸っちゃって。はい、あったかいのどうぞ」

「ああ、友里さん。あったかいのどうも。いやね、前々からノイズ出現のパターンに似た反応がよく出てたでしょ」

「ああ。ごく普通の住宅街の真ん中だったのであわや、つてなったけど、実際ノイズは一切出なかったアレでしょ？」

「そう。それ関連で類似なのが幾つか見つかってね、でもどうだろうって」

「どれどれ〜？」

ホットコーヒーの差し入れを出したのは同じくオペレーターポジションの友里あおいがモニターの数値を覗き込んで……。

「よく気付いたわね藤堯。確かに、似てるわね」

そう、全く違う地で感知された反応、それが類似したパターンを示していたのである。一つは先程話題に出た市街地に出たノイズ反応。

もう一つは。

「この間ラッキースターが翼ちゃん和二ケツした時の反応」

「……あれは危うく私も笑いかけたわ」

神妙に友里も頷いた。

ノイズ出現にいつもの如く出撃した翼が駆るバイクの後ろにまるでいきなり降ってきたかのように出現したラッキースターがちよこん、と後ろ向きに座ったのだ。

そのまましばらく二人（二人？ 二体？）でドライブしていたため、本来即座に報告するオペレーターすら固まったのである。

まあ、直後、気付いたお互いがワタワタしている間に巨大ノイズに接近。

司令による『翼ア！ 後ろ、後ろオ！』が始まったときは、すわ『8時だよ、笑ってはいけないとつきぶつ大集合』が始まったのか、と必死にこらえる司令室があったという。

「通常のノイズ出現反応に重なってるから一見気付きにくかったのね」

「まあ、もうノイズが出てるってのにノイズ反応が出ても今更ってのがあるしね。強弱

が変わって増援がくるか、ってなら兎も角さ」

「……って事はこの反応はラッキースター固有の反応って事？」

「そうなんだよ。ツヴァイウィングの事故以来、ラッキースターの出現タイミングが変化したでしょ。その時からこの反応が出るようになったんだ」

それは、ハイトが他のノイズとともに同時出撃しなくなったためである。

未来に依頼し、遠隔で開門してもらって現地に送ってもらうため、少しのズレが生じているのだ。

まあ、そんな事情は二人には分からないが。

「と言うことは、ラッキースターは住宅地に潜伏してるって事……!?!」

その事実は恐ろしい想像を抱かせる。

ノイズが、常に一般市民と隣同士に存在しているということなのだ。

「奏ちゃんのガングニールが刺さったことで、活動パターンに明らかに変化が出てるって事もある。実際僕らは、あれ以来、ラッキースターが炭化した姿を見たことがないからね」

確かに、ハイトは、ボツシュート的に帰還している。

それに、明らかにハイトの見た目が変わっている。

矢ガモどころか槍ノイズだ。

それ以来行動が変化していれば、ガングニールが影響を及ぼしていると考察されるのは当然であろう。

「でも、これなら、ラッキースターの追跡は大分進むんじゃないかしら」
絞つていけば、確実に正確な出現を割り出せる。

彼らは選り抜かれた優秀な情報解析のプロでもある。

実際、彼らの手は未来のすぐ側まで迫つて来ていると言つていい。

まあ、引き出しの中だけとは言え、常時ノイズプラントと門が繋がっているのだ。

少なからず反応が出るのは当然であり、ハイトを含めた少女達が政府の技術力を知らないためでもある。

「だけどね、なぜかこつちもあるんだよ」

と言つて表示されたのは東京スカイタワーの常時モニター。

特機部とつきぶ二を含めた非公開組織の用いる映像や各種データの交信と言つたものの統括制御の役割があり、その設備は最新型だ。

そのすぐそばを発生源とする、微弱な……しかし、同型の波形。

その真実に彼らが気付けるだろうか。

その反応が、セレナがテレビを見たいとせがんだ為に過ぎないと言う事を。

未来がなんとなく、スカイタワーの近くなら感度最高じゃない？ ということですぐ

傍に門を開けただけであるという事を。

そして、何より重要なのだが、彼らが関知している反応がハイトの反応だけではなく、未来が開いているコアモジュール回収用の門、ならびにその奥にあるノイズプラントの複合したものであるという事を。

「ちよつとまつて、友里さん、この反応!」

「噂をすれば何とやらね、皆を呼ぶわ、今度こそ尻尾を掴んであげる!」

「何処が尻尾か分かんないけどね……ん、ここは初めてだな……通常のノイズ反応も無いし、つてなんだこれ、今までとは比べものにならないぞ!!」

そして——住宅街の一点。

すなわち、ほぼ未来の自宅まで絞り掛けていた彼らに捜査の方針を曲げざるを得ない事件が起きたのがこの日であったのだ。

住宅街ではあるが、今までの候補地とは全く違う地点に最大の反応でハイトの反応が発生したのである。

そして、特機部二はラッキースターハイトの認識を改めなければならなくなる。

今まで、ハイトは従来のノイズのみに攻撃を絞り、人間には一切危害を加えない。

奏がヘッドパッドを受けて未だ昏睡状態だが、それすらも彼女を助けるためだと推測

された。いや、ただやりすぎたのだあの海星。

今までの活動により、お人好しが多いとは言うものの、一応国家的責務を有する特異部にさえ、そう信用されていたのだ。

それが覆されることになったのだ。

後に、星形ノイズの軍勢による人的被害として最大のものであったと記される事件。

ただし、死傷者が一人としていなかったため、取り沙汰される事がほぼ無い事件。

文面だけ見るとついに特機部二狂ったかと言われる三代事件の一角。

『アイアン・メイデン グリーン・オニオン
鉄の処女と 葱 事件』であった。

そして、あまり知られていないことではあるが。

この騒動は一人のメンバーが加わる原因となった事件でもあったりする。



民度。人間力。色々な言い方もあるだろう。

ミクの母国。この日本、という国は大変治安が良い。

我が故郷、ウルクでさえ、各種魔獣による被害、エビフ山を根城としたオオエヤマ盗賊団残党に対する迎撃など、大規模な戦闘はままあったのだ。

日本とて、民草を食い物とするマフィアの類は存在する。

だが、かつての武道派はなりを潜め、借財と盾としたインテリヤクザというものが蔓延っているらしい。

が、時々現れる通り魔などを除いて、暴力的な命の危機が大規模で襲いかかることなどほぼ無いだろう。

おっと、昨今やたら沸くノイズは別なんだが。

それはきつと、この国の民草の気質の極端さだ。

それは許容性。

この国の人々は寛容だ。

ミクの御母堂などはそれが顕著だ。

ノイズである俺に全く臆することなく、家事の手伝い等を申しつけてくれる。

危険かもしれない、と排斥しない。

俺を内に引き入れた娘を信用し、家庭菜園の世話なども頼んでくる。

実家が花屋であつた俺にはまさに水を得た海星が如く、バリバリ育成しているのだが——ああ、脱線した話を戻そう。

ミクの家の庭は、道路からも容易に伺うことのできるオープンな構造だ。当然、近所の人間にも、何度も目撃されている。

俺は言語化出来ない発声のために会釈だけしかできないのだが、皆普通に挨拶を返してくれるのだ。

俺の今までの危惧は何だったのだ、という受け入れられっぷりである。

なんか、着ぐるみを着ている人だと思われているようだ。

それはそれでおかしい人間に対する寛容が過ぎると思うのだが。

何故か。

この氣質が、一つ前提を変えるだけで容易く反転するのだ。

それが、群衆となつたときである。

この時ばかりは、俺はこの国民を養護することができない。

出来るものか。

愚かすぎるのも度が越えすぎている。

冷静に一人で考えればわかるだろうに。

この国は教育も進んでいるのだから、当然教養もあるだろうに。普通分かるだろうに。

思考を他者に任せ思考と自己言動の責任を放棄するのだ。

そして、その大多数の意見に見えるものにすぐわぬものを徹底的に排斥するのだ。

この国の人々は寛容的だ。

だが、この国の群衆は排他的なのだ。

何故こうも極端から極端に走るのか。

今回は、政府にも責任がある。

ツヴァイウイングによる儀式中に起きた特異災害ノイズ襲撃の情報を大部分制限したのだ。

だが、それは衆愚であろうとも、いや、衆愚であるからこそ、劇的な反応を示した。

一万三千人近い死傷者をだしたあの災害だが、ノイズによるものはその三分の一程度で……まあ、それでも四千人を越えるものであったのだが、逆に言えばその倍以上が逃げる人間同士での転倒などによる圧死、避難路を巡る暴行による致傷であった。

報道機関は取材で得たその情報を、より購買意欲を誘うべく、感情を煽り、人々の正義感を刺激したのだ。

そして、その動向を政府は制限をしなかったのだ。

ノイズに対処する、奏でや翼のこと、それらの対策、なによりあの対ノイズ装甲は、秘

匿されてしかるべき代物であるが故に、情報そのものを殆ど覆い隠したのだという事は容易に想像が付くと言うものだ。

被害者達への——ああ、居るだろう。我が身可愛さに人を押し退け生き残った者が……だが、そんな者は一部に過ぎないにも関わらず。

生き残りが全てそのような人と成りだと、誇張した表現へ勧告し、宥める事すらしなかつたのだ。

繰り返そう。

この国の個人は、異質なものに対しても驚くほど寛容だ。

それは、異なる人のことを思いやり、人の輪に誘う正しき心から来る。

だが、この国の衆愚は極めて排他的だ。

それは、集団に属さぬ、皆に危害を加えるかもしれないものから皆を守ろうとする、正しき心から来る。

どちらも、正しい心から生まれる情動だ。

だが、異物からのリスクが自分にある場合は許容値が大きいにも関わらず、そのリスクが僅かであろうと、集団へ向かうと、それを廃するためには。

どんな残酷なことも。

どんな卑劣なことも。

どんな悪辣なことも。

正しいと信じて、行うのだ。

この国の民は、人に迷惑を掛けてはいけけない、と言うことを病的にまで躰される。

自分では我慢できることが、皆に向けられると一切耐えられないのだ。

そして、それは正しいと教えられるのだ。

そして人は、正しい事をすると気持ちが良い生き物だ。

快楽は常習性があり、さらに繰り返すと馴れ、同じ刺激では満足できずより強く求め

る点など特に麻薬と同じものだ。

つまり、正しい事はエスカレーターに歯止めが利くわけが無いのだ。

そして加えよう。

残念ながら、この国の民も正しい者ばかりではない。

ばかりか、この構造を理解し、大きな声で弱者をいたぶり、自分は安全なところからそれを見て悦に入る度し難き者もいる。

自然と発生するそれら煽動者アシテーターは本人の暗い快楽を満たすと同時に、加害者側の大多数の人々が社会に対して持っている不満やその他の、ガス抜き効果を発揮するのだ。

そう、この国は、治安が良いが歪なのだ。

民主主義国家でありながら、相互監視社会で維持された独裁政治と同じ民衆の思考構

造と、憂き晴らしの形が成り立っているのである。

そこを鑑みれば……やはり、我等が故郷こそ至高の国であることは明確であろう。

恐るべき事に、この国の構造は、コミュニティを守護し、維持することに非常に長けているのだ。

そして数は力だ。

弾圧される側は、堪え忍ぶしかないのである。

それは、腐っているが、覆せぬ合理的な構造だった。

——そう、虐げられる側が、数を覆すほどの圧倒的な力——暴力——を保有しているという予期せぬ不条理が無い限り

覆されぬ筈のものだったのだ。



現場に到着した時には、全てが終わっていた。

既にノイズ反応が消失したが万が一、という事でシンフォギアを纏った翼を同伴した黒服達が現場に到着した時には、大量の煤が舞っている。

ノイズによる殺戮が起こった時に起こる人間とノイズの対炭化現象で発生するものであるため、翼達には見慣れたものだったが……今回はそうではない。

後に分かるのだが、この煤は全て星形ノイズが活動限界に達して炭化したものであり、炭化させられた被害者は一人としていなかったのだ。

だが、それが後に分かることだとしても、異様な光景が広がっていることに代わりはなかったのだが……。

なんだこれは。

一同は一律にそれを見て思ってしまった。

しくしくしくしくと。

風が金属を擦るような音が聞こえてくる。

しかも、一般的な住宅街、その道路の各所からである。

そこには、日常にはそぐわない物が至る所に犇めいていた。

「鉄の……棺？」

翼が思わず呻くのも致し方がない。

気をつけをして横になった人のような形をした物である。

近づけば、しくしくという声は泣き声であることが分かるのだが。

「人が……入っているッ!？」

もしかしたら、という嫌な予感が的中した事に背筋に悪寒が走った翼は安否を確かめるべくその固まりに手を置いた。

置いて、しまった。

途端に、人を収めた鉄の棺がガタガタと暴れだし、叫び始めた。

今までの泣き声とは比べるべくもない号泣である。

しかも、翼の触れた一人から迸った号泣が同じ境遇の者達を一齐に泣きわめかせた。魂を絞り出したかのような泣き声の合唱に、流石に彼らもたじろぐしかなかった。

いつもの生命の危機と言う形の驚異ではない恐ろしさがそこを満たしていたのだ。

そこにオペレーター、藤堯からの通信が届いた。

『近くのコンビニの監視カメラの映像を見てみたんだけどね』

だが、その内容は、耳を疑うような物だった。

その、人を閉じこめてるのは、清掃用具用のロッカーだよ、と。

「え……?？」

『周囲の学校やオフィスといった、あらゆるところからかき集められてる見たいね。しかも一斉にその傍に出現したみたいで、一課の通信回線がパンクし掛けてたわ』

続いて友里の報告である。あちこちで一斉に星形ノイズが発生したため、緊急連絡が殺到したのである。

「なんで？」

『しかもちゃんと代金払ってるね。貴金属で』

「律儀!?!」

『でも——こりゃあ、泣くわ。人をロツカーに押し込めて人の形になるまで物凄い殴ってる。しかも、中の人が傷つかない絶妙な威力で』

「まさかの匠の技ッ!」

『しかも、綺麗に人の形になった後、持ち上げて泣くまで振ってる』

一切の容赦がなかった。

『でも、これで、星形に変質した個体も炭化してなお再出現することが証明されたわね………凄いな数よ、これ………と、解析が終わったわ、星形が最初に出現したのは………普通の一般家屋ね。その先よ』

その先にあつたのはごく普通の民家であり。

ただ一体。

レモンイエローの星形のノイズが、ブロック塀にモップを擦り付けていた。そのノイズは、槍の刃部分とその身を貫いていた。

最初の個体。

『ラッキースター』と、特異災害対策機動部でよく誇称されるノイズだった。

最近、本当に公式呼称になるのが有力になつてゐる事に割と戦慄を覚えていたりする。

「……なにを、している……」

翼は、身を震わせていた。

「……なにをして、いる……」

翼は、このノイズが気に入らなかつた。

いや、明確に隔意を抱いたのは、奏が昏睡状態に陥つてからである。

それまで突つかかっていたのは奏であり、翼は特に気にもとめていない方であつた。

むしろ、奏とのやりとりを見て楽しんでゐる節さえあつたのだ。

そして、死んでいたかもしれない奏を、死ぬよりはマシにしてくれたとは言え、頭突

きかました事に対して、突つかかるようになった。

ある意味それが八つ当たりに近いものだと分かつていても。

奏がやらなくなつたのだから、代わりに自分がやらねばならないと、自覚がなくても

強迫観念を抱いていたのだとしても。

だが、それでも。

ノイズを打ち倒し、人々をその脅威から守護する。

防人として共感のような物は抱いていたし、度々かいまみえる戦士としての実力に一種の尊敬のようなものさえ感じていたかもしれないのだ。

結局。

このノイズは、人間の敵なのか。

それとも、私たちと同様、防人なのか。

いったい、どっちなのかと。

揺らいでいたものが。

「……なにを……しているんだお前は……!!」

今回、ノイズは出現していない。

この星形を含めた、星形の集団しか目撃されていない。
では。

この人々の有様は何なのか、と。

お前は人々を守るのでは無かったか、と……!

星形ノイズは、応えない。

心なしか、消沈している様に見えるハイトは、バケツにモップを放り込み、濯ぐと、手で絞り、水気を切つて再びゴシゴシと擦つている。

「応えろ星形！ 一体ここでお前は何を……え？」

ハイトの肩部分を掴んでこちらを向かせようとした翼はそれを見てしまった。

ハイトがブロック塀に書き殴られている……消そうとしている文字列に。

スプレーで「死ね」「この死に損ないが」「税金泥棒」「人殺し」等々、壁や玄関を夥しく埋め尽くしている、口にするのものはばれる誹謗中傷に。

その家屋は、廃屋かと見間違えかねないほどに酷い有様だった。

窓ガラスは無事なもの一つもなく尽く割られ、放火未遂の跡させ見えた。

ハイトは、責めるように翼を凝視し、バケツの水を側溝に廃棄し、モップを玄関に立てかけると足下からエメラルドの輝きを発する。

「おい……なんだこれは、星形、ま、待て……！」

翼の制止を聞くことなく、ハイトは足下に沈んで消えていく。

腑に落ちない気持ちの悪さを抱えながらも、オペレーターから改めて、最初の星形——ハイトはその家から出現したという情報を得て。

翼は黒服を併い、その家に入っていく。

表札には。

立花家、と書かれていた。

とても、仲の良い親子がいた。

娘にとって、その父は誇らしく、大好きであった。

こんな人になりたい。

常にポジティブで、ポジティブ過ぎて空気を読めないときもあったけれど、他人の痛みを許容せず、自分が引き受けることに躊躇わない人だった。

だけど、その氣質が尽く裏目にでてしまった。

彼は、娘が九死に一生を得た事を天の祝福とばかりに感激した。

緊急手術を余儀なくされる重傷を負ったところから後遺症もなく、驚くべき速度で復帰した奇跡を心から喜んだのだ。

その喜びを皆にも分かつて欲しくて、喧伝して回るのは当然の流れであつたのだ。だが、九死に一生を得たという事は。

十のうち、九は、死んだのだと言うことだ。

人は、自分が得られなかつた幸福を得た人を妬むものだ。

それは当然の情動であるし、特にこの国の民の快感原則は――

強きを貶し。
弱きを嘲う。

――事なのだ。

そのために、大きな企画から外されることとなる。

取引先の社長の娘は、九の方だつたのだから。そのことが伝われば、関係のない事であつても、感情論で取引を打ち切られる事もまた、社会人としては失格であつても致し方のないことかもしれない。

そしてそれ以来、社内でも持て余され、距離を置かれ。

彼の持ち前のポジティブさは、全てが裏目にでてしまう。

当然、彼は荒れた。

娘が憧れた姿はすっかりなりを潜め、酒量が増え、言動が荒々しいものとなつていく。

そして、父がそうなのだ。

当人である娘が受けるのはどれだけのものであろう。

死者の身内から、理不尽にも生き残ったことを詰られる。

風聞から、責めることは正しいのだと言う空気が作られる。

恐ろしい非日常から、必死で頑張り、復帰すれば。

生きていたことが悪だと詰られる日々。

もし側に未来が居なかつたら家から飛び出して、目覚めた力でノイズをシバき倒して居たかもしれない。

家に帰れば、憧れていた、強かった、守ってくれる筈の父は力なく。

その目が……守ってくれるはずの父ですら。

自分が生きているせいだと、無言であつても語っている。

そしてこの日、ついに均衡が崩れたのだろう。

ついに。

父は娘、響に対し、手を挙げた。

それが、切っ掛けだったのだ。

娘——響の退院前から、特異災害で生き残ったものへの風当たりが酷いことを不安に感じていた、一人のマスターが、その心配から常に見守っていた事など、誰も知る由が

ない。

時々どころかこの一件が始まるまで乙女にあり得ざる表情でウエへへ響ー、響可愛
いーと言つてる姿など見ていない。

いや、本当常に見てないかい？

むしろいつ見ていないんだ？

と言うぐらいいいつも海星どもが響完全包围網を敷いて矯めつ眇めつしているのであ
る。そう、一緒にいる時でも。

ハイトは言及するつもりはない。ただ、遠くを見ていた。ヨヒメン一族に近いなーと
は言っていたがその詳細は彼以外知る由も無い。セレナはネタ一つ、と述べてサイレン
ト撮影していたが。待て、スマホいつ手に入れた。しまった、ついインスタ映えすると
思つて。公開する気なのか!?! 怒らないからどうやって手に入れたか話さない、と詰
め寄るハイトの方が親っぽかった。

閑話休題。
死にも角にも話を戻して

響が、どれだけ父親の事を心から憧れ、信頼しているのか知っていた彼女は。

それを裏切った響の父親に対して、殺意にも等しい憎悪を内腑で渦巻かせてしまつた
のだ。

脳裏に火花が走るほど激高した彼女は、忠実なる無数の従者の中で、最も信用できる

彼をセレナの説教中だったが問答無用で瞬時に派遣した。

具体的に言うならば。

そこは本来ならば家族の団欒。

「ジェアアアアアアッ!!」

夕食の並ぶちやぶ台の前で行われた暴拳を前にして。

ちやぶ台の真下から普段の数倍に及ぶ速度で開門したエメラルドの輝きから飛び出した海星は、ちやぶ台ごと夕餉をぶっ飛ばして出現したのだった。

なお、出現の際、彼が発した叫びの内容が。

『セレナ!! そのスマホの入手経緯を正直に述べるんだ!!』

と言う締まらない台詞だった事は、未来にしか分からなかったりするのでシリアスな雰囲気は崩される事がなかったという。

07 熱伝導

セレナ。正直に言いな……じゃなくてだな。

ああ、頭が茹だる。

お前は。

お前は。

お前は！

お前はツ！！

有無を言わず、その男の顔面を鷲掴みにする。

ジユワツと手の内から聞こえてくるが知ったことではない。

喚き散らしているが知ったことではない。

どうして俺ばかりと言っているが知ったことではない。

その言葉はお前ではなく、お前の娘が発するべき言葉なのだ。

その娘が堪えていると言うのに。

情けないぞ、度し難い！！

その様で……お前はそれでも父親かツ！！

未来と視界共有の実験を繰り返したので、立花宅の間取りは分かっている。

ズリズリと台所まで引きずって行く。

子供に見せるようなものではない。

落ち着け。

冷静になれ。

いくらなんでも衝動的過ぎる。

いや、意見は変わらない。

親とは、子という木を植えたものに過ぎない。

本当にやつてはいけない事をしようとした時のみそれを正し、本当にあつてはならぬ枝を剪定するのみで、生きる知恵や良く生きる術を魅せ、あとはただ見守ればいい。

独り立ちできるまでは、理不尽な嵐からはただ黙って盾となつて風を遮つていればいいのだ。

そして自分を越えた事を見届けたなら。

安心して死んでいけるのだ。

それをお前自身が、手折ろうとしてなんとする！

——いや、落ち着け、湧き上がる感情を制御しろ

確かに憤つたのは確かだ。

だが、ここまで激情して怒りに任せる程ではないほどだ。それがどうだ。

激情を宥めても宥めても、汲み上げられて来るこの激情、は、落ち着け。

大多数の悪意は人を弱らせ、病ませるのだ。

だからと言って免罪には出来ない、が。

病んでいるのなら、治療すれば良い。

ああ、思考が茹だつて纏まらない。

治療、治療。

心が病んでいるなら、脳を？

脳には何が良い？

分からない。

ならばある程度大抵の症状に効く対症を。

……ああ、そうだ。

丁度いい。ここは台所だ。

きつとアレがあるはずだ。

どのようなしようか……。

やはり、即効で働くよう、吸収効果の高そうな手法が良い、か。

推測に従い、俺は冷蔵庫に手を掛けたのだった。

ああ、あつたあつた。

葱。

——へ？

間の抜けたミクの声が脳裏に響いた。

途端に明瞭になる思考。

まさか……俺にも効果があるのか！

驚くべき事実に慄くが、ここは説明せねばならないだろう。

ほら、この間俺が読んでいただろう、葱とは大抵の病に対して特効こそ無いもののあの程度の効果が認められるという。

彼もきつと本来は優しい父である筈なのだ。

心無い誹謗中傷で病んだ心も治療すれば、きつと良き父へと戻るであろう。

——いや、葱じゃ心の病は治らないから!! あの本のタイトル思い出して! 『過信してはならない民間療法』だから!

過信にも程があるよね!! 効くのは疲労とか細菌性の病気だけだから!

ミクよ。

心も、疲労するんだ。

——いや、そうじゃなくてー!!

しかし、なんか先程まで全身を満たしていた憤怒がさっぱり晴れたな……体温も常温に戻ったようだし……ん？ まさか、これも葱の薬効なのか、こればかりは我が故郷にも植生していなかった。地域特有の薬草というものなんだな……。

この国にも誇るべきものがあるな、と感心し治療を再開する。

——もしもし、ハイトさん

なんだね、マスター。

——そもそも、葱でどんな治療を？

言われて葱を見る。

握っている辺りが軽く焼けて焼き葱になっている。

これをガーゼで包んで喉に巻けば、気管支の炎症に効果があるらしいが。

やはり。

経直腸投与一択だ。

——それ迷信、迷信だから！ 効果ゼロだから！

ミクよ、経直腸投与は、経口投与に比べ、吸収の速度と効率が違うのだ。

やはり、本来異物が入って来るため選別する消化器系より後は排泄するだけの直腸の

まあ、判断つかないが、まあ、あとはどれぐらいで効果が出るか待つだけだな、うん。
ところで、何故セレナの――

「やめて！ お父さんに酷いことしないで！」

俺の思考を遮った必死な声は、最近聞きなれたものであった。

父に殴られ、茫然自失としていた筈の響である。

「やめなさい響」

「そうよ、危ないわー！」

「でも、でも、だってお父さんがー！」

その響を後ろから祖母と母が抑えて台所から連れ出そうとする。

うむ。この辺りの治療は特に身内に見られたくないからな。奥方、それは正しい。

――いや、だったらなんで私には見せてるの!? うわ、セレナ、ガン見しないで！

……セレナも見れるのか さつき、念話のようなものもあったし。

――あ、それ他の海星のモニターみたいな顔に映ってるから見れるの。今知ったけど、声はこの海星に話しかけると伝わるみたい。

え？ 俺らスマホになんの？

じゃあ、こうやって話してるのはセレナに届くのか？

――それはない、みたい

痒いところに手が届かぬなオイ。

——あとだけどね、ハイト

セレナが声色を抑えて。

ハイト、また忘れてるけど、ノイズだからね。一般人からしたら命の危機と思われるから……んー、返事聞こえないんだね、これ。

そう、だったな。

俺はノイズである。

ツヴァイウィングのライブに参加して居たのだから、その恐怖は人並み以上である筈なのだが。

にも関わらず、響は自分に手を上げた父を助けに来たのか。

——そこが、響なんだよ

自慢気なミクに同意しつつ、さて、この誤解、どう解けばいいだろうかと思案する。

どうしようもない、か。

そこはきつぱり諦めて先見的余地がある事を見据えようではないか。

例えば、この子を戦士として鍛えたら、素晴らしい成長を果たすだろう。

——変なブリーディング考えないでよ!?

いや、俺には分かる。この性根、この胆力。きつと彼女は素晴らしい戦士になるだろ

う。

——そういう称賛は要らないってばー!!

——それよりハイト、なんか嫌な旋律がその子から漏れ始めてる
旋律? どういう事だ、セレナ。

——その子から、持ってない筈が無いのに、シンフォギアの音色が聞こえてくるの
(俺のメツセージは相変わらず伝わってない)

シンフォギアって、なんだ?

そう言えば、前俺に刺さった槍の破片を文字通り槍にしたときも言っていたが。

——セレナ、シンフォギアってなに?

——ああ、未来は知らないか

俺も知らん。ナイスアシストだ、ミク。

——なんか、歌が燃料のノイズぶつ殺す鎧かなあ。私持つてるよ

あー! 対ノイズ装甲のアレか!

——なんで歌が燃料になるの?

——それは私が知りたい

尤もである。

ミク、それより重要なのは、アレは少々破壊力が一般家屋には物騒すぎる事だ。自分

のせいで家がぶつ飛んだりしたら響は気に病むと思うぞ。

なので、セレナに安全に止める方法を教えてもらってくれ。

——うん。セレナーセレナセーレナー

——え、なにそのリズム。どうしたの？

——カクカクシカジカで

——あー。モグモグウマウマなのね。ハイト、よく聞いて。私が聞こえてるのはシンフォギアかどうか知らないけど、伴奏なの。

本格的に起動するには歌うのが必須、だからね。歌わせなきゃいいんだよ。成る程。

——ハイト、響のこと傷つけたら自爆だからね

極刑!?

まあ、心配する必要はないぞ——ん？

俺の全身が、どくんつ。と震えた。

続いて、俺を貫く槍が震え始める。

まさか。

この振動、この波長は忘れられる訳が無い。

奏の対ノイズ装甲——シンフォギアだったか、のものだ。

そして、奏經由で思い出した。

そう、思い出したのだ。

あの時奏が死力を尽くして守ろうとしていたのが、この子だった。
忘れていた。

——え、ハイト、何が？

ミクの疑問に答える。

響は、俺と一緒に、槍の破片が刺さった子だ！

まあ、俺は自分で刺したのがぶっ壊れたんで食い込んだままっただけなんだが。

——え、じゃあ、心臓付近に刺さって摘出できない異物って槍なの!? 響大丈夫なの!?

——ごめん、ミク見るとなんか深刻っぽそうだけどこっちとしてもかなり深刻事項！

なんでハイト、あの子と共鳴して同じ波長発してんの!? 相互共振増幅して歯止めが効かなくなりかけてるツ！ 早く止めないとどうなるか分からない！

心なしか、響の胸元から、輝きが溢れ始めている気がする。

同時に、ベキベキと彼女の右前腕から、破碎音が聞こえてくる。

——砕けているのでは無く、鎧っている？

何かが、奇怪な音と共に腕を包み込んで行く。

加えて言うとうと、こちらも似たような破碎音が頭部を貫通している槍の破片から聞こえてくるのだ。

背筋を戦慄がスケーティングして駆け上がったいく。

今、ミクが聞き捨てならない事を告げた。

槍の一部が、響のよりもよって心臓付近に食い込んでいる

少し、嫌な事を思い出した。

以前、ミクが芝居を保存しいつでも鑑賞できる映画という娯楽に誘ってくれたのが。

そのジャンルがSFホラーだったのだ。

その内容というものが、幼体時に人体に寄生しその胸を食い破って出てくる異形を主題にしたものだったのだ。

セレナはリアル生物の解体食肉加工しかり、鶏の首折りしかり、現代文明圏人にしては我々同

様普通にやっております、所謂モツ系に対する抵抗は全く無いのだが、ホラー演出への耐性が皆無だったのだ。

それを見て、ミクのサドっ気が頭を擡げたようで、ぎやあぎやあ逃げようとするセレナを羽交い締めにして無理やり目を開かせ、メイン4部作をマラソンさせたのである。

ニートと陸上部のミクでは身体能力に差が開いており、全く逃げられなかったため鑑

賞はじっくりねっとり完結し。

——結果、セレナはしばらく一人で寝れないほどのトラウマを背負ったのだった。

それから長らく俺を抱き枕にしないと眠りに就けなかったのだから、それは一際だったのだろう。

一方俺は俺で、その異形を双貌の獣と重ねて見てしまい、かなりメンタルに来ていたのだが。

あれのように胸を食い破って槍が復元されるのではあるまいな。

スプラッタ間違いなしの恐ろしい光景だろう。

だが、まだこの状態なら取り返しはつく。

二人とも安心しろ。

歌を止めるなら口を塞げばいい。

幸い、ここは台所だ。

響が食べ物好きなのはミクに耳タコで言い聞かされているからな、彼女好みの、口を塞ぐものならふんだんにある！

まずよく手を洗う。

——いや急いでよ！

続いて冷蔵庫から、ゆで卵を選択、浸透勁で殻を吹き飛ばし、一気に三つ、響の口に

詰め込んだ。

「え、なに——ふおおむっ?!」

——今サラッと非常識な光景あったよね、茹で卵の殻がパンツって全部外側に吹き飛んだよね!?

——未来、ハイトってノイズであるってところが目立ってるけど、ノイズ関係なく素で非常識なんだよね

お前から失礼だな。

だが、更に非常識な光景が目の前に展開されてた。

「ん——、ぶはあ、美味しい?!」

馬鹿な……卵三つを、一気呑み、だとオ……!!

いい具合に口を塞ぎ、呑み込もうにも喉が詰まるためおいそれと実行できない、その筈のチョイスが、一呑みで覆されただと……。

これが蟒蛇ウツバミか。

——いや、違うんだけど……日本語間違ってるんだけど……

——ハイト、気をつけて、旋律は止まってない

歌わせてはならないわけだな、よし!

その後の戦いは、下手なノイズの軍勢や、奏でや翼といった対ノイズ装甲、シンフォ

ギア相手の稽古を上回る激戦だった。

冷蔵庫の中から、口内を傷つけない、そのまま食べられる食材をチョイスして次々と響を歌わせぬために放り込む。

その、尽くを響は喰らい尽くした。

ほとんど咀嚼もせず、ほぼ丸のみで。

馬鹿な！ この子の口腔と咽喉、後ついでに胃は、宇宙か!!

——うわあ、あんなに大きいの呑み込んで……

——セレナ……分かってて、言ってるよね！

——ん？ なんのこと？ 私分かんないから、よく分かってる未来に、事細かに教えて欲しいなあ？、分かってんでしょ??

——くっ、ぬぎぎぎぎぎぎぎぎい……っ！ お、覚えてなさいよ

姦しいものなど何も俺には聞こえません。巫女院でよく聞こえた男の夢ブレイカーを彷彿とさせる猥談なんて聞こえませんよ。

仕方がない。

これは命の危険もあるため、どうしても控えたかったが……。

——ちよつと待ってハイト、響に何をする気なの！

もう、後がないんだミク、これを使うしかない……毎年年末年始、お年寄りが毎年何

人も命の危機に晒されてようが決して手を伸ばすことを諦めない、躊躇わない、そう――

受けるがいい、立花響、この、ジャンボ大福餅を！

――え、ハイトも未来もなに、このノリ

――ごめん、つい……でもハイト、なんでそんなに日本のお正月事情に詳しいの……？

ん？

「ふむおっ！」

既に口いっぱい大福を押し込んだのだが、なにか言っていたか？ 見るがいい、流石

の響でも、このサイズは？み込めぬようだな。

むー、むー、と唸っている響を観察。

よし。呑めないだけで詰まっではないいな。

槍の共鳴は収まり、鎧われた手も元の状態へ戻っていく。

……なんとか、なったようだな。

命に支障が無いことを確認し、立花一家の横を通り過ぎてリビングに戻る。

そして俺は愕然とした。俺のなしたことを見てしまったのだ。

俺はこの部屋に出現した際、机を跳ね飛ばした。

まさか、その机に夕餉が載っているとは……！

怒り心頭で気づきもししていなかったのだが……ミク、俺は重罪を重ねたようだ……自爆を命じてくれ。

——そんなに重いかなあ！ それ！

なにを言う、一食ぶん失う事がどれだけの事か分かっていないか！ 最悪餓死するんだぞ！

——いやしない、しないから

しかし、さっきの響の食欲を見るに、三日ぐらい何も食べなかつたら確実に餓死するんじゃないだろうか。

——いや、ないから、無いからね！ 分かったから、うん。そこ、片付けるだけでいいから

今の間に關しては敢えて言及せんが……ミクが、そう言うならば。

俺は、俺が散らかした食べ物をかき集め、カーペットを清め、机を元に戻した。途中で、響が手伝ってくれたのが印象的だった。

作業を終え、呆然としている響達女性三人に頭を下げる。

まだ台所では、父親が突つ伏している。

治療が効けばいいのだが……。

——ハイトは本気で言ってるから怖いんだけど……
何がだ。

当然ながら、複雑な表情で軽く会釈した三人を確認すると、玄関へ向かう。
流石に、ここで門を開くわけにはいくまい。

いつ、再びノイズが出現するか分かったものでは無い、と恐れられる可能性もあるのだし。

堂々と表に出て、物陰でミクに門を開いてもらえばいい。

そう思つて、玄関を開く。

再び頭を下げ、外に出た、その時。

ぐしゃり。

体に、軽い衝撃が走った。

……。

手に取つて見ると、卵がぶつけられたらしい。

ドロリとしたものが、体に張り付いている。

「はっははあ！ 弁えたかあ？ この人殺しがあ！」

見知らぬ男が、したり顔で、俺を嘲笑っている。

そしてその後ろには、老若男女、誰も彼もが、自分は正しいと信じ切った顔で俺、そ

して立花の家人達を見下していた。

———「そうか、お前らはそれを正しいと、善だと疑っていないのだな
こちらが悪いと、揺らぐことなき事実だと何も考えず断じているのだな。」

……成る程、これが日常的か。

これは、辛いだろうな。

これが火薬だったりしたら、火事の可能性もあるのだからマシ方か。
だからといって、マシというのは、決してそのぐらい我慢しろ、と言う意味では決して無いのだ。

良いだろう。

「そうか、そうか。いい歳をしておいて、物事を自分の判断で決められぬ戯けが居るの
なら……。」

「今日はこのぐらいにしておくから、自分が何をしたか、ちゃあんと反省しておく
……………は？」

「気付くのが遅いんだよ愚暗が。」

「ああ、分かる。」

先程、引っ込んだ怒りが再燃したのが自覚できる。
今度に分かる。

確かに俺は憤っている。

だが、俺を一挙に塗り潰そうと吹き上がるこの赫怒は。

——マスターミクのものだ——

バス経を通じて、彼女の感情が俺にまで伝わってくるのだ。

それは、金属の板を熱した時のように離れた距離でも容易く灼熱が内腑を焼き上げる。
る。

先程怒りが収まったのも、無知な俺には知る由もないが、大方葱がミクの怒りを納めたからだろう。

何故か、とか言ったが、葱はやっぱり偉大な気がする。

凄まじい。

俺の自制心すら振じ伏せる圧倒的怒り。

意識が侵されるのに抗っていると、怒りに応じて再び体表が赤熱化してきたようで、投げつけられた卵が目玉焼きになりつつあった。

なあ、ミク。

——何、ハイト

駄目だからな。最後の一線だけは超える気は無いぞ。

それは俺だけではなく、ミクの手をも汚す事になるのだから。

——なんで！ 私の手なんてどうなつてもいい！ コイツら、響の事何にも分からない癖に！！

分からないからだ。

特に、日本人の気質は、疑わしきはストレス発散に使え、だ。

それにだ、ミク。

自分の発言を自覚しているか？

響が掛かっているからと言って、籬を外しすぎだマスター。響も、ミクも本来、そんなものを望む者ではないだろう？

俺達と言う力をいきなり手に入れたからのぼせているだけだ。頭を冷やせ。

今のミクは父さえ庇った響にきちんと向き合えるか？

——でも……でも、だつて！

言った都合、引つ込めにくいだろうが、響を引き合いに出したお陰で自覚したか。

それならば、いい。

口でならなんとでも言えようが、制動はかかっている。馬鹿なことはいらないだろう？
だからな、話は最後まで聞くように。

あのな、ミク。そう言っても許す道理があると思うか？

民度の低さに腑煮えくり返っているのは、ミクだけではないのだぞ。

恥辱は味あわせてやる。

方針は俺に任せて、少し、力を貸してはくれまいか。

——何をするの？

もし俺に口があつたなら、口角が釣り上がっているであろう高揚を自覚しつつ、得たばかりの知識を活用すべく、口にする。

「鉄の処女だ」
アイアン・メイデン

非正規核モジュール搭載の該当筐体より、最上位システム権限者へ要請
コア アドミニストレーター

詳細

経験値オブジェクトをシステム権限者経由で指揮下個体へ同期。搭載を申請

工程

システム権限者をクラウドエミュレーターとして代用

稼働指揮下筐体に統制セルとして付与、統括指揮下運用を下達

経験値オブジェクト提供個体の認識より、オブジェクト名を『鉄の処女』と命名
システム権限者の決断をトリガーにオブジェクトを実行

実行事前に製造プラントと同期運用中の許容限定解除『蔵』を開門申請

●●●●● 隔離筐体：魂魄抽出ユニット：カーボンメーカー。以上三用途汎用統括ユニット限定で申請を受諾

企画未登録関数を有す筐体、ならびにその提供を受けた筐体に事前命令下達

ポテンシャルの最高値を維持し、待機命令

システム権限者のトリガーオンまで暖機^{ウォームアップ}運転を継続せよ

それは、初めての事だった。

いつもは、コア回収限定ゲートの拡張開門に過ぎなかった。

だが、これは。

ノイズ限定ではあるが、正規の開門だった。

普段、何者かが通常のノイズを喚び出す際のものと同じなのだ。

同じ開門、同じく取り出されるにもこれは違う。

響宅を数の優位性を盾に取り囲み、敷地に不法侵入を果たし、口々に罵声をあげ、今

にも入り込もうとしていた者達の周囲。

地面。

壁。

植木。

何も無い空中に至るまで。

数の暴力には、単純にそれ以上の数で。

エメラルドの輝きに彩られた波紋が展開した。

それは『門』であり。

一番前にいて、玄関から出てきた俺に直面したせいで想定外の現実に固まっていた男は。

背後から幾重にも重なって展開された阿鼻叫喚に、否応にも、非情にも、哀れにも。

現実に引き戻された。

いや良かった。

セレナは、俺の清掃中から飽きてこの光景を見ていない。スマホでも弄ってるんだろ
う。

本当に良かった。

セレナは、こう言う人の悪意から受けた不審を少しずつながら癒して来ていたのだ。

他ならぬ、この俺の醜い姿で心を傷つけずに済んだ——本当に、良かった。
一歩男へ詰め寄る。

「ひいっ」

その程度で怯えるなよ。

ノイズに襲われて生き残ったら人でなしなのだろう？

襲われていないから、そんな自信満々に拳を振り上げられるのだろうか？ 罵声を放てるのであろう？

ならば、お前達も襲われてみるがいい。

気分転換には最適だぞ？

「でいーd、D、でーでDーでーでdー、DDDでーでDーでーでDー」

Dが色々と掠めるBGMを口ずさみながらすぐさま所望のものを持つてくる。

ガリガリと路面を削りながら運ばれて来たのは清掃用具用ロッカー。

あのさ、指針をミク経由で示したの俺だけど、どっから持つてきたの？

「Dー」

ゴメン。分からん。

——近くに学校あったらしいよ

かったのだが。

よし、頃合いか。

放り込め！

清掃用ロッカーに男を詰め込む。

……ん、どうした？

そこに、Gがジタバタ暴れている長ヒョロいノイズを連れて来ていた。

え、そいつ普通（？）のノイズじゃねえ？

「磁ー!!」

海星同士のジエスチャー中……。

え？ そうなの？

どうやら、俺達の居住空間にいる特殊能力持ちノイズを持ち出したらしい……初めて見る形だが、それより気になることがある。

おい、そいつ人に被害与えないだろうな。

え、なんだって？

海星同士のジエスチャー中である……。

が、難しいなこれ、と体を捻っていたらミクから回答が飛んで来た。

——なんか、そのノイズ、臭くて粘つく汗出すから丁度いいんじゃないかだって

え？

俺が確認する前にGがそのノイズを絞ってドロドロの液体を男入りロッカーに流し込んでいた。

「ぐばあ、ぎゃあ、おええ、ごほつ、くつさあ、おえ臭つせえ!!」

えげつない光景である。

続いて容赦なく扉を閉じると中から臭え臭えと、シユールストレミングと密室に隔離されたような悲鳴を上げている。

よし。

それに近づいて肩をぐりぐり。

回して振りかぶり——？

おらあ——!!

一切の容赦無く、拳を振り落とす。

ごがあつ！

拳の形にロッカーが凹むが、少し力を込めて拳を振るえばこんな箱は中身ごと貫通して棺桶になってしまいうため、金属越しでも中身を直接殴らないように加減が難しい。

はみ出たら臭い汁も出て来るのである。慎重にならざるを得ない。

後は慎重に（この部分が本気）、身がはみ出たりし無いよう少しずつぶん殴るだけであ

る。

ところでカクテルパーティ効果と言うのをご存知だろうか。

人が無数に暮らしているパーティ会場の雑多な会話などは、一つ一つ聞き取る事など普通はできない。

だが、経験した事がある方もいるだろうが、何故かその中で、自分と関連する単語は不思議と意識できるのだ。

これは人間が本来優れている機能の大半をオミットしていることの現れである。

実は、雑多なすべての会話全てを人間はちゃんと聞いているのだ。

それから、自分に関わりありそうな単語を脳の機能で拾ったならばその対話を抽出して意識しやすくしているだけなのである。

たとえ認識できても、必要ないと認識した情報のやりとりはバツサリカットしているのだ。

だから。

他の海星型ノイズに適切な拳具合を教えている間。

俺の後ろで順番待ちしている有象無象の言葉が何一つ聞こえなくてもおかしくないのである。

皆優秀だったものだから、二、三人で実践したら要領を掴めたらしくあつちこつちで

金属を殴打するBGMが流れ始めた。

さて、後は皆に任せて。

一旦区切りを入れて響の家を見上げる。

ひどくボロボロだ。

だが。

心を傷つけるのは、家屋を汚す塗料ではなく文字だろう。

あ、蛇。

都会なのに珍しくニョロニョロ這っていたのでひよいと捕まえて打楽器楽団を手招き。

G、これも入れという。

丁度女性だったのか、絶叫の音色が変わったのを後ろに聞きながら、ミク調べで知っていた。

——今さらつと凄いことしてなかった？

ん？ 蛇のことか？

猫も杓子も大慌てってこの国の言葉があるだろう？

——う、うん

あれ、複数の元となった逸話があるわけだが。

俺としては女子も弱子もを推したい。

——そ、そうなんだ……

俺は思うのだよ。人の尊厳に関しては老弱男女関係ないと。

それを踏み躪るものものには、同様に。

老若男女、容赦無し、だ。

——なんで私よりそんな日本語に詳しくなってるの？

この国の言葉は言い回しが面白いからな。成り立ちを調べると、民族性が良くわかるんだ。

——そ、そうなんだ……

ミクがコメント返しを面倒になったところなので、仕事に移るとしよう。

以前、ミクと調べたので掃除用具の場所も分かる。

モップで汚れを……え、何これしつこい。

落ちねえな……。

油污れは乳化させてとるか、同じ油で流すんだっけな。

でもここにはどちらもねえなあ。

さっきの粘つくノイズの、あれ使えないかなあ。

いや、汚れが取れても匂いが取れなかったら使えんか。
負けん、負けんぞ。

妻が身重の時、その家事を一旦に引き受けた我が清掃技術を舐めるでない!!
生活の知恵が使えぬのならば、純粹に体力で磨き切つて——

——いや、ハイト

なんだミック、今俺は清掃に励んでいる。火急の用でなければ少し待つてくれ

——あの、みんな終わつて帰つただけぞ

そうか。だが、やっぱり切りの良いところまで行かないとしつくりこないというか。

——でも後ろ、氣づいてる？

ああ……うん。

肩を掴まれれば流石に氣付いたわ。

なんと言う事だ。

俺とした事が、清掃に夢中になりすぎていた。

翼が、見目麗しき歌つて踊れる歌手とは思えぬ形相で俺を無理矢理振り向かせたの
だった。

掃除終わるまでちよつと待つてくれないか？

——え、それで良いの!?

いや、本当見ててムカつくこの字が消えなくてなあ……。

——ありがとう、ハイト……

でも、肩掴んでなおスルーされてる歌手もよく見てあげて。

いや、清掃が出来な俺を笑うならともかく、感謝する謂れはないぞ、消せてないし。

——本当に憤って、本気で消してくれようとしてくれたから……でも、なんか面倒になりそうだからカムバックね！

待って！　せめて清掃用具片付けさせて、出しっ放しって気持ち悪いから！

えーと、えーと！

——大丈夫だから、私が後で片付けておくから！

せめてまとめさせっ——

慌ててバケツの中身を捨て、モップを絞り、せめて一箇所にもまとめようとモップを玄関の扉脇に立て掛けて——　っだあああああああッ！

タイムアップ。

俺は問答無用でミクに門へと落とされたのだった。

——あ、私テレビでこんな感じの、一発芸のを見たことある

セレナ。帰ってきてきたのか。さっきの醜い光景を見せなくて良かった……ではなく、

その一発芸は最近あまり見ないんだが……借りたんだな、DVD借りたんだなあああ

あああつ！

ああ、余談なのだが。

翼はこの時、俺に責められていると思っただらしい。

すまん、俺が落ち込んだり苛立っていたのは落書きに対してなんだ。



未来の熱伝導

未来がキレると海星達が一斉に激昂する。ハイトもだいぶ危なかった。

響の食欲ヤガ疑惑。

好きなものがご飯&ご飯の響は3日ぐらいで餓死する。

大丈夫大丈夫、まだ常識の範囲内、最後の大隊の少佐は一食抜くと死ぬらしいし。

波紋状の門

杖によるノイズ召喚と異なり、ゲート開門による眷属の呼び込みである。

イメージとしては皆大好き英雄王のゲートオブバビロンの波紋。

ただし、ノイズ用のエメラルドカラーである。

マスター権限による経験値共有

海星ノイズは、それぞれ個性を持つが、経験値やスキルは未来経由で並列化を測ることができ、まるでアクメツか、ワルキューレである。

臭くて粘つく汁を出すノイズ。

原作ではクリスが召喚して響をネバネバにした。原作で無臭だとしたらとんだ風評被害である。

作中で言われていないが、牛乳を雑巾で吹いた後、風通しの悪い、湿度の高い日陰で3日ぐらい放置したような匂いがするらしい。

08 ねぎ

兎に角、この家には入らなければならぬ。

翼はインターホンを鳴らすと、しばらく経って、恐る恐る、という感じで女性が出迎えてくれた。

「申し訳ありません、特異災害対策機動部のものです」

「あ、緒川さん!？」

混乱の兆しを感じたのだろう。

こんな時に細かい心配りが出来るマネージャー。

翼のマネージャーもやっている緒川がいつの間にかやらすりと割り込んで対応していた。当然秘匿されている二課と言う言葉も伏せている。

流石と言っているのだろうか。全く今まで心配を感じなかった。

「今回、少々特別な事だな——お話、よろしいですか？」

「叔父さ……司令まで!？」

さらにぬうつ、と熊が出るような迫力で赤いシャツが印象的な大男まで入って来た。

そう、司令であり翼の叔父でもある風鳴源十郎であった。繰り返すが、迫力が凄まじ

い。

「おう、翼。ここは話が必要なんでな」

お前が思っているより大きな事になっている。

目が、そう語っていた。

「あ、あー!? えー!? ツ、ツヴァイウイングの翼さん!! しかもあの時の格好だー!」

「こら、響、出てこないの!」

「いえ、奥さん。お嬢さんにも大きく関連のある話なんです」

そう告げた時。

女性、響の母は今にも泣きそうな顔になった。

この期に及んで、娘にさらに何を背負わせるのかと。

だが、最低限言うべき事は言うのが流石響の母である。

もう、これ以上、娘に負担を与えないで下さい。

それだけは、告げるのだった。

特機部二の司令であり、翼の叔父でもある風鳴弦十郎もこの家の状況を見てようやく、ツヴァイウイングのライブ以降の現状を把握した。

彼はノイズ被害や各所掌との調整など多忙に追われており、生存者のその後を知る余裕はなかったと言えるのだが。

司令なだけはある、自分達の情報隠蔽の結果がこれなのだ、すぐに察する事が出来る程には聡明だった。

目を閉じた。

彼は正義に熱く、そして甘いと度々忠告される程仁徳熱い人物であるが故に。

組織としてはリスクを背負う事だとわかっていても。

「これから話すことは、他言無用でお願いいたします。ですが、どうか、どうか、謝罪をさせてはいただけないだろうか」

そうして、頭を下げた。

当然、組織の長が頭を下げた特機部二の面々も驚いたが、下げられた側である立花家の女性陣も驚いた。

それほどに、悪意を受けすぎていたのだから。

一人、なんで？ と疑問を浮かべている響だけが平常運転だった。

居間に通された時。

立花家の一同は一齐に「あつ」という表情に変わった。

そう、立花家の大黒柱が惨状を晒したままだったのだ。

咄嗟に緒川が翼の視界を隠したのでネギを生やした男が天羽々斬の錆にならずに済

んだのだが。

「あの……奥さん……あれは……」

「……………夫です」

答えるまで彼女の脳内を走ったシナプスの奔流は彼女以外には理解しがたいものがあつただろう。

「それで……話とは？」

埒が明かれないと思つたのか台所を封印して切り出すと、源十郎領いて率直に話し始めた。

「我々は特異災害対策機動部二課のものです」

「局長!？」

誠意として、まず源十郎は一般的には秘匿されている二課の存在を公開した。

当然、一般人である立花家では、秘匿されていることそのものが分からないだろう。

さりげなく、先ほど緒川が二課を隠していたことにすら気付かないかもしれない。

だが、局長自身がそれを公開すること。

それには大きな意味があつた。

「率直に言えば、ノイズ災害に対応する組織です」

周りの非難も気にせず源十郎は続ける。

「翼さんのその格好がそれなんですわ、ライブでもしてましたし」

「え……？ あ……ああっ!？」

「翼、戻していない事に今気付いたのか」

「迂闊でした……申し訳ありません」

「今日はシヨッキングな出来事目白押しでしたしね」

緒川がさらりとフォローを添えるのだが、一つ付け加えると、台所に隔離されたシヨッキングな視覚的暴力がまだ一つ残っている。

咄嗟にシンフォギアを格納し、普段着に戻るのだが、そんな魔法少女みたいなことを目の前でやられたら普通の人はぎよつとする。

なお、響だけは目をキラキラさせていた。

感想は普通に格好いい、だそうだ。

「彼女が覚えていたのは信用してもらおうには丁度よかったですよな」

ノイズに対抗する技術は強大な軍事力ともなります。

故にその特殊な機材は秘匿されています。

我々の存在そのものも秘匿されており、そのため情報管制をあちらこちらに渡って敷いています。

ですが今回、それが民意を悪い方へ促したようです。

現在、ツヴァイウィングのライブ生存者への誹謗中傷は、機材や活動の秘匿を優先的にしている我々の責任と言っている面が大きいのです。貴方達家族に謝罪をせずにはここから先に、何もできません。改めて謝罪を。私達は、無頓着過ぎた」
そう言つて、再度頭を下げる源十郎。

しかし、このような逆境には女性の方が圧倒的に強いのだ。

響の母は、ひとまず謝罪は受け入れた上で、追求した。

「それだけではないのでしょうか？ 今まで黙っていたのだから。今回の事件だって、何が無ければ、そのまま私達に関わって来なかつたんでしよう？」

彼女は、謝罪には対応したが、それはそれとして、追求すべきはやめなかつた。

淡々と、事実だけが知りたいのだと。

「ええ、その通りです。なんの弁明もありません。問題は、ノイズに対抗するための機材と、他のノイズにしか攻撃しなかつた星型のノイズの変化なのです」

「星型……ああ」

「あー、さっきの！ ちゃぶ台の下から出てきたんだよね」

「えっ？」

「えっ？」

「えっ？」

翼と緒川、それに黒服まで思わず声をあげてしまう。

ちやぶ台の下から出てきたノイズ。絵面がシニールである。

しかし、イメージだけでそれなのだ。実際、それを目の当たりにした立花家はいったいどれほどのシニールを味わったのだろうか。

「やっぱりですか……」

「やっぱり、とは？」

違う反応をしたのは源十郎だった。

「申し訳ありません。弁償しますので」

「はい？」

と言うや、拳を振り上げた。

突如、衝撃波だけでぶち抜かれる天井。

目を丸くする立花家の面々は、さらに驚かされる事になった。

べによつ、と言う音を立てて、青い星型ノイズが天井から落ちてきたのだ。

「こう言う事です。奥さん。御宅のお嬢さんは、この星型ノイズに守られているのです」
ウンウン、と頷く青い星型ノイズ。

咄嗟にシンフォギアを発動させようとする翼だが、相対する前に、そのノイズは床に沈んで行った。

ノイズ特有の位相差障壁である。

「前回のツヴァイウィングのライブでは、我々も大きな被害を受けました。

何より、こちらの翼同様、ノイズに対抗する機材を取り扱える天羽奏が重傷を負ったことが大きかった。

そして、経緯に差異はありますが、娘さんとあの星型ノイズは、どちらもその機材の飛散した破片をその身に受けたのです。

その結果、星型は意思を疎通し、統率行動の出来る同形機を自己増殖する機能を獲得しました。今の青い個体も、そのうちの一体でしょう」

（叔父様、何事もなかったかのように続けた……!?!）

つまり、こう言っているのだ。

特異災害に抗することが出来る得体の知れないモノがああノイズと響の体に潜り込んでいて、あまつさえそのせいで常に響はノイズに監視されているのだと。

例え守る為であったとしても、そう知った人間が好感を感じるなどあり得ないだろう。

助けられたセレナでさえ、初期はそうだったのだから。

「娘は……どうなるんですか……」

「少なくとも、今のままではすぐどう、と言う事はないでしょう。ただ先程、娘さんとあ

のノイズは共鳴反応を引き起こしていました。そして、今まで人には攻撃を示さなかった星型が今回動いた事を鑑みるに、あの星型は、娘さんを仲間だと認識しているとしたかと思えません。

そして、中傷を受けたのは今日が初めてと言うわけでも無いのに、今回初めてこんなことが起きたのは、今日が格別ショックな出来事があったからでしょう。

ならば、あの星型達は、彼女の感情に大きく影響を受けると言うことを意味していません。

おそらく、娘さんは無意識にあいつらを止めていたのでしよう、今回の暴れ方、客観的にみれば、我慢の限界が出来なくなった故の爆発、と言うようにも見えなくはありません。

ですが、娘さんの良心的な性格が功を奏したのか、今回、被害者は誰一人擦り傷以上の傷を負っていません……まあ、心の方はどうか、というは無事とは言えないかもしれませんが。

ですがもし、お嬢さんが敵意や憎悪と言った負の感情を大きく持っていた場合……被害がどれ程のものだったかは想像すら出来ないものだったでしょう。これだけの悪意の中で良心を保ち続けた。奥さん、良い子を育てられましたね」

「娘を、どうするのですか？」

母は、響への賞賛を切つて捨てた。

本題を話せと。

母は、強いのである。

「こちらとしては、プライバシーを侵害しない程度の距離を保つて保護していきたいと思つています」

「娘を守るため、ではないですね」

「ええ。彼女が理不尽な中傷を受けたとき、過剰報復が起きないために」

「娘を、拘束するつもりですか？」

現状、響達が心無い悪意を受けるのは避けられない。

ならば、そんな民衆と響を物理的に離れた方が労力、リスク共に少なく済むのだ。

大多数の安全を保つ為ならば、響の自由意志など有つて無いようなものだ。

その可能性は決して低くは無い。

当然、警戒されている事に源十郎は一度だけ目をつぶり、告げる。

「信用していただけないのは重々承知しています。ですが、先の言を翻すつもりはありません。彼女に拘束を試みて、それを不服だと星型ノイズが判断すれば、ある意味平和的闘争状態であつた私達の関係は一気に崩壊し、戦争が始まるでしょう。」

何より、彼等は常に見ているのです。この会話も、聞かれていますし、何よりも——」

源十郎は、それまでの社会人用の対外的面持ちを崩し、その表情を普段の豪快なものに戻した。

「俺がそうしたくない。現状の打破を責任を持って実行したいと思います」

この場合、彼は最も有効な手で出たと言える。

腹芸を出来るが好まない彼らしい交渉。

誠意こそ最大の策略。

意図して居なくても、大正解だったのだ。

峠は越えた。

幾分か表情が和らいだのを認めた源十郎はずっと気になって居たことを聞こうと思っていた。

「ところでご主人ですが、外の人達とは少々毛色の違う様子でしたが、いったい、どうされたんでしょうか」

はつきり言おう。

物凄く言いたくなかった。

何故こうなったのか、と言う経緯も恥を晒すものだし、既に見られているとは言え、それを改めて口にするのはもつともつと醜聞極まり無いのだ。

しかし相手は国家権力。

さらに言えば下心があるとは言え現在の苦境から脱却する支援を受けられる可能性が高いのだ……娘に将来の不安があるとは言え、現在の自力でどうにもできないよりはるかに良い。

即座に羞恥と得られるメリットを天秤に掛けて、メリットに比重が寄るまでコンマ零一秒、ならば、呑んでくれてかつて惚れた面影のかけらも無くなっている男の最後の誇りなど綺麗に掃いて捨ててしまえばいいのである。

「実は——」
聞いて。

源十郎は先の自身の言が正しかった事に確信する。

信頼していたであろう父親にまでノイズからの生還を責められた。

それはまだ、翼よりも幼い少女にどれほどの精神的ショックを与えたのだろうか。

それまで静観していた星型ノイズが一斉に動き出したところから見ても、それは相当なものであつたのだろう。

だが、それでも響は憎しみからの報復は願わなかつた。

死者が出ていないのがその証拠だ。と。

意図せず、そう誤解されている事に、その話を聞いていた未来がぎよつとしていた。

ハイトは、逆にこれは良いかもしれんぞ、と未来に意見を述べる。

もう、付けられた目を離せないならば、守らせる方に使えば良い。

自分達の戦力を、一種の脅しに使えると。

未来には告げていないが、マスターへの捜査の手をそらすことができた、という成果に頷いていた。

まあ、現状のアレが報復では無いとは言い難いが、あのような発想はあの少女のものでは無いだろう。海星供の独自の思考だと呼んでもらえばありがたいのだ。

というか、むしろどっから出てきたあのアイデア。

アイデアの出所が親友宅の謎ムック本だと言うことは永遠の謎であろうが、彼の感情がハイトと一致していることはあつた。

「奥さん。一つ、提案が」

「え？　なんでしようか」

「少し減入っていたとはいえ、ご主人には根性が足りない」

「……は、はあ」

「ですので、ご主人の新たな就職先を兼ねて、俺が根性を入れ直して行きたいと思いが、よろしいでしょうか」

「あ、どうぞご自由に」

よく分からないが、夫に関する事ならどうでもよかつた。再就職して給料も入りそ

うだし。

どうぞどうぞ、と手を差し出すと、源十郎は景気良く台所の封印を解き放った。

「え、へ？ あ、きやあああああああッ！」

今度は緒川セーブが間に合わなかった。

完全に硬直した翼の視界を緒川が悔やみながらも毛布的なもので覆う。

なんか暴れだした鶏を沈静化させるような姿である。

ずしーんずしーん。

響の脳裏に、そんなマシンの足音が幻聴で聞こえる中、台所に入った源十郎はネギそのままにズボンを履かせ、軽々と抱え上げた。

「お、お父さんをどこに連れて行くんですか……？」

だが、父親をどこかに連れて行くと言うのなら黙ってはいられない。響は思わず継り付き、声をあげた。

これ以上、何も奪われたくはなかった。ただ、それだけだったのだ。

「うむ。君、名前はなんて言うのかな？」

そんな響に、源十郎は成人男性一人を担ぎなら軽々と膝を屈めて響に視線を合わせてきた。

そんな、他人に対等な態度を取ってもらうことが久々で、少し嬉しかった響は、元氣

良く答えた。

「響……立花、響です！」

「響君か。うむ。お父さんは俺の下で修行をつけるつもりだ」

「しゅ……修行ですかッ!？」

「そうだ！ 次にお父さんが帰ってきたら格好良いお父さんに戻ってるはずだからな！

楽しみにしててくれ！」

この二人、中々にノリが合う。

それに、パイプとして繋ぐならば、肉親を抱き込むのが丁度良い。

根性を叩き直す意味合いで、徹底的に下積みから叩き上げるつもりであった。

つまり——

「え？」

「気絶したふりなどバレバレだ」

家族に見送られ、車に乗り込む際に、耳に届いた声に担がれている男——立花^{あきとら}洗は

ギョツとした。

灼熱化したハイトに掴まれ、火傷の跡が残る額以外は無傷なのだ。

尊厳は失ったかもしれないが、あれだけの醜態を晒したのだ。今更葱ごときで何が増

えるわけでもない、と本気で源十郎は考えている。

「約束したからな。再び格好良い父として帰れるようビシバシ鍛えてやる！」

「ええ!!? 鍛えるのは本当なのか!」

「当然だろう? それに、これから響君は本当に、大変になるかもしれないから……」

洗とて、娘への愛情は消えていない。

ただ、打たれる事に対しての耐久度が娘より低く、追い詰められたら娘のためになることどころか自分の事しか考えることが出来ないほど弱かっただけなのだ。

それはそれとて情けないが、彼は響がノイズに襲われて助かったときの感動をまだ覚えてる。

「まあ、それはそれとして規則だからな」

「え?」

がちやんつ、と手元から金属音が響く。

見下ろせば、ごつつい手錠。

「これから、外に情報を漏らせば泣いたり笑ったり出来なくなるような所に行くからな? しつかり気を引き締めておけよ!」

「おわあああああああああああッ!! 助けてくれええええええええええええええええええええ!!」

なお、翼はその後ろの席で固まったままだった。

視界はタオルで隠されているためか、大人しく座っている。

それを最後まで見送った妻はすごく現実的に。

「弁償、本当にしてもらえるのかしら」

「うわー！ 真上の私の部屋の床にまで穴空いてるー！」

家の中から、聞こえてくる響く響く音を背に、源十郎に穴を開けられた家の修繕費について考えていたのだった。

あわよくば、このままリフォーム出来れば、などと考える程には強かだった。

なお、シクシク煩い棺桶達は二課の黒服の皆さんで頑張つて撤去しましたとさ。



「——という訳で、今日から雑用兼下つ端の立花洗だ！ みんなビシバシこき使つて

やってくれ！」

「何だろう、この怒涛の勢いで流されまくったらここまでできてしまった感は……」

用務員用作業服を着てなぜか司令室で案内されている洗。

うん、怒涛だった。怒涛の勢いで職員になったのである。

なお、火傷他、簡単な治療だけは施されたいる。

しばらく跡が消えない程度であろう火傷であったし、ハイトやら、源十郎に雑に扱われて全身くまなく痣だらけだったからである。

なお、司令自ら連れて着たので、新人参入時恒例のサプライズパーティは起きなかったようである。

ここの就職環境は、想像していたものより、ずっと良好であった。

規約や秘密事項の多さには正直ガクブルものだが、自分は下っ端だしそんな重要なもの……ないよな、ないよな、と思っている。

正直、シンフォギア関連だけで国家のトップクラスの機密です諦める、はい。

その点を抜かせば、家族へのフォローも万全だし、何より、これからどうなるかわからない響の医療的各種フォローがなされているのが本当にありがたかった。

だが、世の中そんなに甘く無い。

二課職員の認識は残念にも統一されていたのである。

「ああ、ネギの人」

「ネギの人ね」

「ネギの人だー」

「ウツがああああああああああああああつ——!!」

「ネギうるさい」

「ネギじゃねえーツ!」

「いや、ネギ以外の何物でもねーし」

ネギの人。

もうそれで全部説明出来てしまうのである。

全て、知られていたのだった。かなり年下の女性職員にまで。

娘が感じていたものとは少し違うが、これはこれでかなり羞恥で恥ずかしいものがある。

しかし今更、まともな転職などできようか。

「司令、至急司令室へとのことですが一体……」

後ろから、翼が司令室に入って着た。

源十郎は、改めて翼にも洗を紹介しようとしたのだろうか。

「なっ……!」

遭遇。

赤面。

「なっ、なっ、ななっ……………」

まあ、もろ見ちやつたしなあ。ネギ。

「顔から羞恥がお焚き上げーっ！」

「あっ、ちよっ、待アーッ！」

頭から蒸気を吹き出した翼は、ちよつと不思議な言い回しを叫びながら司令室から走り去ってしまった。

「あー。ネギさん、翼ちゃんにネギ見られたもんねー」

「娘さんと二つしか変わらない娘にネギ見せるとか、ちよつと凄いわよねー」

「ないわー、ネギってナイワー」

「よし、今日の業務が終わったら映画鑑賞一本だ、修行もきっちり並行していくからなー
！」

「うわあああああああああああああー！」

思わず頭を抱え、絶叫する。

洗の秘密組織下っ端生活は、前途多難そうであった。

そしてそれを、壁の中から見ているものがあるとは、そんな精神状態で気づくはずも

なかつたのである。



「なんでやねん！」

ビシッとミクの手刀が振るわれる。

当たってるぞ。いや、ミク、それよりなぜ漫才のツツコミを急に？

「いやだって、何で修行?!」

盲点だったな。確かに、葱による治療も必要だが、やはり肉体を鍛える事が一番の精神治療に役立つものだからな。

「そう言う脳筋は今シャラップツ！ その日のうちに就職決定って、それでも国家組織かつ?! と言うより何あそこ！」

あそこ、とは？

「リディアン音楽院の地下に秘密基地があることだよ！ 何で!? よりによつて音楽学校!? 学校が変形合体してロボットになつてももう驚かないよッ!?」

なんだそれ、見てみたい。まあ、真面目に言うならば、ノイズに対抗するものは何故か歌が関わるのだ。

ならば、優秀な歌い手を探すと言う意味では音楽学校が近くにあるのは都合がいいの
だろうな。

「私、歌い手、つて言い方嫌いなんだよね。プロの人は歌手だし、歌い手つてのが、ただカラオケネットに上げてるだけなのに、私いかにも歌えますから特別ですよー的なイメージ出して。どんなにプロより上手くても素人でしょ? なんで原曲歌つてる人や作つた人に対して上から目線になつてるの? オタサーの姫か」

どこに向かつて言つてるか分からんが、そのぐらいしておくがいい。

それとだ。このまま響父の新生活を監視するのを継続するのは良いとして、あの時普通に通にスーツだった男がいただろう。

「ああ、一人いたね。翼さんのマネージャーなのかな?」

あれには恐らく気付かれています。何故か報告はされていないようだがな。

「え?」

昔、先王に喚ばれた者のうちに忍者が居たのだ。あの男はそれと同じ空気をまとつて

いる。ほぼ間違いないだろう。

「忍者つて本当にいるんだ……」

俺も幼い時ぶりだから驚きだ。

そう言えばミク。

「ん。なに？」

しばらくセレナを見てないが、あの謎空間か？

「そう言えば、そうなんだけど、しばらく見てないかな——と、噂をすればなんとやらだよ、今開けるね」

セレナの要望によりムーンムーンと開くエメラルドの門。

「ぶうわあああああああ!!」

だが、先陣を切って放出されたのは本体ではなく悲鳴と涙と鼻水であり、その全てが俺に炸裂した。

うわあああああ、流石にこれは……ばつちいにも程がある。擁護できるものではない。

セレナが泣きながら飛び出て来たので、俺は真正面から色々ぶつ掛けられる事になったのだ。

「あ、ごおめえええん……」

ミク、済まないが何か拭くものを頂けないだろうか。セレナはいい加減泣き止みなさい。泣きたいのは俺だ。

「ああ、うん。それはそれとしてセレナつて感情表現素直で可愛いよね。ほら私たち現代人はスレちやつてまあ、そういうのあんまりなくなっちゃったから……」

ただし響は除く、と？　ところで名前あつてる？

「聞いてくるときは大体あつてるよね……ん？　ちよつと待つて？　なんで二人ともジリジリにじり寄つてくるの!？」

「いやあ、流石のスレた現代人も、共通事項で盛り上がれば感情の振幅爆上がりなんじゃないかね、と」

わざわざ俺の正面に門を開いてくれたりしたのでどうしたものかと。

「ちよ、まッ!？」

この時、俺とセレナの意見は一致していた。

ミクに飛びかかるねつとりした俺ら。

ミクも遠慮せずねつとりするがいい。

『『ハイト、お座り!』』

ふぶおあッ!?

なあんと、ここでマスター権限の絶対遵守だとお!?

出鼻を挫かれ、俺は床に叩きつけられカーペットに染みを広げる。

それを見たミクののしまった、という表情（気配で察知）は大きな隙だった。

「食らえ美少女、水も滴る美少女になるがいい！」

「それ自分の顔偏差値ちゃんと自覚して言ってるツ——ってびやああああああああ
!!」

「へえい、美少女、クンクンペロペロだぜぐへへへへ！」

「やめろお！ 私はノーマル（響別格粹）だあ！」

半ばキレているミクの怒声が悲鳴に変わること、俺は床に貼り付けられながらも勝利した事を確信したのだった。

ミク、あとそのセリフは微塵も説得力がねえ。

その三十分後、軽いシャワーと着替えを済ませた二人と、洗面所で丸洗いした俺が集合し、改めて意見交換会が始まった。

「ところで、何があったのセレナ」

「究極聖遺物『特訓君』が鬼畜過ぎるんだよ……」

「ゴメンな言ってるかわかんない。セレナのお父さん、解説求む」

ミクの中では俺は完全にセレナの父粹だな。

「いやだって、日に日に似て来てるし、二人とも」

「そうか？」

「自分じゃわからないだろうけど、本当そつくりだよ」

「いやね、未来。お父さんはちよつと……もつと、ねえ」

「お父さん、解説お願い」

「聞いてよ未来！」

「楽しそうだなお前ら。まあ、飛ばしているところを説明するならば、セレナは時々どんな機能が分からない先史時代の遺物を鼻歌で稼働させて毎回大騒動を引き起こすんだよ。」

「なんだ自業自得か。セレナギルティ。長つ鼻ノイズの臭い汁の刑ね」

「やめてそれ初めて聞くんですけどなんなんですかその聞くだけで身の毛のよだつ恐ろしいの!？」

「読んで字の如く。今回、ハイトに卵ぶつけた屑コミが受けた恐ろしい処分だよ。セレナつてばネギの後すぐ興味なくしてたしね」

「未来の笑顔が超怖いです。でもハイトに卵ぶつかけやがった奴ならむしろ軽い。私ならIさん辺りに抱擁させる」

「殺す気か。」

「そうだ。卵と言えば。」

俺にぶつけられた卵が目玉焼きになったろ。

「ハイトって前セレナが言ってたけど、感情が高ぶると体温上がるとだよね。でもまさか卵焼きができるほどとは思わなかったよ」

「え？ 卵焼けるの!?! いや、火を吹いて空飛んだぐらいだしそれぐらいはできるかー。で、その卵はー?」

「その机にある小皿に乗せてる。ってわあああああああ躊躇なく食べたあああー!」

「いやむぎむぎ……塩気がないねえ」

そりゃあな。

「特訓君との激闘というか逃亡劇でカロリーがすっかり費やされてしまいましたしてお腹が背中とくつつきそうなんだよ」

「その台詞、響がデジャヴるからやめて……いや、だからって卵のハイト焼きなんてゲテモノ……」

体で焼けたからってたかが目玉焼きをゲテモノ扱いするのはやめて欲しいのだが。

「ねえ、未来」

セレナは正面からミクの両肩を掴んで目を合わせた。

ハイライトが仕事をしていた。ミクがびくりと身を震わせるが肩を掴まれて

いて逃げられない。

「姉さんもよく、とやかく言ってたけどね……………栄養はゲテモノ肉でも変わらな
いんだよ。知らなければみんなおいしそうな顔するし。つまり実際美味しいんだよ。
栄養だつて変わらないし」

「うん。響違つたね。デジャヴ無かつたよ…………私、セレナからは食べ物貰わないように
するね」

「え？ 未来だつてこの間カラ——」

「そう言う楽屋裏はいらないます!!」

ミクは全力でネタバレをシャットアウトした。

カアー、カアーと鳴いているセレナがすごいネタバレしているとしか思えないが。

俺としては、セレナは姉であるマリオに一体どれだけのものを食べさせたのか非常に
気になる。

そして、そんな食生活に抵抗が全くなくなるセレナの幼い頃の過酷さに心が痛んだ。

ああ、正直に言おう。思考を逸らした。

そうだミク。この、発熱の原因となつた俺の感情だがな。

「え、怒つたんでしょ？ あれで怒らなかつたら人でなしだよ」

そうだな。確かに俺は怒っていた。

「……なにが言いたいのかな?」

無論、先程知った、伝えねばならない事を。

今まで、使い魔の使役で起きなかつたものだから気にも止めていなかったのだが、ミクの内々海星型ノイズへの適性を舐めていた。

俺達の性格など度外視する程に、体の相性が良過ぎるのだ。

「その言い方やめて!?!」

「ハイト何言つたんだろう……」

俺は確かに怒っていた。

だが、些か激し過ぎたとは思わないか? ミクでないにも関わらず、これほどな事に

疑問はいだかないか?

非道ではあつても、我を失う程ではないはずだろう。精々が『ウルク式ブートキャン
プ・ノイズエディション? 筋肉以外泣いたり笑つたり出来なくなるよ、やつてもいいけ
ど疲労困憊からのノイズ鬼ごっこスタート』に勤めて淡々とぶち込むぐらいだからな。

「充分鬼畜だ!」

だがな、ミク。

怒りと憎悪は別物だ。

俺は兵士の自負がある。

例え屑でも、憎悪では殺さん。

その俺が我を忘れる程に激情が全てを塗り潰しかけた。

どうしてだと思っ……？

「どうしてって、言われても……」

分からないか？ ……アレは、俺とミクに間に繋がれたパスを通して来たミクの怒りだったのだよ。

熱した金属が熱源より離れている部位にも素早く熱を伝える様に。

凄まじい熱量だった。

塗り潰されかける程にな。

それ程に……あの娘が、大切だったのだなのがよく伝わって来たぞ。

うん、うん、と頷いていると、ミクがなにやら赤面している。

どうした？ 今更ミクの気持ちなど、ここに居るみんなにバレバレだぞ？

「いや、だって……頭で理解しているのと気持ちが変わるのじゃ全く以って別物だよ！」

ああ……確かにそれは、直接胸の内を感じられて居るのは、恥ずかしいわな。

「ああ、もう！ 私の胸の内ダイレクトピーピングトム、壁に耳あり障子に目あり!? 個人情報保護法どこ行ったの!? それだけじゃないよ！ 今回みたいに私の感情に影響

受けるなら、ハイトが影響を受けて——」

その点だけは安心しろ。

それだけは言わせるつもりはない。

私にも、そう疑われる事さえ憚られる事はあるのだ。

「え、でも、信じられません、今回だって」

ああ、だが、これだけは自負を以って言えるから大丈夫だ。

「なにが……」

俺は、妻一筋だ。

「え、居たの？ ……そういえば、子沢山だったそうだし、そりやそうか」

当然だが、もう……生きては居ないだろうがな。

「二人ともなんの話してるの？ 流石に分かんない。子沢山？ まさか殴って増える

のあれ子供なの？」

「私が怒ると、海星のみんな怒るから、感情はコントロールしなさいって」

「うーん……違つては居ないけど、全部言つて居ないような、そんな感じだよね」

「ゴメン。流石にこれは恥ずかしくて……」

そうではないのだろうか、何か隠すことがあるのだろうか？

「いやー、でも、響ちゃん盗撮してる時の未来の表情より恥ずかしいのは早々無いと思う

よっ。」

ホラ、と、スマホに映る性犯罪者面のミク。

「……」

「……」

「はっはっは……」

「うふふふ……」

「殺してでもそのデータ消してやるうあああああああああー！」

「はっはっはーこんな良いネタ消せるもんかい、いつも陸上部の身体能力差でゴリ押しされるけど今の私は特訓君で鍛えあげられているのだ、ただのブラクラジビエ趣味者だと思ふなよっつてうわいつもよりアレ力強くね？　ちよちよちよ、脳内ハジけてない、て

——」

「フウンツ!!」

「うおわーッ！　私のスマホまさかまじでなににするうわやめ握り潰したあああああああ
あたしのすまほおほおほおほおほおッ!!」

消去（物理）である。

大分セレナも慣れて来たなー、と安堵する。俺が不要になるまであと少し、だろう。

響、と言ったか。

「つまり、あの子は星型ノイズ達のお姫様、ってことよ」

「うちの娘がなんか凄い事になっていた件について」

「はいネギは黙ってて。」

「ネギ言うなああああああアツ!!」

「そうか？ 俺は結構イメージが分かりやすくっていいと思うぞ、洗」

「司令は悪意が微塵もないのが逆に厳しいんですけど!？」

さて、ここは櫻井良子のラボである。

集っているのはラボの主、良子と特機部二の司令、風鳴源十郎そして組織の底辺、立花洗である。

三人の話題は、洗の娘、響の事であった。

実は、この研究室は盗聴されても謎の異音が混じって聞き取れなくなる異端技術が使われており、海星達も見ることぐらいしかできないのである。

「大変よー。でもとつても興味深いわね。あの子の負の感情が高まれば自然と星型ノイズ達が襲いかかってくる。しかも、空間も何も超えて湧き出てくる訳だから、機嫌を損ねただけであの軍団が文字通り飛んでくるって事。迂闊なことは出来ないけど、あの子が良心的な気質だったから今まで発覚しなかったんでしようね」

「まさか、うちの娘でノイズを操ってノイズに対抗させるつもりじゃないだろうな」

「それはそれで問題があるのよ。星型は通常のノイズを材料に仲間を作ってる訳だから、戦えば戦うほど数が増えてあなたの娘の脅威度が跳ね上がっていくの。それはあなたも望んではいないでしょう？」

誰だつて、国に睨まれたくはない。

既に目はつけられているのだが。

「まあ、それを抜きにしても、一回調べる必要があるわ。体内に潜り込んでいるガングニールの破片がいったいどんな作用を引き起こしてこんな風になったのか、これ以後あの子に影響がないなんてなにもわからないんだから。それに——」

アフヴァアッヘン波形が感知された。

恐らく、星型の頭に刺さっているガングニールだけではなく、彼女ののものも。

明らかに、共鳴していたのだから。

「雑音……んー、ノイズだけど雑音って言うより、今回の騒動を見るに騒がしい奴らだし騒音ってところかしらね」

「何がだ？」

「コードネーム。あなたの娘はあのノイズ達の女主人。ノイズって言っても星型だから通常のノイズと差別化するためにちよつと変えて……『騒音の女主人』ミストレスってところかしら」

「……娘のイメージに全くそぐわぬのだが」

「まあ、親なんて得てしてそんなものよ。親にとつては子供はいつまでたつても子供にしか見えないもの——でも子供って勝手に育つのよね」

「まあ、偉そうに言っている割には言ってる方が親どころか独身な訳だが」

「源十郎君そこだーまってるー。でも、話戻すけれども、本気で一回検査して見るべきね。どんな状態になっているのか確認しないと、安心することさえできないものね、お父、さ、ん？」

「あ……ああ……」

娘に情けない事をしてしまったら手前、気まづくなる洗だったが……。

響が心配な事も正直、本音であるのだ。

そのため、定期的に響は二課の息がかかった医務局での健康診断を受ける事となる。

加えて言うとかんなことがあっても響への誹謗中傷は完全には無くならなかった……だが……。

不穏な空気が漂い始めると物質透過して来た星型がネギでハイドアタックを仕掛けてくる恐怖が蔓延るようになった。

みつくみくにしてや——？

「言わせるかああああああああああああつ!!」

ハイトが洗にやったのが、彼らの中でブームになったらしい。

彼等と視界を共有している未来がその度に悲鳴をあげるので、響にまた生暖かい目で見つめられるようになる。

そして年月は過ぎ行き——

響はリディアンに入学し。

その裏を知っている未来は、例え知らなかりうが当然の如く共に入学し。

セレナは相変わらずハイトとじゃれあっていた、そんな春のある日。

大きな転機が訪れる事となる。